

黄昏より昏き以下略を  
貴様に唱えさせてやろ  
う

充椎十四

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

負の感情がどうのこうのという設定に覚えがあったので記憶を探ったら、スレイヤーズの魔族の主食だった。

オリ主≠主人公。オリ主の存在で生じるズレがあっちこっちに影響を及ぼしていく話。

# 目次

黄昏より昏き以下略を貴様に唱えさせて やろう	1
その2 (任○堂は神、はつきりわかん ね)	18
その3 (われらがすばらしきとき)	31
その4 (オールドボーイ・ミーツ・オール ドガール)	43
その5 (ばたふらいえふえくと)	53
その6 (大人の階段上る)	63
その7 (人を呪わば)	74

その8 (引きずり込め! 魔道師さん!)	88
その9 (オタクは感染する)	98
その10 (結局ジューピターは不在)	110
その11	123
その12	136
その13	150
その14	160
その15	167
その16	177
その17	189
その18	201

301	その27	(お呼びでない急転直下?)	
	その26	(掌編)	
	その25		291
	その24		277
	その23		269
	その22		260
	その21		249
	その20		238
	その19		226
			213

# 黄昏より昏き以下略を貴様に唱えさせてやろう

リナインバースが悪いものいぢめを繰り返した時代よりも一つと後のこと。竜神とほぼ相討ちで封印された赤眼の魔王・シャブラニグドウの欠片の一つを宿して生まれ天才魔道師（自称）リタ・ギニヨレスクは、自分の身に宿る魔王のかけらパワーをどーにか自由に使えないか長年思案し続けていた。

——とゆーのも、このリタ。平和な二十一世紀日本で平々凡々と過ごしていた記憶を有する女の子だったのだ。強いパワーが自分の体で眠っているだけというのは、リタのもつたいない精神が許さない。あと地球でスイーツとかブランド和牛とかを食べたい。シャブラニグドウが封印されてからそろそろ七千年が過ぎようとゆー頃なので、もうシャブラニグドウもだいぶ弱体化してるんじゃないの？ 目覚めようとしても逆に私が支配してやんよ！ とまあ、自称天才魔道師のリタ様は考えた。立つてるものは親でも使うし、自分にくつついているものは魔王でも利用する。かのリナインバースほどではないが、リタもかなりふてぶてしい。

膾切りか八つ裂きかは知らんが竜神により七分割され、人間の魂にくつついて転生を繰り返すことで自然消滅……なーんてまだるっこしい方法でしか倒せないくらい強

かった（過去形）魔王でも、流石にそんな目に遭わされて七千年も過ぎればかなり弱体化してるはず。いけるいける、私ならいける！とまあ、あんまし根拠と言える根拠がない自信でもってシャブラニグドウとの陣取り相撲をしたわけだ。

ところで、メタいことをゆーけども、ここで魔族とはなんぞやという話をしよう。

魔王以下たくさん魔族は「今日も元気だ！ さあ世界を滅ぼすぞ☆」とゆー本能的な思考の持ち主だ。なんでそんな思考の持ち主なのかなんてことは深く考えちゃいけない——この世界全てを作りたもうた『混沌の海にたゆたいし王』ことロード・オブ・ナイトメアが「そうあれ」と作ったから、そーゆーものなのだ。疑問を口にしたら首が飛ぶかもよ。

で、混沌の海に立っている棒の上に乗ってるお皿が「この世界」。混沌の海から生える世界は一つだけじゃなくてあと三つはあるから世界ごとに王がいて神がいるけど、全ての創造主は『混沌の海にたゆたいし王』。お名前を呼ぶのは不敬なので上司様と呼ぼうね。

話は少し戻って、そんな破壊衝動しかなさそうな魔族は二つの姿を持っている。一つ目は、精神世界と呼ばれる、ざっくりゆーと私の強いやつが勝つ「魂がむき出しの世界」での姿。精神世界での姿が魔族の本体で、とある中間管理魔族を例にあげるなら「黒い錐」とか……まあ、人間とは全く異なる姿をしている。

もう一つは物質界——つまり人間が暮らしている世界での姿。物に触れたりなどりするのに人の姿を取る方が便利だからか、中位以上の魔族は物質界で人っぽい姿を取っている。下位魔族はヒトっぽい肉体を作れないから怪物になったり、下位より弱いと動物に憑依したりんだりラジバンダリ。

同じように人の姿を取っているなら魔族にも物理攻撃が効くはず、なんて思ったら大間違い。魔族に対して効果がある魔術は限られていて、精神に影響を及ぼす魔術しか効かないのだ。

細かいところは違うけど分かりやすく言うなら、物質界での魔族の姿はゲームでゆるゆるのアバター。斬りつけられようが何をされようが本体は痛くも痒くもないから耳をほじつてられる。でも対戦相手からホイチャで「お前のアバタイケメンだけどお前リアルではピザデブのブサメンだろ！ 運動しろ！」と言ってきたら、いくら本当の事でも傷つくわな……。これが魔族に対して効果がある「精神魔法」にあたる。

そんな精神魔法もとい口撃が続けばゲームをしてられなくなり非ログインが続く——これが魔族の「死」。気持ちを持ち直せばまた復活するけど、今は時間をくださいとゆるゆるやっただ。口撃され過ぎて本体のピザがメンタルブレイクし、ゲームのハード等を壊してこの世からも引退——これが魔族の「消滅」。

つまり、魔王はじめ魔族のみなさんを倒すには精神魔法を鍛える必要があるわけだ。

リタは自分の中で眠るシャブラニグドウを押さえ込むため、精神魔法の習得を頑張った。どれだけ頑張ったかと言えればかなり頑張った。一般的な攻撃魔法などいらぬ、私には精神魔法ただこれひとつあれば良いとばかりに精神魔法ばかり鍛えて——それで、食欲とゆー心のパワーでもって、シャブラニグドウを逆に自分の力として取り込んで魔王（仮）になっちゃったのだ。

これには魔族もびっくり目を剥いた。七千年が経っていようが魔王は魔王、魔王の部下である獣王らより千倍は強い存在だ。それを取り込んだやばい人間（）などこの世界にいつかは困る——リタに続けとばかりに魔王のかげらを取り込む奴らが現れてしまつては魔王消滅にチエツクメイトがかかつてしまう。でもリタは強く、高位魔族では倒せない。

ならどうするか。

「別の世界に行きたい！ 地球の日本って国！」とか良く分からないことを言っているリタを魔族の手元で保護して夢を応援し、リタの所業が他の魔道師らにバレる前にこの世界からバイバイしてもらおうとしたのだ。へこへこと頭を下げ揉み手を隠すこと無くリタをもてなしたのは中間管理魔族こと獣神官ゼロス——ドラゴンもまたいで通る破壊神ことリナインバースとの付き合いがあつた苦労性魔族だ。

ゼロスから見たリタは「地球に行つたらー、なにわ黒牛食べるの！ 伊勢志摩サミツ

トで出たつてやつ。そんでみかけ山手口〇ルのプリンも食べるんだー」なんて訳の分からないことを話してるところ以外は常識的で話を通じる相手だった。こんな食欲以外はまともな女の子が魔王を取り込むなど信じがたい——でも、実際に彼女はシャブラニグドウの自我を消滅させてしまった。

ゼロスが一挙手一投足に気を使い続けた日々はだいたい三年くらい。こんなに早く「全くの」異世界への道が見つかって良かったね。

もうこつちに帰ってこないでねと手を振られてリタが生まれ故郷を旅立ったのは、彼女が二十一歳の時。

二十一歳なだけに二十一世紀に行けるだろうなんて甘つちよろいことを考えてたりタは、ようやく帰りついた魂の故郷ジャパンで、膝から崩れ落ちた。

星は地球、国は日本、そこまでは合ってた。しかし時代は——なんと平安の始めだったとゆーオチだったのです。ちゃんちゃん。

——それでお仕舞い、なーんてそうは問屋が卸さない。リタ・ギニヨレスク様は仮にも魔王なのだ。人生百年など言うけれど魔族はそう簡単には消滅しないもの。魔王（仮）になったリタの人（？）生は千年や二千年程度で終わるものではなく……鳴かぬなら鳴くまで待てば良いじゃない。

千年も待つのは大変かもしれないが、果報は寝て待てとゆーから寝て待とうじゃない

か。配下の十人や二十人でも作っちゃって寝てる間の世話させれば良いんじゃないかな。ろーか……と考えると、やっぱりダメだわと頭を横に振った。

魔族は基本的に冷酷で、破壊衝動を本能として有している。リタの出身世界ではシャ  
ブラニグドウの配下である五人のうち冥王は同僚の魔竜王を謀殺するわ、そのうえリナ  
||インバースを利用して世界を滅亡させようとするわ、獣王の部下のゼロスは他の魔族  
が目の前で死のうがどうしようが他人事。同族意識も糞もない、とりあえず世界が崩壊  
すればそれでオツケーとゆるーのが魔族なのだ。

それを十人や二十人も作ってみろ、魔力の魔の字も知らない地球は明後日あたりに滅  
亡してしまう。

リタのなにわ黒牛計画はどうなる。ブランド和牛食べ比べが出来ません、なんて許せ  
るわけがない。

作る部下は一人で良いかな……ゼロスのよーに人間世界に慣れてて、パシりに良いヤ  
ツが欲しいな。なーんてことを考えてたせーなのか。

「作る」つもりが「召喚」していて、なんと驚きゼロス本人が来た。

「え、リタさん……? これはどういうことですか!？」

「わざとじゃないのよ。かくかくしかじかとゆるーやつで」

ゼロスみたいなの(パシれる)部下がほしいと思ったら召喚しちやつてたのとゆるー甘い

言葉(?)に騙され、哀れ獸神官ゼロスは元の世界と地球とを往復することになった。たとえ本人の自我が失われていよーが、リタの体に宿るのは赤眼の魔王シャブラニグドウのもの。王の気配の持ち主について対応が甘くなるのは仕方ないのだ。

とゆーわけで、人を殺して回らない便利な使いパシリを得たりタは平安時代の日本を見て回ることにした。北は北海道から南は沖縄まで、現代日本よりコチヨコチヨと複雑な海岸線をした日本を歩き回り、つまり美味しい地元の食材をあちこちで楽しんで——平安の都に戻ってきた。全国津々浦々地元の名産物食い倒れツアーをほってんぼってんまったりゆつくりやっていたからか、リタが初めてこんにちはした時より平安京はだいぶ古めいていた。平安京に遷都してから天皇は五代目くらいだったはずが、なんと驚き、もう十五代目らしい。

期間にして百年以上。日本一周にそんなにかかるくらい日本って大きかったつけ、と顎に手を当ててよくよく考えて見れば、そーいや肌が白くて髪の色も薄くて目が青とか緑とかの人たちの村とかにも行ったよーな気がする。日本ってほら島国だから、海を渡った向こうの島も日本だと思ってたのよね。今から考えてみれば、渡り鳥と一緒にユーラシア大陸へ上陸していたのだ。なるほど。

謎は全て解けた！

さて、それじゃーどこに住処を構えましようかねとゼロスが揉み手した。都の中で良

さげなのを見繕いましょうかと聞いてきたゼロスに、リタはダメダメと首を横に振る。

「あの都これから何回も戦場になって燃えるし、その度に焼け出されちゃ堪ったもんじゃないわ」

「うちに被害が来る前に全員殺して、火も消してしまえば良いのでは？」

「嫌よ面倒臭い」

とゆるーことで、都の様子は見えるけど影響は受けない、とある山のとつぺんに二階建ての家を建てた。一階は部屋の区切りがないカウンター式の酒場のよーな空間で、二階に個室をちよちよいのちよいとな。

本人の集中力と魔力量が物を言う精霊魔法レイ・ウイングは短時間ながら高速移動が可能……つまり、ある程度の山ならレイ・ウイングで楽々登り下りできる。生活必需品を手に入れる手段を残しつつ、面倒そうな都のあれこれから離れて暮らす。あらやダ、とつても気楽！

生活必需品を買うと言っても、家計で一番でかい出費である食費がかからないから生活は気楽なものだ。なにしろ魔族であるゼロスに人間の食事は必要ない。魔族の主食は人の負の感情で、人としての味覚は持っていないのだ。リタはと言えば元々が人間だったため人としての味覚も持っているけど、魔王（仮）でもあるから人の負の感情を美味しく食べられる。どっちも楽しめるなんて最高よねとばかりに山で獲れた肉も都

で拾った感情もヒヨイパク食べるリタはなるほど、食欲でシャブラニグドウに勝っただけはある。

そんな平凡で代わり映えのしない生活を送って十数年。主に香辛料の仕入れのための元の世界と地球を往復させられて可哀想なゼロスが不在のリタの家に、何やら人の気配が近づいていた。

今まで嗅いだことがないほど芳醇な負の感情——気配は一人分のくせに感情の量や濃さは百人分を越える。

一体何が来たのよ、と窓から首だけぬつと出して気配の方向を探れば、なんとびつくり、気配の持ち主は十五、六くらいの少年だった。少年とゆーと「まだ弱いのでは」とか「所詮まだ子供よ」とかバカにする者もいるもんだが、かのドラまたのリナ様は十五、十六の年で既に悪党いちめの名を世に轟かせていた。若いからとゆーだけで見下してはいけない。

元の世界で「かのリナインバース以来の天才魔道師」と称えられていたリタ様は知っているのだ——年齢だけで見下すとバカを見るのよ、と。見下してきた相手にバカを見せてきたとゆーか。

今更ながらリタの見た目について説明しよう。燃えるような赤毛は生まれつきで、赤眼の魔王シャブラニグドウを取り込んだせいで瞳はルビーのように赤い。前は落ち着

いた茶色だったのに。胸はないよりやある方が良いけどデカけりや良いってもんでもない……つてことで、ささやかながら前方に突き出している。良く食い良く遊び良く寝る健康優良児のリタちゃんの四肢はしなやかな筋肉で覆われ、腹筋だつて六つに割れている。大事な外見年齢はとゆーと、シヤブラニグドウを取り込んでから年を取つてないので十八で止まつてははずなんだけど、元が老け顔だつたから二十三くらいに見える。さて、赤毛はもちろんのこと赤眼なんて見たことがないとゆー、黒髪と黒目ないし茶色の目で溢れ返つたジャパン生まれジャパン育ちの者にはリタの見た目はどう映るか。

「なんと、女の赤鬼か」

「鬼？ え、あたしのこと？」

家のすぐ近くに現れた、腕は二組四本、目も上下に二つずつの四つある少年は、その四つの目を見開いて驚きを踵にした。驚いたのはリタもだ——鬼つて何さ。

「あたしは鬼風情になつた覚えはないんだけど……。あんな誰？」

「貴様、俺を知らんのか」

「知らないわよあんななんか。ゆーめーじんなわけ？」

じとーつと少年を見れば、少年は大きく胸を張る。

「俺は呪いの王だ」

「へー。あたしは魔の王ですけど」

そう、互いに王を名乗った。リタからすれば王なんていくらでもいるのが常識だ。セイルーンの王族やらデイルスの王族やら、他にも童王やら獸王やらなんやら。そんなもんで、この地で王を名乗ることの意味合いがまっつったく分かつてなかった。

平安の日本で王を名乗ったらそりゃ、国家転覆を狙う犯罪者だ。百年くらい前に殺された平将門は新皇を名乗ってたし、歴史とかこの時代の文化とかに興味があれば分かったはずのこと……なんだけど、ゼロスならまだしも、飯に興味と関心が集中してるリタがそんなこと知ってたら逆に天変地異を疑わないといけない。

とゆうわけで、京の都からちよつとばかり離れた山のとつぺんに——王を僭称するヤバいのが二人も揃っちゃったのだ。

「魔の王、か。魔とはなんだ？」

「魔ってゆうのは、この世を滅ぼし尽くしたいという意味のことよ。人の負の感情を食べて育つの」

「やはり鬼ではないか。呪いとはどう異なる？」

「呪いがどーゆうものなのか知らないからなんとも言えないわね……あんたが支配してるってゆうその『呪い』ってなんなのよ」

「呪いとは悪意の塊だ。妬み嫉み、怒り苦しみ悲しみ……あらゆる否定的な感情が、人の誰しもが持つ『思い込み』や『念』を核にして形をなしたもの……それが呪いだ」

「ぶーん」

つまり——この世界では人は感情羊の牧場を作っていて、そこで育てられたラム肉もとい負の感情を食べて大きくなる客が魔族、食われることなくマトンにまで育ったのが呪いつてことね、とリタは納得した。酷い理論だ。

そのマトン代表がわざわざ消費者代表の元にやって来たこととは……どーゆーことなの？

「ま。呪いの王だかマトンの王だか知らないけど、あんた、あたしに何か用があつてきたんじゃないの？」

「いいや、何も」

「へ？」

「この山には呪霊が一体もない。都に近い場所にあるというのに呪霊がないなどありえんのだな。はぐれの呪術師でもいるのかと、その面を見に来たのだ。まさか鬼の王が住んでおるとは」

とまあ、そんな出会いをした二人……二人（？）はまあまあ仲良くなった。なんてつたつて赤毛に赤眼で年を取らない女と腕が四本ある男だもの、世間様とはほぼ没交渉。あらゆる意味で対等な会話相手がほしいなんてわけじゃないけど、気兼ねなく殴り合える相手なんてそうそう見つかるもんじゃない。

年に二度か三度くらいの頻度で呪いの王こと両面宿儺が山に登り、酒やら各地の名産品やらでご機嫌に騒ぐ……そんな気ままな暮らしをしてたら、知らぬ間に遷都から十七代目つまり神武天皇から数えて六十六代目天皇の御代になっていた。といつても六十五代目の御代が短すぎたんだけども。

肉食え肉、なんてリタが鶏肉やら猪肉やら勧めたせーか、両面宿儺はすっかり体格よく育った。ひきしまった胸板は厚く、二組の腕はがっちり太い。年はすでに三十を過ぎたが、この時代の一般的な三十路らしくなく、とつても健康的だ。

ゼロスもこのマトンの王に「良く食べ良く動き良く寝るのですよ」なんて言いながらヒトの食事を用意してやっていた。どーしてかって、両面宿儺は山に来る度、負の感情をみっちりと体に溜め込んで来るのだ。濃い負の感情はリタとゼロスにとつて何よりの御馳走だ。ようこそおいでました、なーんてへこへこ頭を上下させながら林檎を磨いてお出迎えしないと。

両面宿儺の持つてくる話は様々だったけど、ある時——五年くらい前だったか。彼に付き従う部下ができたんだとゆるい話があった。この異形の怪物を慕ってくるとはな、なんて、酒で顔を赤くしながら言った両面宿儺は嬉しそうで、正の感情が漏れてきてリタの頬をちくちく刺した。

まあ、呪いの王と自称したところで、どうしたって両面宿儺は人間だ。なんとその部

下は女らしいし、この時代には親分の嫁を用意したり子を生んだりも部下の仕事の一つみたいなどころがある。リタは「子供ができたら連れて来なさいよ」と両面宿儺の背中をバンバン叩いてやった。

そんな話から六年と少し後のことだった。両面宿儺が呪術師に討たれたと、両面宿儺の部下を名乗る裏梅という女が、大きな腹を抱えて山にやって来た。

「宿儺の子供ならあたしの甥っ子みたいなものよ。生まれた子が男でも女でもあたしが引き取って育てるわ」

「ええっ、リタ様どういうおつもりですか!？」

「簡単な話よ、ゼロス。マトンを『滅っ!』して回ってる呪術師がマトンの王の血を引く子を見逃すわけじゃないでしょ? あたしが育てた方が安全で安心してやつよ!」

生まれた子供は……残念ながらとゆーべきか良かったことにとゆーべきか、両面宿儺のように腕が四本あるでも目が四つあるでもなかった。そこら辺にありふれた、腕二本に目が二つ。裏梅の希望もあって名前はリタがつけた——長宿チリコという。

「両面宿儺様のご遺体を取り戻すんだ!」と都でどつたんばつたんやつてる裏梅が良い塩梅に目眩ましになって、長宿の存在が呪術師にバレることなく十年が過ぎ、十五年が過ぎ……。腕の数と目の数が一般的なことを除けば、長宿は両面宿儺瓜二つに育ってしまった。こりゃー宿儺の子供ってバレるんじゃないかなるか、あわわ……。

だけどその心配はゼロスが晴らした。

「この世界の平均年齢、五十年も生きれば長い方でしょう。宿儺と命のやり取りをした面々はあの時にだいたい死んでますし、心配しすぎでは？」

なるほど仰るとーり！

親の心子知らずとゆーか、リタが長宿の顔について悩んでたにも関わらず、悩める養い親を放置して長宿はほいほい都に遊びに行つてたらしい。ある日なんと呪術師の家の娘を「こいつ俺の嫁」などと言つて連れ帰つてきた。聞けばこのお嬢さん、呪力がカスで術式とか言う生まれつきの技も持つてない。そのせいで親兄弟から糞味噌な扱いを受けていたんだとか。そんななか、扉を乗り越えて屋敷に侵入してきた長宿に救いを見出だしちやつて「あたしを連れ去つて、あたしだけの昔男になつて」と情熱的な……リタには良く分かんけど情熱的らしい口説き文句で愛の逃避行なんてことをしたそーな。

長宿は長宿で、父親の遺髪などを手に入れられないかと仇である呪術師の屋敷に侵入したら、まさかの逆ナンパ。こりや面白くて良いやと連れ帰つてきたらしい。

長宿も長宿だが女の子も女の子だ。類は友を呼んだのか？

二人が納得しているなら反対する理由もないし、リタはそれで良いんじゃないのと頷いた。ゼロスはさして悲しくも感動してもいなくせにハンカチで目元を拭いながら

「子の成長とははやいものですな、ヨヨヨ」なんて言った。

んでまたリタとゼロス二人だけの生活が始まり——十年が過ぎて、五十年が過ぎて、百年が過ぎ……平安時代が終わって鎌倉、室町と過ぎていく。長宿の子孫が訪ねてきたり、山に入ってきて偶然知り合つた者もいたけれど、ヒトの寿命は短く、最近来ないな——と思つたら死んでいたなんてよくある話。

両面宿儺の仇の一族と言つても子孫にはそんな関係ないし、呪術師と交流したりもした。いつまでも姿が変わらないリタを鬼と呼ぶ失礼なやつもいたし、神だ仏だと呼んで崇めてくるやつもいた。

いつの間にかリタの住む山に呪術師が結界を張つていて、神域扱いされていた。宿儺の子孫は今やどこに住んでどう名乗っているかも分からない。

時代はどんどん過ぎ去つていく。矢のよーに、光のよーに過ぎて……あくびをしたら、時代は江戸が終わわり明治大正も経て、昭和も後半に入つていた。

「なあ、あんたがこの神域のカミサマつてやつ？」

呪術師らが金を出して建てた無駄に立派な屋敷にやつて来たのは、長宿の嫁より呪力を持たない——ううん、呪力を欠片も持たない生意気そうな子供。

そいつは、年々過保護になるゼロスのせいで精神世界に引つ込められたリタを……呪術師が誰も気づけないはずの彼女を真つ直ぐに見て、かつての両面宿儺のよーにやり

と笑ったのだ。

精神世界を知覚できるのは、精神世界で生まれる魔族の他はエルフとかの魔力が特に高い種族のみ……人間は逆立ちしたって精神世界を知覚できない。なのにこの子供……八つかそこらだろー呪力なしの子供は、なんの力や術を使うことなくリタを見つけたのだ。

「実は前から試してみたいなーって思ってたことがあるんだけど……協力、してくれるわよね？」

ゼロスに子供を捕獲させ、リタは物質界に現れて満面の笑みを浮かべた。

「ねえボク……魔道師、なってみない？」

## その2 (任○堂は神、はつきりわかんだね)

禪院甚爾に魔力はない——とゆうか、この地球に生まれた人間は誰も魔力なんて持っていない。妖精の国とか呼ばれてるヨーロッパの島国でだって「妖精ばわー」と思われてたのは呪力だし、魔女狩りでバンバン殺された不思議な力を持つ方々は呪術使いだったり無力な一般人だったりした。

魔力なんでものは非術師の想像で妄想なのだ。こと、彼女と彼女の使徒を除いては。京都市の外れに、非術師の目から隠された山がある。そこには自称異世界の魔王リタ・ギニヨレスクなる赤毛に赤眼の女と、その従者で魔族の神官ゼロスとゆう糸目の男だけが暮らしている。

——甚爾が山に暮らす女の存在を知ったのは、屋敷の者達が「リタ様への来月の供物は」とかなんとか話しているのを床下から聞いたから。リタ様って何だそりや、供物ってどーゆうことだ？ 一度疑問に思ったら一から十まで知りたくなるのが道理ってやつなのよね。呪力を全く持たない見捨てられっ子の立場をおおいに利用して「山」の女の噂を集めた。

いわく、女は負の感情を主食としている。

いわく、女の住む山には呪霊がおらず、この世で一番清浄な土地。

いわく、女は和牛が好き。

いわく、女は平安時代から日本にいる。

いわく、女は魔王である。

いわく、御三家が半月ごとに供物を捧げているから日本は守られている。

いわく、いわく、いわく……。

眉睡な話からどうでもいい話まで色々あった。

家を抜け出しても、甚爾は呪力がないから誰にもバレない。一ヶ月半ごとに回つてくるとゆー「魔王に供物を捧げる」儀式に向かう糞親父もとい当主たちの後をつけて辿り着いた先は、空白だった。

甚爾は呪力を持ってないから呪霊が見えない。見えないけど気配を感じられるし、呪霊の臭いなんだろう吐瀉物のよーな臭いも嗅ぎとれる。

なのに、この山には呪霊の気配も臭いもなかった。ただ山の匂いしかなくて、逆に頭が混乱した。この世で一番清浄な土地とゆー、家で聞いた噂は本当のことだったのか？

山の中腹まで当主たちをつけて行つたけど、着古した作務衣を土で汚しながら、転がり落ちるよーに山を下った。変な場所だ、きしよくわりー。上まで行くななんてムリム

り。

——甚爾が八歳になった夏のことだった。

山土が作務衣についていたことで家を抜け出したのがバレ、折檻を受けたのはもう四ヶ月半も前。朝晩の冷え込みが厳しくなってきたけど甚爾の服は夏と変わらずTシャツに作務衣。

なにせ甚爾は一族から見捨てられてるよーな立場だ、夏の服と冬の服をそれぞれ用意してもらえないことはない。七分丈の裾からによつきりと手足を出して、甚爾はまたこっそり家を飛び出した。

甚爾はまたあの山に行こうと決めていた。なんでかって、今月禪院が「魔王様」に捧げた供物が松阪牛一頭分と聞いたからだ。魔王だとかなんだとか知らないけど、たつた二人しかいないのに牛一頭をそう楽々食べきるはずもない——甚爾は「呪霊が全くいない」ことに対して感じていた気色の悪さより、噂に聞く松阪牛を味わいたいという気持ち、食欲を優先した。

山を登るあいだ、そこかしこに小さな気配があることに気づいた。獣じゃない——なにしろ気配が空を飛び回ってる。でも呪霊じゃない——鼻の奥をつつくような不快な臭いがしないのだ。

あちこちで小さな声がかくかくすと笑っているような気配がする。馬鹿にしたような

笑いじゃないのはすぐ分かる。だって気配の奴らは甚爾を見てるわけじゃなくて、ただ単に楽しいから笑ってるだけだ。

不快じゃないけど、変な気分だ。

山を登っていく。砂利を敷いて整備された、緩やかな傾斜を持つ階段は比較的まつすぐ山頂を目指している。

山頂に屋敷が建っているのが見えた。住み心地が良さそうな立派な屋敷に綺麗な庭——噂の魔王様とその使徒の住処で間違いない。

京都の冬は寒い。なんてったって盆地、夏暑くて冬寒かってゆー糞みたいな地形だから寒暖の差が激しいつたらない。山登りでちよつとは体が温もつたとはいえ鼻の頭と耳を寒さで真っ赤。

よつこら山を登りきつた屋敷の縁側に、オカツパ糸目でいかにも不審そーな感じの男がいた。あいつがきつと使徒つてやつだ。

で、姿は見えないけど、気配とゆーか雰囲気とゆーか、一枚隔てた向こう側にもう一人いる。場所は男の隣だ。甚爾はまっすぐその気配を見つめた。

「なあ、あんたがこの神域のカミサマつてやつ？」

甚爾は捕獲されて——そして、胸に赤い石を植え付けられた。

「チビはまだこれからが成長期。つてゆーことはつまり、いまのうちつてことよ」

作務衣とシャツをすり抜けて胸の真ん中に植えられた赤い石は魔王いわく「魔法の種」らしい。

「分かりやすくゆーなら、あたしやゼロスはララア・スン。あんたはフォウ・ムラサメとかそのあたり。魔力をもって生まれてなくなつたつてホラ、ちよちよいと改造しちやえば魔力持ちに出来るのよ」

「ララア・スン……？ 知らねーな。フォウ・ムラサメも誰のことだよ」

「嘘でしょあんた、アニメ見ないの？」

小学生として不健全よとまで言い出す魔王に甚爾も困惑する。小学生として不健全？ つーかアニメつて何なんだ。

「その胸の種が肌に溶けて消えたらまたここにいらつしやい。魔法を教えてあげるわー  
ーゼロスが」

「えっ!?! 僕!?!」

肉食いたいと言つたからか分厚いステーキを食べさせてもらつて山を降りた。

胸の石が消えるまで一年かかった。でもなかなか小さくならない胸の石に焦れたのは始めの二ヶ月だけで、三ヶ月目に入った頃からは新しい発見や出会いがたくさんあつて焦れる暇がなかった。

正月を迎える前、家のやつが庭の落ち葉や枝を集めて焚き火をしていた。そいつは甚

爾を見るや「汚いものを見てしまった」と言わんばかりに顔をしかめてきたけど、甚爾はそいつのことなんて全く気にならなかつた。焚き火からキヤラキヤラと笑い声が響いていて——昼間の幼稚園みたいな大騒ぎだったからだ。

声の持ち主が——彼らが四大精霊なんだとか、山で甚爾が気付いた気配は彼らのものだったこととか、彼らは魔王や魔王の使徒にくつついて異世界からやって来たんだとか、この世界の人間で彼らを認識できてるのは甚爾一人だけだとか、そーゆー話を色々聞いた。

——つまり、甚爾のことを無能だなんだとぐちやぐちや煩い禪院家の奴らは誰も、どこにでも宿っている精霊たちに気づけてないのだ。甚爾の心はゴムボールよりも元氣良く跳ね回った。

精霊の姿は逆立ちしたって見えやしない。けど、声は聞こえる。雨が降れば水の精霊が喜び、沸いた湯には火と風の精霊の気配が残っていて、土の精霊はピカピカの泥団子の作り方を教えてくれた。

放置されてきた甚爾には彼らが先生だった。枯れ枝の中にも水があること、火を燃やせば上向きの風が起こること、土を高温で熱したら溶けて、それをマグマと呼ぶこと。屋敷の外では小学校なんて名前の施設があつて、そこでは甚爾と同じ年の子達が毎日集まって勉強してること。

そんな風に過ごしているうちに胸にはまっていた石が完全に溶けて消え、甚爾はまた魔王の山を登った。

「おい魔王！ 俺を弟子にしろ！」

そーして甚爾は魔王の弟子になった。禪院の屋敷に戻らず、山から毎日小学校に通つて、山に戻つたら魔王と一緒に黄金の鎧を身に付けた星座の守護者っぽい奴らが戦うアニメとか、龍の玉を集めるアニメとか、魔王が録画していたロボットアニメを見た。

技名を叫んで戦うキャラクターが格好いいのを知った。自分も必殺技で叫んでみたい。

「あのね甚爾。より強力な技を繰り出すには呪文が必須なのよ」

「ああ。かめはめ波の威力をでかくするにはタメが要る、みたいなやつだろ」

「そうそう、そんな感じよ。でもつまり、逆に考えれば『呪文ありの魔法は威力がヤバい』ってことでもあるの」

長い呪文を要する魔法はまだ早いと言われ、甚爾はしかたねーなと頷いた。従兄やら叔父やらなんやら……力に溺れて自滅したなんて馬鹿な身内の例は多い。身内とゆーとある程度関わり合いがあったよーに聞こえるが、甚爾は放置されっ子だから交流なんてもんは全然なかった——あちろさんが絡んでくることは何度もあったけど。

呪力がある、術式があるってんで甚爾を罵倒したり蹴ってきたりなんだりした奴らが

未完成な術を使って自滅したとかなんとかとゆる話を聞く度に甚爾はゲラゲラ笑った。あんだだけ大口叩いてたくせにかっこわりー、みつともねー。

魔王が「まだ早い」「まだ甚爾には出来ない」とゆるなら、そーゆるだけの理由がある。だって魔王はあの馬鹿な身内と違って力に溺れてないし、自分より弱いと見たやつ相手に力を振りかざしたりもしない——魔王の言葉なら、従っておいて間違いないと甚爾は確信していた。

甚爾は身をわきまえている……自滅した馬鹿を何人も見て嘲笑ってきた甚爾だもの、同じ穴の貉にはならない。なりたくない。

だから甚爾は良い生徒だった。

ある日、魔王が何かの装置をテレビに繋げていた。魔王の行動はだいたい面白いから甚爾はわくわくとしながらそれを手伝った。九歳児の手には大きい有線マイクが二つ。

「なあ魔王、これなんなんだ？」

「カラオケの機械よ。せっかく技の名前を叫ぶのにカスツカスの声じゃみつともないでしょ？　喉を鍛えなさい喉を」

「へー」

アニメの次はカラオケ。空っぽオーケストラの略で、歌を歌うための機械らしい。クリキンの大都會を魔王と一緒に歌った。

——アニメを見た。カラオケをした。体力をつけると言われて山を走り回り、そして小学校最後の冬には出たばかりのスーファミをどうやってかゼロスが入手してきて、甚爾は徹夜するくらい夢中でゲームして熱暴走させ壊した。そのとき甚爾は初めて、悲しくてやりきれなくて泣いた。

小学校の誰もスーファミを持ってなかった。オモチャ屋に数台並んでもすぐ在庫が消えてしまうのだ。もう二度とゲームが出来ないんだーなんて後から考えりや馬鹿馬鹿しい考えにとりつかれて泣いて泣いて、寝不足だし泣きつかれたしで夕方にもそもそと起き出したら——お膳の上にスーファミの箱があった。

「これ……」

「もーあんた任○堂に足向けて寝られないからね。修理できないかかって持つてつたら『初期不良でしょうから』って新品くれたわよ」

箱を抱えて跳び跳ねる甚爾は、お礼の手紙書きなさいよとゆー魔王の言葉にうんうん頷いた。

勉強したり、ゲームしたり、冬休みには滋賀のスキー場に行つて、年が明けたらお年玉を貰つて、放課後も卒業式で歌う曲の練習したりして……九十一年の二月が終わるころ、学校から帰つたら魔王とゼロスが文庫本を持って困り顔していた。三冊あるそれはシリーズものらしく、同じタイトルで同じ作者名が書かれている。

表紙が女の子だろーが小説は小説。国語の教科書に載ってるよーな文面なんだろと思つて甚爾は読まなかつたのに、魔王は「これ教科書ね」なんて変なことを言つて甚爾にそれを渡してきた。

「きょーかしよお？」

なんの教科書だよ、と内心顔をしかめながらページを開いたら口絵が三枚あつた。動きのある絵で分かりづらいけど、アニメみたい——ワタルとか大地みたいな格好をしてるよーだ。

読んでみればなんか聞き覚えがあるよーなあるよーな呪文や名前が出てくるわ、呪文の説明についても同じことを教わつた覚えがある。もしかして甚爾に魔術のあれこれを説明するために書いたのか？　なんか本屋で並んでる本っぽく見えるけど。

「これ、魔王が書いたのか？」

「そんな技術ないわよ。市場に出回ってる本よ」

「出回っちゃつてるんですよねえ……」

魔王とゼロスが困り顔でブリッジしたりなんだりしてるのを横目に、なんと甚爾は二時間もかからず一冊を読みきつた。明るい主人公の視点からの語り口は読みやすくてさくさく読めたのだ。残り二冊あるがこっちはまたあとで良い。

「ま、こゝで気を揉んでたつてどうにもならないわ。悩むのはあとあと！……あのね甚

爾、あたしはその本に出てきたシャブラニグドゥ……を取り込んだ魔道師なの。だから泣く子も黙る『魔王』様なわけ」

魔王はなんでか、可哀想なものを見る目で甚爾を見た。

「あんたは将来苦勞するわ。ピーターパンとかちゅーにびょーとか言われて後ろ指刺されることになる」

それでも、と魔王は言葉を継いだ。

「あたしの下で魔道師になる？」

——四年後、高校でクラスメイトが「黄昏より昏き……」とか真剣にぶつぶつと唱えている横で、甚爾は頭を抱えていた。

魔力がなくちや呪文を唱えたところで魔術は作動しない。そんなこたあ甚爾にだつてじゅーぶん分かつてる。でも友人連中が黒魔術同好会なんてゆー恐ろしい同好会を作つて「俺はオーフェン派だ。シンプリーズベストを体現している」「馬鹿め呪文は長ければ長いほど効果が大きいのだ。ギガスレイブの完成度の高さを理解できんとはな」とか言い合つて効果のない呪文を唱え合つてのを見かけて虚しさが胸を突いたり、学校帰りの小学生がドラグスレイブの呪文を唱えて大騒ぎしているのについ反応してしまつたりするのだ。

はつきりゆーと困る、ものすごく困る。

山で修行する時も、小学生が呪文を叫びながら傘を振り回してる姿とかが思い出されてしまうのだ。悲しいとゆーか恥ずかしいとゆーか、時々なんでか涙が出てきたりする。

学校からの帰り道に見かけた五条家の麒麟児も白髪に碧眼。——日本人なのに。悩みとゆーべきか……苦しみに近い感情が胸のなかでもやもやとする。

ラノベみてーな見た目してんな、と思った瞬間、気がついた。

甚爾はラノベ魔道師で、五条のガキはラノベ主人公……またはいけすかないライバルキャラ。ラノベ設定同士だ。

切なくて涙が出そうだ。だからつい声をかけてしまった。

「お前さ……強く生きろよ」

世話を連れていた五条悟は立ち止まり、目を丸くして甚爾の背中を見送った。

強いこと、強く生まれたことを褒められて育った五条悟に「強く生きろ」なんて声をかけるやつなんていなかった。それも声をかけてきたのは見知らぬ他人で、呪力も術式も持つてない。よわよわの雑魚のはずなのに、なんでか五条悟を可哀想がるような目をしていた——。

「あいつ誰？」

「調べさせます」

あの学生が「山」に受け入れられている唯一の人間なのだ。と五条悟が知ったのは、それから三日後のことだった。

### その3 (われらがすばらしきとき)

本来、リタの世界の「魔術」とゆうやつは、『混沌の言語』で呪文を唱えることになっている。この『混沌の言語』は一言でゆうと「魔王や魔族に通じる特別な言葉」だ。この言葉で「へいへいお兄さん」「私に○○ってゆう力を貸しちくり！」ってゆうのが黒魔術の呪文で、赤眼の魔王シャブラニグドウの力を借りるつよつよ黒魔術『竜破斬』もとーぜんながらその形式をとっている。

ま、お願いする立場のくせに「あなたの使ってる言葉難しくてしゃべれないから、あんたがこつちの話してる言葉を理解してね。そんなでもって力を貸してちよーだい」なんてのは普通に考えてありえないわな。だから魔道師は『混沌の言語』を学び、魔族の言葉で呪文を唱える。

ところがどっこい、この世界の魔王リタ・ギニヨレスクは二十一世紀の日本から死んで異世界トリップした女の子……女の子(?)である。魔道師の一人として『混沌の言語』はペラペラのペラリン子なのだが、思考回路の根本にある言語は現代人の日本語だ。

それがどーゆーことを引き起こしたかと言えば、他の精神魔術やら精霊魔術やらはともかくとして、地球においてただけど——赤眼の魔王系統の魔術は呪文詠唱の言語が

日本語になってしまったのだ。

下校中に小学生の詠唱を聞かされている禪院甚爾くん(16)は泣きながら師匠にすがった。混沌の言語で唱えても発動しないのはもうしゃーない、諦めた。だからせめて詠唱破棄できるようにはできないのか、詠唱破棄させてくださいお願いします。

でも強大な魔術を奮うにはきちんとした手順が必要で、赤眼の魔王から力を借りる魔術は世界の創造主たる『混沌の海にたゆたいし王』から力を借りる魔術の次に強大だ。詠唱破棄なんてどだい無理な話。優しい師匠は優しく「無理ね」と微笑んだ。

この世の中ってままならないことばかりなのよね。

甚爾は身体能力の怪物だけど頭もまあまあ良かったので、京都市内にある私立男子高の普通科に通っている。特進科の生徒が京大東大阪大神大にバンバン入学してるよーな凄いところなのに、勉強だけじゃなくて体育祭や文化祭とかのイベントの盛り上がりも凄い。この数週間は体育祭の準備で学校全体が熱く、甚爾も釣られてアチチと燃えている。

体育祭のお陰でクラスメイトの頭からラノベやアニメの話題がすつぽ抜けていること、準備で遅くまで学校に残るから小中学生の下校と被らないことも甚爾を喜ばせていた。そこかしこから聞こえる呪文のおかげで気が滅入ってたのだ。

夜は九時近くに帰宅した甚爾は、今日学校で配られたプリント——体育祭の案内を適

当に丸めてゴミ箱に放り込んだ。

禪院の親にそれを渡すなんてことは絶対にありえないから除外するとしても、同居する師匠たちにまでプリントを渡さないのは何故か。

小学生や中学生だった時、授業参観などで保護者として学校へ来てくれたのはゼロスだ。プリントを見せれば「いいともー！」と見に来てくれるだろう。

晴れ姿を見てほしいとゆるー気持ちがないわけじゃない。だけどゼロスはあまりにも小説の挿し絵の『獣神官ゼロス』と似すぎてる。いや本人なんだけどさ。

中学の時、授業参観日の休み時間にクラスメイトが「お前の兄ちゃんゼロスに似てんね」と声をかけてきて、甚爾は返答に困った。そうだろ似てるだろと頷けば良いのか、似てるのは顔だけだと否定すりや良いのか。そうですぜロス本人ですなんて言えるわけではない。

体育祭には一年と二年の全員が参加する。ひとクラスで完結する授業参観とは参加人数の規模が違うのだ。普通科よりも特進科の方が『かなり濃ゆい』とゆるー噂だし……特進科のやばい連中が「ゼロス激似なお前のお兄様紹介しろください！」と突撃してきてみる、甚爾は迷わず学校から逃げる。

「来るなよ、絶対来るなよ！ ダチヨウ俱○部のネタじゃないからな!」「校舎前のグラウンドで体育祭するわけでもないから学校に来て無駄だからな！ いいか!」と念

を押しまくって迎えた体育祭、高校の飛び地ならぬ飛びグラウンドを囲むように作られた各クラスの看板は——実は動く。裏側に機構などつけて、赤白の応援合戦の時に動かしたりなんだりとユーゼンマイ仕掛けを仕込むのだ。

その看板のひとつに栗色の髪の毛の女の子が描かれたものがあり、甚爾はそれを見て「うへあ」と顔をしかめた。

応援合戦の時にラグナ・ブレードだろう黒色の剣が上から下へ振り下ろされ、甚爾の目は死んだ。特進科の看板だった。

身体能力に関して他の追従を許さない甚爾は綱引きやら短距離走で一位をかつきらった。クラス全員が往路復路の二組に分かれたムカデ競走は甚爾一人の力ではどうにもならず三位。時々特進科の生徒が趣味で動かしているらしいラグナ・ブレードの看板が視界に映る度に目と胃が死ぬことを除けば、楽しい体育祭だった。

いま、甚爾の青春は輝いていた。あのまま禪院家で燻っていたら絶対にできなかつただろう経験を積んで、人と関わって、くだらないことで笑って、悩んで。休み時間に前の席のやつと将棋を指してたら両隣から次はどこに指せあそこが良いお前それは悪手だろーがと口を出されたりして。

きっと、御三家に生まれた誰よりもキラキラした青春を送っている。

「おい、禪院甚爾」

「……………ぶが？」

体育祭翌週の月曜日、肉屋で買ったコロツケを食べながら山への道を歩いていた甚爾の前に現れたのは、二ヶ月くらい前に見かけた五条家のガキもとい麒麟ボーイ。甚爾より十歳くらい下だから六つかそこら、次の春から小学生だろう——普通なら。

甚爾もそーだが、御三家のお偉いさんの子は小学校に行かない。なんてつたつてぽつくんは歩く身代金だし、『とつてもとーとい』血統だし、わざわざ学校に通わなくつても教師が家に来るお宅。きつと幼稚園にも行つてない。アニメなんて存在すら知らないだろーし家にあるゲームはボードゲームだけでテレビゲームなんてもつてのほか……そんな生活を送るなんてゴメンだ。息苦しいつたらない。

小学生だった時分には分からなかったことも、高校生になれば見えてくる。今は没交渉な禪院家の連中がかつて甚爾に対してとつていた態度は『児童虐待』とゆる犯罪で、師匠が「あたしは師匠だからね」なんて言つて甚爾にゲームを買つたり一緒に宿題したり飯作つたりしてたのは全然「当たり前」のことじゃないのだ。内弟子だからつてゆつても甚爾たつた一人に金と時間をかけすぎだ。でもご覧ください、そのおかげでこんな健全に育ちました。

禪院の術式と呪力を持つて生まれなくて良かったと甚爾は思っている。持つて生まれつてたら、きつとこの五条の麒麟児みたいに冷めた目をして、世の中に対して斜に構え

て、つまらない人生を送ってただろう。

改めて考えればこの子供はやっぱライノベやアニメのライバルキャラだ、主人公ってキャラじゃあない。お育ちがよろしくクールな性格で、初登場時は周囲を見下してるのだ。型破りな主人公に振り回されて酷い目に遭わされるうちに性格が丸くなっていくんだろう。

手の中のコロッケを食べきって、甚爾は五条の麒麟児に向き直った。

「なんか用か」

「用があるから呼び止めたんだろ」

初登場時に視聴者や読者の反感を買うことでキャラを立てるやつだ、分かりやすい。

季節設定が秋から始まる第一話……なるほど秋アニメ。

「へーへー。で、ごじょーけの跡継ぎでいらっしやるおぼっちゃまくんが禪院のミソツカスに何のご用ですかねえ」

「貴様、若様に対して態度が過ぎるぞ！」

甚爾の態度に激昂したのは五条の麒麟児ではなくお付きの男だった。あと数年もすれば二十一世紀になるってなご時世に「若様」なんてまあ……笑って良いのか？ 馬鹿馬鹿しいこつたと甚爾は内心ため息をついた。

五条の麒麟児は輝くような青い瞳で甚爾を見上げ、命じるのに慣れた偉そーな声で

言った。

「お前、『山』への立ち入りを許されてるらしいな。どうやったらおれも『山』に入るのを許されるんだ？ 教えろ」

魔王リタ・ギニョレスクはむかし呪術師から「あいつは魔物に違いない」だの「鬼の生き残りじゃないか」だのなんだのと色々言われていたらしい。呪霊の親玉めなんて言つて徒党を組んだ呪術師が『山』まで討伐に来たこともあるとか。「我が家の回りに集つてわーわーうるさいし邪魔だったから全員経ヶ岬まで吹き飛ばしてやった」とは魔王本人の言だ。

そんなことが続いたからか、三百年くらい前、当時の呪術師らによつて『山』は禁域に指定され、御三家の当主ら以外の人が入れなくなつた。御三家の当主たちはその時だけ協力し合つて『山』に結界を張つて……許可のない者の出入りを禁じ、魔王を『山』に閉じ込めた。半月ごとにご飯とかを差し入れるから出てくるなよ、とゆー約束——縛りも結んだ。

結んだはずなのに魔王は平氣の平佐で山を出入りしてるとゆー。魔王に縛りなど効かんのだよ。

はじめは身内の若いバカが暴走しないようにアーンド魔王を閉じ込めておいて安心したいとゆー理由で結界を張つたわけだけど、三百年も経てば色々変わる。

いつからか『山』は人格化されるわ、魔王に会えるのは当主の特権とゆーことになるわ……これだから口伝は信用ならんのだ。

魔王はただ『山』に住んでるだけだから、会うのに資格なんてものはいらない。むかし甚爾が肉をたかりに『山』を登ったときだって魔王は全然怒らなかつた。

五条の麒麟児はたしかにいけすかないクソガキだけど、甚爾がここで入山を「無理だ」「諦めろ」と断ってしまうのは——違うんじゃないか。お付きの男は口パクで「ことわれ」と繰り返してるけど。

「んー……」

甚爾は頭を掻いた。五条の麒麟児が『山』に入りたがってるなら好きにすりや良いとゆーか、自分にや関係ないところで勝手にやってほしい。でも五条の麒麟児は甚爾を頼ってきたのだ。頼られたら、応えてやりたいと思う。

でもどーやって『山』に連れて行けば良いのやら分からない。だって甚爾が『山』に入れたのは呪力が全くないからで、当主や当主が認めた同行者が『山』に入入りできるのは割印があるからだ。割印を持たない呪力持ちが『山』に入る方法なんて知ってるわけがない。

「お前が『山』に入れるかどうか分からねえけど……ついてくるか？」  
「行く」

「わかった……ちよつと待つてろよ、今からウチに連絡すつから」

通りの店の前にある公衆電話で『山』に電話をかける。——禁域に電話線を引いたことがバレたら御三家の爺連中は泡を吹いて倒れるかもしれない。実はつい先日インターネットケーブルも引いた。甚爾がDIYしたのだ。

電話口の向こう、魔王は「あんた家に呼ぶよーな友達いたの?」とかなり失礼なことを抜かした。愛弟子に対して酷い言い様だ。

「今日は月曜だぞ。それにもうこんな時間だ、友達呼んだりするわけねーだろ。五条のガキにお前んち連れて行って道で絡まれたんだよ!」

『あらま』

甚爾の心配をよそに、五条の麒麟児は何に遮られることなく『山』に入った。お付きの男が『山』に入って良いものかと結界の前であわあわやつてるのを放つといて緩やかな階段を上げれば、玄関前に仁王立ちのゼロス、武装はエプロン。

「おやまあ、なんて美味しそうな方なんでしょう! 良い具合に熟成されていて……今日日はご馳走ですね」

「おれは食肉じゃないぞ!」

甚爾は、とっさにか甚爾の服の裾を掴んだ五条の麒麟児——悟の頭をわしわしと撫でる。

「心配すんな、こいつは人間なんて食わねーから。お前にまわりついてる負の感情を食うんだよ」

甚爾の周囲は平和だ。負の感情を食べる魔王たちが側にいるおかげで呪霊による被害の話は一つもないし、甚爾の行動範囲内では心霊現象すら起きない。

きつと五条悟の周囲は不穏だ。嫉妬やら苦痛やら……溢れ返るような負の感情を含んだ空気を吸って生きているに違いない。

「これだけ負の感情が体表で熟成された子を見るのはほんとーに久しぶりですよ。ざつと千年ぶりでしょうか？ いやー懐かしいですねえ」

満面の笑みのゼロスの案内で客間に通され、紙パックのオレンジジュースとコップ二つ乗せたお盆を渡された。自分で注げとゆーことか。

「リタ様、リタ様ー。もう表に出ていらっしやっても構いませんよ、美味しそうな子でしたー」

「やっぱりあいつは人間を食うんだな」  
「食わねーよー！」

廊下から響くゼロスの声を聞いて覚悟を決めた顔の五条悟が立ち上がろうとするのを、どうどうと宥めて座らせる。

それにたとえゼロスが人間を食う生き物だとしても——人間は、呪術師は魔族に勝て

ない。だって魔族に効くのは精神魔術だけなのだ。除霊のための能力である呪術師の「術式」で攻撃したところで……悲しいことに、全く効果はないのである。立ち向かうだけ無駄とゆーのが現実だ。真・大魔王バーンはナイフでも傷つけられるのに、こちらにおわす魔族と魔王は文字通り次元が違う生き物なので傷一つ付けられない。そんなズルが許されて良いのか、こいつらには人の心がないのか!? 魔族だけだ。

最近見返しているトップを狙うOVAに影響されたのか床下からガイナ立ちで現れた魔王は、ちゆるんと美味しそーに、甚爾たちには見えない負の感情をご賞味あそばした。

「うーむ……うまいっ！ うまい、うまい、うまいうまいうまいっ！ 牛鍋弁当よりうまいー！」

「良かったですね、最上級の味ということですよ」

褒められて悪い気はしないらしく五条悟は自慢そうに「そーだろ！」と頷いた。

だけど、魔王が食ってるのは「五条悟に向けられた負の感情の醸成物」なのだ。濃くて強い念であればあるほど美味しいのだ。つまりそれは、周囲の面々が五条悟に向けている負の感情が強いことを、何十人も何百人もが五条悟を妬んでいたり呪っていたりすることを意味している。

甚爾は自分の横に座る子供の丸くて小さい頭を見下ろして、以前この子供に掛けたの

と同じ言葉を繰り返した。

「強く生きろよ……」

甚爾は既に呪術界という戦線を離脱したけれど、悟はこれから戦争に飲み込まれていく。

S君(6)の戦争は——まだ、始まったばかりだ。

## その4 (オールドボーイ・ミーツ・オールドガール)

甚爾が高一の秋に『山』を出入りするようになった悟は、師匠の影響を一年半も受ければ「いけすかないクソガキ」から「そこらにいるクソガキ」に進化した。つまりそれがどーゆーことかと言えば、呪力や術式を持つているか否かで人を判断する視野の狭いクズから、真面目に勉強をしている甚爾の横に寝転がって週刊チャン○オンを読む悪タレになったとゆーことだ。

五条家の連中から「貴様のせいで若様が狂った!」とか「貴様とは比べ物にならぬほど尊い天の使いたる悟様を下層に引きずり込もうとする悪魔め、死ね!」とか言われて殺されたことは一度や二度ではない——時代錯誤な若様呼びだけでもお腹いっぱいなのに「尊い天の使い」って、あいつら目が腐ってんじやなかるーか。

外では態度を取り繕えと怒っても悟は「やだぶー」とか抜かすし、悟をクソガキにした張本人は「年相応でいーじやない、背伸びして可愛いわね」とか言って悟に注意しようもしない。

まあ、糞みたいな実家で「大人しく静かに物分かりが良い素直な子」なんてやってられないのは分かるから、甚爾もあんまり強く悟を怒れないんだけども。

春休みに遊び惚けていたらすぐバレルる年度始めの実力考査のため三日前から真面目にちやぶ台に向かつてたけど……そろそろ勉強するのも飽きてきた。横でチャンピオン読みながらゲラゲラ笑つてるガキがいるんだもん、仕方ない。

甚爾は教科書を放り出して悟の手元を覗き込んだ。紙面は坊主頭のクソガキとツインテールのクソガキと鼻水垂らしたデブのクソガキたちが暴れまわる漫画——浦鉄だ。「さとる、お前さあ……流石にコ□コ□は置いてないけどウチにはジャン○やサンデ○もあるだろ? なんでわざわざガキ○ピオン。それも浦鉄」

「えー、ジ○ンプはスラダン終わったから読む気おきねーし、サ○デーはパクリ載せてるからヤだね」

「はあ? そんなことあないだろ。何が何のパクリなんだ」

「うる○やつら、可愛い魔女ジニ○のパクリ。まあジ○ンプの過去作品でもキャッツ○アイがチャーリ○ズエンジェルのパクリだけどね」

「それはオマー・ジュとかインスパイアとかつてやつだろ。……お前いつの間に洋モノド라마にかぶれた?」

「リタの棚にあった」

師匠の趣味の部屋は凄い。年中湿度や室温が一定になるように空調が効いていて、日焼けを防ぐため部屋に窓はなく、明かりは豆電球まで。ものすごい本数のビデオやレ

コードが揃い、古い月刊誌からラノベに漫画も並んでる。なんとも偏執的、こーゆーのをキチガイとゆーのだ。

ちなみに専門書やら古書やらが並ぶ部屋もあるけどそっちは子供二人から不評だ。江戸時代の洒落本とかも棚にあるんだけど、そーゆーのに興味ない子にとつてはただの古い本だもんで。

「まだマキ○オー連載中だろ。ラッキ○マンとかマサルさんとかもあるし」

「絵がリアルじゃないからやだ」

「あー……」

好みの問題はどうにもできぬ。

そんなこんなで迎えた高校の最終学年。二年の時は白紙で出してた進路希望調査のプリントに、甚爾は「就職」と二文字書きなぐった。なんてったってフィジカルニアス、どっか企業所属の選手とか収入も良いんでは？ そろそろ部活でも本気出そうかななーんて考えてたんだが、担任に「お前の頭なら国立を狙える。もつたいないことをするな。馬鹿な真似はよせ」と止められ親に電話され——実家、禪院家に呼び出された。そこで浴びせられたのは五割罵声、三割恨み節、二割嘲笑ってな酷い対応。当主は別件で不在だつてんで叔父やら従兄やらが甚爾を囲んで騒ぐのなんの。甚爾はしおらしい顔を作つてウンウン頷くふりをしながら、内心べろべろばーと舌を出した。

「『山』のお方が貴様を愛でているから禪院の名を名乗るのを許しているだけで……」

とか、

「どうして『山』のお方は無能の貴様などを」

とか、まあ話がだらだら長い。二時間半か三時間か……もしかするとそれ以上の長さの叱責の結論は「一般企業に就職など許さん。お前は呪術界で雑用してろ」とゆるいものだった。

何が悲しくて実家と関わって生きていかねばならんのだ。やだやだ家出しよ……あ、もう家出してたわ。じゃあ縁切ろ。

縁切りの方法って何があるかね。うざい親戚を一人か二人くらいちよちよいのちよいとラ・テイルトして病院送り（脳死）にすれば簡単に縁を切れるだろうが、そーすると呪詛師として追われることになるかもしれない。それは困る。

どーしたもんかなと転がりぼんやりフォ○チウン・クエストをばらばらめくっていたら庭から悟が部屋を覗き、サンダルを脱ぎ捨てて掃き出しの窓から入ってくる。サンダルはどこか遠くに飛んでいった。

「暇人かよ、修行しろよな」

「俺はもう師匠から免許皆伝貰ってるんでえ、修行中の悟くんとは違うんでえ」

「うぎい」

子供の容赦ない蹴りが甚爾の腹に炸裂した——けど身体能力オバケの甚爾の腹筋は鋼のように硬く、痛えと泣いたのは悟の方だった。

「いでーだろ、力抜けよ！」

「力抜いたら俺がいでーだろーが。あのね、俺は暇じゃないの、どっか行きなさいシツシツ」

「はあ!? 寝転がって小説読んでるだけじゃん! 暇なんだから、ゲームしようぜ」

スーフアミは今や悟の所有物と化した。でもいいのだ、甚爾にはプ○ステがある。

「あんね、お兄様は今将来について真剣に悩んでんの。いつまでも師匠の脛かじってるわけにもいかねえし、高校出たら独立して就職するつもりなんだわ。楽しんで稼げて周りにウザいのがない仕事はないもんか、スポーツ選手は稼げそうだよとか真面目に考えてるわけ」

「え、就職……? だ、駄目だ駄目だ駄目だ! 甚爾が会社で虐められて自殺して呪霊になつたらお前を祓えるのなんておれだけだぞ!」

過労死に関する法律が整備されはじめるのは二十一世紀になってからだけど、それ以前から仕事内容や職場環境を苦にした自殺やらなんやらの話はたくさんあった。

例を挙げるなら……元財閥の住○とゆー会社があるんだが、その悪評たるや——「定年退職した直後に(過労で)死ぬ」なんて言われてたのだ。労働者をどう搾れば定年

後に上手いこと殺せるのかぜひとも聞いてみたいものだ。もし事実なら飴と鞭の使い分けが凄く上手いに違いない。

噂がただの噂でしかないと祈ろう。

もちろん甚爾はそーゆーやばげな会社に勤めるつもりなんて全くない。チームプレーが必要なくて、人間関係が狭くても良くて、年に何回か試合に出れば莫大な賞金が入るよーなスポーツをしたいと考えている。

悟の言う「会社で上司や同僚にいびられて死んで呪霊になりました」なんてのは絶対ごめんだ。甚爾はゾロリみたく真面目に不真面目がモットー、でも同じ怪傑ならゾロリよりズバツトの方が好き。

労働環境の黒い噂はもちろん、昭和の時代、企業にはブラック規則がたくさんあった。判例の有名どころだと証券会社の野○やら自動車の日○やら、さつき名前をあげた○友、球団も抱えてたダイエー○……大企業がそんな状態ならいわんや中小企業をや。

判例つまり裁判所が出した結論が残ってる事件とゆーのは、弁護士を交えた話し合いで決着がつかなかったから裁判になったわけで。訴えた側にも訴えられた側にも弁護士費用やらなんやらかんやら金が要るから、泣き寝入りした被害者だってたくさんいただろーね。

二十一世紀において労働基準法は厳格に定められて、一日の基本労働時間は八時間

が上限、従わなければ行政指導やら処分やら。そして形だけでもとりあえず男女同権、お茶汲み嬢ってなんですよのそれ。

ところがぎつちよん、『今』はまだ二十世紀、1997年の春。世界に悪名高いKARR OUSHI真つ盛りだし、女性結婚退職するのがまだ一般的。他にも79年にとある精神科医が出版した本のせいで「子供の登校拒否は親に責任がある」なんて思われてたし、地元でぶいぶい言わせてた新隊員は基地の隊舎屋上でタイマン張って班長にどつかれてた。でもしかセンサーは聖職で、体罰の何が悪いんですってな、そーゆー時代。

師匠に引き取られ、頭の良い同級生に囲まれて育った甚爾から見ただ『ニツポンのジョーシキ』は糞だった。でも呪術界のジョーシキはもつと糞。前者が下痢してる時の屁なら後者は猪鍋食った後の屁、猪鍋の屁の臭さたるや……嗅がされた方は床で悶絶するのだ。全く恐ろしいほどの悪臭だった。経験者は語る。

先に言った通り、いちお世間では男女同権、男女雇用機会均等法は86年に施行。女性は一個人として尊重されるべきとされている。実態が伴ってるかは知らんけど。

ところが呪術界は男女不平等が大前提で、呪力の強弱や術式のあるなしで人間の価値が決まる。木の股から生まれたのか貴様は、って聞きたくなるよな男尊女卑が横行しているだけでもヤバいのに、家業に役立つ才能がない者は人に非ずと養育を放棄ときた。世間にバレたら非難轟々どころの騒ぎじゃない。

そんなだから呪術界で働くなんて絶対に嫌だ。無菌状態の寒天に汚い手を押し付けたら寒天が汚染されてしまうよーに、呪術界に籍を置いたりしたら……清く正しく美しい純白の甚爾くんは汚い呪術界に穢されてしまう。寒天培地を扱うように、甚爾の取り扱いは繊細にお願いします。

「そうだ！ 甚爾、おれのお付きか相談役になれよ！」

「はあ？」

悟は精神破壊魔術をバンバン使ってくる危ない特級呪霊・TOUJI・ZENINを想像したらしい。もしそんなヤバいのが野に放たれたら日本どころか世界は終わりだ。どーにか甚爾の就職を止められないか考えたんだらう……悟はそんなことを言い出した。

「おれの相談役なら楽に稼げるし周りにウザいのがない職だろ。甚爾の仕事はおれとゲームすることな。決まり！」

「何言ってるの、お前の周囲にやウザいのしかいねーだろ」

よその家を悪く言いたくはないが、五条家の若様こと悟様のお付きやら世話役やらとゆー皆さんはどいつもこいつも呪術界の悪いところをじっくりコトコト煮込んだ鍋底に溜まったヘドロのよーなやつらだ。

禪院本家にもヘドロで溢れてるからきつと加茂も似たよーなもんだらう。ヘドロ御

三家がトップをしている呪術界で就労なんて絶対に嫌だ。甚爾は表の世界でスポーツして楽しんで稼いで女子アナか女優と結婚するのだ。

甚爾が弟子入りしたとき、師匠は「魔道師ってゆーのは職業じゃあなくて資格の一つ。だからあんたがなりたいと思う職業を見つけたら、それを仕事にすればいいの」と言った。

資格を生かした仕事に就いてもいいし全く別の仕事をしてもいい。才能がありそうだから弟子にしただけで、魔道師として生きていけと強いるつもりはない。

——そんな師匠と十年近く暮らしていたせーか、甚爾は気楽に考えていた。遠くに逃げてしまえばこっちのもんだと思っていたのだ。

「なんでえ」「ゲームう」とギャン泣きする悟は蹴つ飛ばし、師匠とゼロスにはお世話になりましたと頭を下げて、甚爾は東京で企業所属の陸上選手になった。……その直後だ。社長や幹部らに変死した。呪霊の作業なのは明らかだった。移籍した先の会社も会長と社長が血痕だけ残して失踪。呪霊に喰われたんだろう。

偶然なんかじゃない。誰かが……禪院が、甚爾が表の世界で活躍しようとするのを邪魔している。

移籍すればそこでまた同じことが起きるだろう。でもそれを誰に相談すれば良い？  
師匠か？　さんざん世話になって、独立するのを盛大に祝われ「あんたの夢を応援し

てるわよ」と背中を叩かれた。独立してからまだ数カ月しか経ってないのだ、師匠に泣きつくなんて出来ない。

高校の恩師や同級生は……駄目だ。頼ったら迷惑がかかる。

報復も考えた。でも禪院に手を出したら甚爾は呪詛師として追われることになるだろう。呪詛師になつてしまったら……どんな顔をして『山』に帰れる？

アパートに引きこもつて悩んでたら根が生えてしまうからと公園まで来たはいいけど、日は眩しいし雲は白いし鳥はうるさい。ベンチに寝転がつてぼんやり過ごしていた甚爾の顔色は見るからに悪かつたんだろう、どつかの会社の制服を着た女が、弁当の巾着片手に甚爾へ声をかけてきた。

「あの、大丈夫ですか？ 救急車呼びましょうか」

いかにも親切そうな、人の良さそうな顔をした女の胸元には、伏黒と書かれた名札があつた。

## その5 (ばたふらいえふえくと)

しわくちやの婆さんが座ってるタバコ屋で初めて買ったのは、店の前の自販機に貼られた広告のやつ。マイルドセ○ンちよーだい、え、どれって？ えーつと一番強いやつ。あ、そうそう100ミリ。

マッチで火を付けて、吸う。煙いのは分かるけどどこらへんが強いのかとか全然わかんねーなあと思いつながらパチンコ屋に行つて、甚爾の目の前で店内に入ったオツサンの真似をして適当な台に座り、千円。十分と経たずに全ての玉が無為に消えた。苦いばかりのタバコを噛みながらも千円入れるか考え——席を立てて店を出た。

パチンコが面白いと思えなかったし、甚爾の耳には店内はうるさくて堪らなかった。店の出入り口にある灰皿の前で立ち止まる。タバコを吸った。パチンコ屋に来た。次は酒かな、競馬とかもいーんじゃね？ 競艇もあつたなーなんて考えながら残るタバコをパカパカ吸つてた甚爾に、パチンコ屋からぬらりと出てきた派手な女が声をかけてきた。

「ねえあんた、タバコの吸い方知らないの？」

「吸い方？」

「一本ちようだいよ。タバコの吸い方教えてあげるから」

そして正しい吸い方をしたタバコで噎せた甚爾を見て女はゲラゲラと腹を抱えた。

「二十歳になるまで吸わないぞ」とかいう真面目ちゃんとかマジでうける！ あとさあ、タバコは二十歳から合法だけどパチ屋は十八から行けるのよ。知らなかったの？」

女は甚爾を「二十歳を迎えたから試しにタバコを吸ったりパチンコしたりしに来た真面目な大学生」と誤解したよーだ。

「成人迎えたばつかの真面目くんにお姉さんがこの世で一番不真面目で楽しいこと教えてあげる、昼間に呑む酒つてやつ。きもちいいぞお〜」

あたしの奢りだから好きなかだけ呑みなさいなと言われ、昼からやつてる居酒屋でとりあえずビール。苦さに顔をしかめれば女はテーブルを叩いてケラケラ笑った。

女はマリリンと名乗った。本名か聞いたら「源氏名に決まってんじやん」と無情にもバツサリ。甚爾には源氏名どころかペンネームもラジオネームもないから下の名前だけ名乗った。

マリリンは話上手で聞き上手だけど、タバコのペースも酒のペースも速かった。甚爾の持つてたタバコが尽きると千円札を一枚出し、マイセン3ミリ二箱買ってきてよと言つて甚爾を走らせた。おつりはお駄賃。

「いやあトージくん可愛いわホント。またおねーさんと呑もお？ 連絡先交換しよ。実

家？ 下宿？」

「下宿つすけど、PHS持つてるんでコッチで」

「え、ピッチ持つてんの？ まじか金持ちかよお、いいなく。ちよつと前にドラ○フォンとかつて可愛いの出たじゃん？ あれ欲しいんだけどさあ、電話なんてそんなしないんだよね。タバコしばらく半分に減らせば買えるつちや買える額つてたらそーなんだけどホラ、電話したいなら公衆電話使えばいいしい」

「はあ」

それから甚爾のPHSには、週に一、二度ほどの頻度でマリリンから電話がかかってくる。待ち合わせはだいたい呑み屋で、別れるのも呑み屋の前。

次第に打ち解けて軽くお互いの身の上話をしたし、愚痴も聞くよーにもなった。マリリンには莫大な借金だけ残してドロクした父親と、真面目だけが取り柄の母親に八歳下の弟がいるらしい。母親は学がないからろくな仕事に就けず、彼女の収入だけでは生活が成り立たない。マリリンは高校を二年で中退し東京へ出て、逆サバ読んで水商売——働いてもう十年になるとか。

結婚したくないけど子供はほしいんだ。男と同じ屋根の下で生活するなんてごめんなのよねと笑ったマリリンに、甚爾はなんだか苦しいよーな悲しいよーな、何とも言えない気持ちになった。

マリリンが今も抱えている父親の借金と、甚爾の身に振り掛かる身内からの呪い。どちらも性質がよく似てるのだ——マリリンや甚爾を汚泥に引きずり込もうと足首を掴んで離さない。

泥まみれの足で歩いているマリリンは、とても格好いい。

独立祝いのお名目で師匠がくれたお金、最初の会社で貰った支度金や給与、移籍先で貰った給与。まとまったお金はある程度あったけど、生きてればどーしたって金が掛かる。競馬に行ってみたり、マリリンに会ったり、都内を適当にうろついたり……そんな生活を数ヶ月も送ってたらだんだん資金の底が見えてきた。

でも、甚爾がどこかに就職したら、その社長とかが死ぬ。

どーすっかなあと競馬場でぼんやりしてたところに、声をかけてくる男がいた。お前、そんなに呪われていてよく生きてるもんだな。面白え。

男は見たところ四十半ば。どんぐり目に濃い口ヒゲのダルマみたいな見た目で、そして何人分もの血の臭いが体に染み付いている。と言ってもこの男が血を浴びたばかりだとかじゃなく、甚爾の鼻でなければ嗅ぎとれない僅かな臭いがあったくらいだ。それが少なくとも十人分。この男は間違いなく「やべーやつ」だ。

「なんだアンタ」

「通りすがりのオッサンさ」

男は呪詛師だった。自由を好み、社会の常識やルールを嫌う。人の苦痛に喜びを覚える。そんな人種らしかった。

そんだけ呪われてるってこたあお前もわしと同じ穴の貉だろと言われて、甚爾は自分という人間を振り返る。

——甚爾は被虐待児童だった。養育をほぼ放棄されてて戸籍もなかったから学校に行けず、腐っていくことしか出来ない立場の子供だった。あのまま育ってたら世間を恨んで、何事に対しても斜に構えた人間になってただろーなと思う。

だけど八歳のときに師匠の存在を知り、一年後に弟子入りして小学校に通えるよーになり、そのまま学区内の中学に上がり、高校は私立に通った。九歳から、甚爾の毎日はキラキラ輝きでした。

小学生になってから初めて迎えた参観日、女装したゼロスが来た。男の格好をして付け髭を鼻の下に貼り付けた師匠も一緒に、何したいんだろと首を傾げてたら……休み時間にクラスメイトが「あの二人お前のとーちゃんとかーちゃんだろ!? 面白いな!」と甚爾の机に殺到した。——まだ甚爾は色々とズレてたからクラスでちよつと浮いてたのに、その日、友達が増えた。

小学校の卒業式にビデオカメラを持ってきたのはゼロスとあと数人だけだった。写真屋から借りたらしい。

中学で部活動が始まったとき、修行があるからと文化部に入ろうとした甚爾の頭を師匠は軽くチョップした。入りたいところ入んなさいよ、中学生って時間は一生に一度しかないのよって言われたから合気道部に入った。師匠を投げ飛ばせたら最高だよなんて考えがなかったとは言わないけど、甚爾は体を動かすのが好きなのだ。

高校ではいつの間にかウチにビデオが増えてた。高校の体育祭にも文化祭にも二人を呼んでないのに、翌日には甚爾が写ったビデオが必ず増える。来てたのかと聞けば「人に見られずに行動するなんて朝飯前ですよ。なんせ魔族ですから」と納得するしかない説明を受けた。

大学に行かないのって聞かれたけど、行かないと答えた。

甚爾は九年、貧しさや、血を吐くような苦痛や、心が折れるような酷い挫折や、世の中が全部モノクロに見えるような空虚といった様々な負の経験から逃れていた。

中学の同級生の中には、お下りのくたびれた制服を着て、チビた鉛筆を使ってるやつもいた。朝刊の配達で疲れて授業中に寝てたそいつにノートを貸した回数は数えきれない。そいつは『師匠と出会わなければ甚爾がそうなっていたかもしれない』姿だったから、放つとけなかった。席が離れても、クラスが離れても、そいつとは交流が続いている。今も。

甚爾は九年、恵まれて過ごした。この九年、恨むことなく、妬むことなく、悔いるこ

とも恥をかくこともなかった。他人を傷付けて笑う気持ちなど甚爾には分からない。

ダルマのような顔をしたこの男と甚爾は、同類じゃあない。

「俺あ褒められることが好きなんだわ」

甚爾は必死に頭を回転させ、言葉を選びながらしゃべる。

あの二人は甚爾を外道に育てようとしていたわけじゃあない。泥にまみれても元気に笑って歩いていけるようにと育ててくれたはずだ。

「ツンツン尖ってたらオンナが寄ってこねーだろ。流石ね、強いって素敵よって言われる方が何倍も良いからよ……アンタみたいに殺しつてのはしねえな」

甚爾は婉曲に否定したのに、男の笑みはなんでもか、深くなつた。

「お前術師からオンナ盗んだな。あと女術師も怒らせたんだろ？ ならそんだけ呪われるのも当然か。少なくとも十六、七人から恨まれるとは凄いな。呪いもお前に直接つてやつだけじゃなくお前の知り合いを狙うものもあるってな……お前、まだ二十二かそこらだろ。どんだけタチの悪いことしたんだ」

事実無根の誤解だけど、否定したらどうなることか。詠唱破棄が可能な精神魔術で気絶させればいいかもしれないけど、男の術式がどんなものか分からないから周囲を巻き込む可能性がある。

背中に脂汗をかきながら男と会話を続ける。何が得意だと聞かれて体術だと答えた

ら、なら護衛専門で自営業の呪術師か呪詛師になったらどうだと男が言った。

予想外も予想外の言葉に甚爾は目を瞬かせた。

「呪力の呪の字も見えんのはそういう呪具か何かしら持つてるんだろう。呪力を持ってないように見えるってのは、これがなかなか利点がでかい。術師つてもんは自分より呪力がないやつを下に見るからな……油断を誘えるのさ」

男の言うとおり、甚爾は実家から無能と思われてる——呪力も術式も持たないから、だから弱い。だから無能。

「その状態では定職など就けんדרו? 呪詛師はいいぞ、気楽だし、好きなことだけして生きていける」

「はあ」

男は親切だった。甚爾が二十歳くらいの若者だつてことが男の何かの琴線に触れたらしく、最初のオンナとの間にガキがいればお前くらいだわなんて言いながら甚爾の背中を叩いた。

仲介人を紹介され、男のサポートを受けながら護衛の仕事を完遂した。男は報酬の三分の二を自分の懐に突つ込み、甚爾の肩をポンポン叩いて去つていった。

「お前に向いてるよ、この仕事」

報酬の三分の一でも六百万。普通ならたった一週間ほどで手に入れられる金額じゃ

あない。

でも馬に捧げたら一瞬で消えた。競馬場を出たら駅前サラ金があつて、そこに入つていく背中はいつまでも途切れぬ。どー考えたつて利息で首が回らなくなることは明らかなの……折り返んだ新聞を持つた連中が店に入つては出てくる。

むじんくんと繰り返し歌う声が数十メートル先からでも聞こえてきて、虚しくなつて改札を通つた。

タバコを吸つてみた。楽しくない。大金をスツてみた。楽しくない。酒の味はだんだん覚えてきたけど、ワクラしくてあんまり酔えない。

金を稼いでは浪費して、時々電話かけてくる悟に「俺みたいになるなよー」なんて説教じみたこと言つたりしながら過ごすことだいたい一年半。半月前にマリリンは電話で、誰との子か分からないけど妊娠したとかで「しばらくお酒は呑まない！ タバコもやめる！」と言つてたけど、一緒に呑み屋に行こうよと電話がかかつてきた。大丈夫かこれ。

そんなこんなで昼から呑んだ夕方、スーパで惣菜を物色してた甚爾を見た他の客が「あら」と声をあげた。

「前に公園で倒れてたお兄さん」

「あんたは……」

何もかも放り出したくなつたあの時、甚爾に声をかけてきた女だ。あれから会うこともなくそのままだったのに、まさかこんなところで会うとは思ひもしなかった。

「近所だったんですね」

「みてーですね」

それぞれの住む下宿とアパートはなんと歩いて数分の距離だった。アパートの前で別れたら、カンカンとゆー階段を上る足音がして、角部屋隣の隣の一室の電気がついた。

築数十年の狭いアパートで、近畿じゃあ文化住宅って呼ばれてるよーな古い集合住宅。隣に建つてる長屋はダメだこりゃ、縁起が悪いことに四二しにけん間だ。

最近ここらは抱きつき魔が増えてるつて噂がある。被害者は女子中学生から三十路までいて、つまり彼女も被害に遭いかねない。……公園で青い顔をしてた甚爾に親切にしてくれた彼女が被害に遭うとゆーのは気分が悪い。

後ろ頭を搔いてそこを離れた。

## その6（大人の階段上る）

伏黒女史と甚爾の男女交際が始まったのは、伏黒女史の熱くしつこいアタックがあつたからだつた。

週に何度かパトロールなんてして抱きつき魔被害を無くそーと頑張つてた甚爾は、運良くとゆーか運悪くとゆーか……抱きつき魔の被害現場にかち合つた。それもその被害者が伏黒女史とゆーオマケ付き。不審者から颯爽と伏黒女史を助けて、迷わずPH Sでお巡りさんを選んで、警察署で調書をとられる時も堂々とした態度で、そして顔がいい——伏黒女史は恋におちた。甚爾さんは確かに無職かもしれないけど、それがなんだとゆーのだ。強くてカツコいいから良いじゃないか。

助けていただいたお礼に肉じゃが作ってきました。たくさん作ってしまったって、私一人じゃ食べきれないんですけど、このビーフシチュー……貰っていただけませんか。最近唐揚げ作るのにハマつてて、云々。押せ、押しまくれ、倍プツシユだ！なんて言わんばかりのアピールに甚爾は白旗をあげた。なんでってそりゃ、伏黒女史には裏がない。好きです貴方に恋していると目が語つてて、甚爾はその目にやられ……なんと伏黒女史のアタックが始まってからたつた一ヶ月で陥落した。

……なにせ男子高出身の恋愛初心者だもんで、好きですって言われたらドキンとしちやうのだ。こんな顔してウブでござる。

でもお付き合いするって言っても甚爾には呪いが飛んできてるわけで。甚爾と深く関わったら伏黒女史は呪い殺されてしまうかもしれない。ちなみに付き合いの濃さ長さで言えばマリリンとは二年の付き合いになるけど、彼女は呪いに手を出されてない。どーして彼女が無事かって理由は簡単、マリリンが水商売をしてるから。

血統やらお育ちのよさ( )やらを誇ってる禪院家の皆様にとつて水商売の者は人間ではない。甚爾がマリリンと親しくしていても呪う価値がないから呪わない。全く差別的にも程がある思想だけど、そのおかげで甚爾はマリリンと親しくできた。

だけどその「例外」は伏黒女史に適用されない。

甚爾はここに至って、よーやつと重い腰をあげた。こんな自分を好いてくれる女を守りてえならプライドなんて捨てて、使えるものは全部使わなければ。

甚爾は『山』に電話をかけた。あの、師匠、話したいこととお願ひしたいことがあつて、はい、あの、すんません。連絡しなかったのはホラ無い便りは良い便りつてやつで……はい。すんません。お土産にヨックモ○クとひ○こ饅頭と鳩○ブレー？ でもひよこつて福岡土産じゃ……あつはい。畏まりました。買って帰ります。はい。

東京でも手に入るから買って帰ってこいと言いつけられたひよこ、シガール、鎌倉土

産の鳩サ○レーを抱え、三年近く離れていた京都へ帰省することになった。

「つてことで、明後日から一週間くらい東京を離れる予定つす」

「はいはい。あたしも来週病院に行く予定でさあ、明日から断酒のつもりだったしちようどいいわ」

マリリンはそろそろ妊娠五ヶ月で、いまのところ検診は月一回。前回の検診で医者から「女の子だと思ふよ。まだよく分かんないけど」と言われたそーで、「女の子だつて！女の子！」と大喜びで甚爾の背中をバンバン叩いてくれた。

伏黒女史にも里帰りのことを伝えて二日後、東京からのぞみに乗り込み京都駅。改札口前まで迎えにきた悟の突撃を難なく受け止めて私鉄で最寄り駅まで行き、『山』に入る。

『山』に一歩踏み入った瞬間、甚爾の全身に溜まっていた疲労と言う疲労が飛んでった感覚があつた。なんか肩が軽い気がする——きつと気のせいじゃない。

『山』を登つて、ざつと三年ぶりの家の居間でこれまで何をしていたのか全部ゲロつて、呪いをどうにかしたいんだと師匠に頭を下げた。

「やつと頼つたわね」

え、と甚爾は顔をあげた。師匠が苦笑していた。

「独立したら頼っちゃいけない、なんてことないのよ。むしろ人を頼ることに慣れてか

ないと」

甚爾は大人になることを「一人で立てるようになること」だと思い込んで、自分の中だけで悩みをグルグルかき混ぜていた。頼るなんてみつともないし格好悪いから出来ないなんて頑なになってた。

だけど万能の天才なんて漫画の中にしか存在しない。誰にだって得意不得意がある。……高校のとき音楽の期末テストで四点を叩き出した天才なんてのもいた。

「自分には逆立ちしたって出来ないこと」についてウンウン悩んだって時間の無駄だ。出来るやつに頼ればいい。たとえば法律で悩みがあるなら法律家に相談するものだし、頭痛やらなんやらがあるなら病院に行くものだ。なんでもかんでも自分一人でできるようななんてムリムリ、いくら時間があつても足りない。それぞれの専門家にお任せした方がいい。

自分に出来ないことを人に頼むのは恥じゃなくて、普通で当然なことだ。目から鱗が剥げた気分だ。

「ぷぷー、なんでも一人で出来るって思い込んでたとか甚爾ダセーの」

「うっせえわ。黙ってひよこ食ってろ」

「ひよこばつか四つも食ったら飽きたあ。なあ、鳩サブロー開けていい?」

「師匠に聞きなさい」

許しを貰った悟が歓声をあげて紙袋に突進する。黄色い缶を持ち上げて「でけー。これ何枚入り？」と上下をひっくり返し、「四十八枚入ってんのか。二週間は保つな」と頷いた。全部悟一人で食べる計算だ……食欲魔神ならぬ食欲魔王の存在を忘れてるんじゃないかろーか。

で。呪いをなんとか出来ないかとゆー相談について。師匠は「実はね」と声のトーンを落とす。

「術式を持たない子が呪霊や呪いをぶん殴る時には普通は呪物を使うもんなんだけど、うちにそんなものないわ」

「ああ、そうだろうな……」

師匠やゼロスは呪霊の捕食者だ。呪霊と同じフィールドでどったんばったんやって切った張ったの世界を作り上げている術師とは違うから、わざわざ呪霊を倒す道具やらなんやらを用意する必要がない。

分かってたけどやっぱりシヨックだ。甚爾は肩を落とし溜め息を吐きかけて――  
「とゆーことで、作ってみました」

「え？ 作った？」

お膳の上にぽんと置かれたのは二つ。一つはワニ革っぽい革製の一双の指貫グローブで、拳頭部分に赤い石が二つずつ並んでいる。もう一つは側面に赤いラインが走るト

ンファアー。

「ほら、あたしって七分の一とはいえシャブラニグドウを吸収した女じゃない？ あたしが成功してからもう千年経ってるし、シャブラニグドウ膾炙り封印事件から八千年になるし、ホントならあたしみたいにシャブ吸いに成功する魔道師が現れてもいーはず。なのに現れない！ 気配すらないのよ！」

「シャブ吸いって表現やめませんか？ 我々としては成功されるのは困るので、第二第三のリタ様が現れなくて万々歳ですけどね」

ゼロスの言葉なんてまるで無視して師匠は肩を竦める。

「なんでだろーな、あたしでも出来たのになーってずーつとずーつと考えてた……この千年くらい。そして出会った言葉がこれ……『逆に考えるんだジョジョ』。つまり、シャブ吸いは『あたしでも出来た』じゃなくて『あたしにしかできなかつた』んじゃないかってね」

師匠は人差し指をピンと立て、真剣な顔で——言った。

「それで色々試してみたわけ。そしたらやつぱ、あたしって何かを食べるとか取り込むとか、そーゆー消化吸収に関する魔術に関して、天賦の才があったみたいなの」

思考回路も魔術の才も食欲に偏ってるとはなんとも……ブレない人柄ですねとゆーべきか、食欲に支配されてるのは思考回路だけじゃなかつたのねとゆーべきか。

そこでこのグローブはどーゆー道具なのって話に戻る。なんとこのグローブ、負の感情を食うのである——グローブに付いてる石は呪霊の体を構成する負の感情を吸収するとかで、とりあえず「殴ればいい」らしい。トンファーは赤いライン部分がグローブの石と同じものだそうで、それで殴り付ける以外に、防御で使っても負の感情を削り取れる。

「へえ、じゃあこれは呪符タリスマンつてことか。どうやって作ったんだ？」

「んーん、これ低級魔族」

「ん……？」

甚爾は自分の聴力を疑ったけど残念ながら聞き間違いじゃなかった。

頭がおかしいリタ・ギニヨレスク曰く、負の感情を吸収する呪符を作るのは面倒くさそうだから魔族を作って石に押し込んじゃえばいいーやと思つた、とのこと。消化吸収が得意な魔族になーれと唱えながらコネコネしたらしい。何を捏ねたんだろーか。

絶体絶命の危機のときは石を一つなと二つなと砕けばいいわ。そしたら石の中の魔族が解き放たれるから、そこらへんのムカつく知り合いか敵対してる相手とかに憑依させなさい。そしたらその場の全員の視線がレッサーデーモンに釘付け……現場が混乱してる間に逃げるとか態勢を整えるとかできるわ。——笑顔でそうのたまう師匠に、甚爾は何も言わずとゆーか何も言えずとゆーか、「そーですね」とだけ答えた。やっぱり

この女は鬼か悪魔だ……魔族も鬼と似たようなものだし。

この「消化吸収が得意な下級○魔族」が世に解き放たれてみる。負の感情の醸造物たる呪霊の天敵なのは良いとして、術師の力も負の感情によるものだから——呪術界は終わる。

実家からの呪いはグローブを持ち歩いてれば消<sup>く</sup>え<sup>れ</sup>るそう<sup>で</sup>、とりあえず身に付けておくとゆー言葉に頷く。

——これを身に付けてたら、伏黒女史に呪いは届かない。それでいいじゃないか。石の中に魔族が封じ込められていよーが、石を砕いたら敵さんがレッサーデーモンになっちゃおーが、呪術界が阿鼻叫喚になろーが、いいじゃん。甚爾には関係ない業界だもの。

面倒な話が終わったんならおれと遊べとタツクルしてきた悟と『山』を走り回ったりゲームしたりして一週間、ふてくされた顔で「これからは定期的に帰ってこいよな」と言えるくらいに成長した弟分の白い髪をグシャグシャに撫でた。独立してから三年近い——悟は十歳だ。子供の成長の早さを感じ深く思いながら、甚爾は京都を離れた。

宇治抹茶入り煎茶やら八つ橋やら金箔付きあぶらとり紙やら抱えて東京に戻ったその足で伏黒女史のもとに向かい、狭いキッチンで甚爾のために料理をする彼女の背中を見ながらニヤついて、晩にはスケベなこともしてそのまま泊まって……だけど東京に戻ってから一週間過ぎてても、二週間過ぎてても、マリリンからの連絡がない。

マリリンは電話を持ってないから、甚爾からマリリンに連絡する手段がない。どこに勤めてるかなんて聞いてない。本名も住所も知らない。

何か起きたんじゃないか。事件に巻き込まれたのか？ 初めて会ったパチンコ屋、よく待ち合わせする呑み屋、そこから一番近い歓楽街——マリリンを探して歩き回った。彼女の無事を知りたかった。

マリリンから電話があつたのは、甚爾が東京に戻ってから一月過ぎた頃だった。荒れた肌にくぼんだ目元、髪にはタバコの濃い臭いが染み付いている。

「心臓がさ、ちゃんと育たなかつたみたいで」

胎児の心房と心室の間の弁が、血の逆流を防ぐ役目を果たしていなかったんだという。いつも昼間からうるさい店内なのに、タバコをふかしながら疲れきった笑みを浮かべるマリリンを見てると……全ての音が遠くに感じられる。

「どうしますか、だつてさ。どーしますかつてそんなの産みたいに決まつてんじゃない」  
換気が悪い店内だから、タバコの煙が天井を覆つて雲みたいだ。

だけどさ、大変な体を抱えて生きてかなきゃいけないのつて、あたしじゃなくてお腹の子なんだよ。……そう考えたら産めなくなっちゃった。ずつと娘を側で支えてやるわけじゃない、寿命で言つたらあたしの方が先に死ぬ。娘を途中で放り出して、あたしだけ先にこの世からオサラバしちゃうんだ。そんなの出来ないじゃん。

でもさあ、だけどさあ……。

「産みたかったなあ……」

限の刻まれた目元から落ちた涙がテーブルにひたひたと染み込んでいく。

——呪いのせいなのか？ 甚爾の身近な人間が子供を産もうとしていたから、標的にされたのか。分からない……だって甚爾は呪いを知覚できるけど視認できない。祓う手段を持つてなかったから、呪いについて、呪霊について詳しくない。どんな呪詛が届いていたのか甚爾には知る術がない。

喉がカラカラだ。拳を握りしめてるはずなのに、指先に感覚がない。目の前がぐるぐると回る。世界が歪んでいく。

いつの間にか呼吸を忘れていたらしい。かは、と息を吐いた。

もし、呪いが原因だったなら。

もし、禪院の呪いがマリリンの子を奪ったのなら。

甚爾は自分を許せない。自分が呪われていると知っていて、それを放置していた自分が許せない。脳内に繰り返し響き渡るマリリンの声——あんたのせいだ。あんたがいたから。あたしの子を返せ。あんたが悪いんだ。

まだ何も食べてない胃から胃液が食道を逆流し、甚爾はすっぱい液体を吐いた。マリリンが目を見開いて隣のテーブルの女が「やだあー！」と悲鳴を上げて店員が走つてき

てそして、病院で目が覚めた。

——俺のせいなのか。

## その7 (人を呪わば)

できちゃった婚をした。相手は大学で同じゼミの子……三年のときから付き合ってるミキちゃん。ストレートの長い髪がとつても綺麗で、小さく花がほころぶみたいに微笑むミキちゃんに僕は恋をした。何度もアタックして四年になる前に領いてもらえて、何度が繋がって——「できちゃった」と言われた。

ゴムをしていても、微少な傷や穴が空いてしまうことがあるから絶対に妊娠しないと限らないらしい。知らなかった。

責任を取る、とミキちゃんの手を握った。ミキちゃんの恋人として、お腹の子の父親として、責任を取ると精一杯の気持ちも伝えた。

お腹の子供が女の子と分かった後、子供の名前はミキちゃんが用意した——津美紀。つみき、かわいい名前だ。早く君に会いたいね。

ミキちゃんの出産に立ち会った時、ミキちゃんは汗をびっしり流して狼のように吠えたり痛いって叫んだり、名前を呼んだりした。

お互い学生だし、うちは父親が借金残して蒸発した母子家庭。東京で働いてる姉ちゃんが仕送りをしてくれてるからどうにかこうにか生活が成り立ってるような貧乏暮らし

しだ。結婚式は神社で参拝、披露宴なんてできなかった。

ミキちゃんは盛大な式ができなかったって不満そうだったけど、ミキちゃんの家もそんなに余裕がある訳じゃない。

テニスサークルに入ってたミキちゃんは交流が広い。妊娠中は飲酒ができないからって理由で津美紀の出産後、サークルの人たちがレストランを借りてパーティーを開いてくれた。津美紀はミキちゃんの両親が一晚世話をしてくれることになった。ありがたい。

参加者の一人、ブランドの服を着た茶髪の男の名前はシユウタといった。シユウタやシユウタと似た感じの雰囲気的男連中とミキちゃんの距離は仲良さそうで、近かった。

離れた席から、酔ったミキちゃんの大きな笑い声が聞こえた。

しわしわの赤ん坊の期間が過ぎたら、津美紀はミキちゃんそっくりの顔になってきて、かわいかった。将来は美人になるに違いない。赤ん坊って芯がないんだ……だっこしたらぐんにやり曲がる。壊れそうで怖い。

そんな壊れやすい赤ん坊の感触で、僕は決心を新たにした。ミキちゃんと津美紀を抱えてしつかり立つ大黒柱にならないと。

二人で住み始めた借家に、頻繁にミキちゃんのサークルの仲間が来ているみたいだった。もう就職先は決まっていたけど就職までの間だってお金は飛んでいく。粉ミルク

や紙おむつは毎日減っていくものだし、安いものじゃない。

大学の本屋や駅前のコンビニでバイトしながら、卒業までの毎日を過ごしていた。姉ちゃんから届いた結婚出産祝いほもしもの時のためにとっておきたかった。

大学を出たら、会社勤めで靴底を削る毎日。ほぼ寝顔か泣いてる顔しか見れてないけど津美紀はかわいい。津美紀を見たら疲れなんて全部吹き飛ばす。

床に落ちていた洗濯物を拾って洗面所に持っていく。ペランダにはシーツが干してあった。

ミキちゃんも僕もたばこを吸わないのに、ゴミ箱に吸殻があった。誰か来たかいつて聞いたけど誰も来てないよって返事。友達が来たんじゃないのなら、この吸殻は誰のだろう。

うちの会社は二年目までの新人はみんな棚卸し要員として休日出勤が課される。九月の末、会社に泊まって棚卸し作業をした。事務のおばちゃんが家から持ってきたいなり寿司はほどよく醤油の風味がして、ありがたやありがたやと皆でおばちゃんを拝みながら食べた。

日曜の昼過ぎに解放されてよたよたと家に帰ったら、玄関に見慣れない男物の靴が三つ。ピカピカに磨き上げられた革靴だ。

うちの借家は駅から遠い。二階建ての家なのに築数十年だから賃料が安くて、津美紀

の泣く声で人に迷惑をかけないようにと選んだ。

足音を殺して廊下を歩いた。肉がぶつかり合う音が聞こえていた。——ミキちゃんは。ミキちゃんは僕らの寝室で——茶髪の男たちと絡み合っていた。

男が三人、女はミキちゃんともう一人。僕は家から逃げ出した。

——ミキちゃんの出産に立ち会った時、ミキちゃんは汗をびつしり流して狼のように吠えたり痛いって叫んだり、人の名前を呼んだりした。

ミキちゃん、シユウタって、誰？

——テニスサークルに入ってたミキちゃんは交流が広い。妊娠中は飲酒ができないからって理由で津美紀の出産後、サークルの人たちがレストランを借りてパーティーを開いてくれた。津美紀はミキちゃんの両親が一晚世話をしてくれることになった。ありがたい。

参加者の一人、ブランドの服を着た茶髪の男の名前はシユウタといった。シユウタやシユウタと似た感じの雰囲気的男連中とミキちゃんの距離が……不自然なほど近いように感じられた。

酔ったミキちゃんの大きな笑い声が、耳に障った。

——大学を出たら、会社勤めで靴底を削る毎日。ほぼ寝顔か泣いてる顔しか見れてないけど津美紀はかわいい。津美紀を見たら疲れなんて全部吹き飛ばす。

床に落ちた洗濯物を拾って洗面所に持っていく。古いベランダには、もう夜も遅いの  
にシーツが干してあった。

——ミキちゃんも僕もたばこを吸わないのに、ゴミ箱に吸殻。誰か来たかいつて聞い  
たけど誰も来てないよつて返事。

友達じゃないならこの吸殻は誰のだろうか？ 寝室にたばこの臭いが染み付いている  
気がした。

予感はたくさんあった。あったけど、信じたかったから……見えないふりをしてい  
た。

通りに出て、駅に向かってがむしやらに走った。無我夢中だったから今自分がどこに  
いるのかも分からなくなつて……古い商店街の一角、電柱に手について息を整えた。べ  
タバタと電柱に貼られた出張ホステスの広告。

商売なら、そういう仕事をしているというのなら受け入れられた……と、思う。姉  
ちゃんがそうだから——姉ちゃんが高校を中退して働きに出てくれたから僕は大学に  
通えたんだ。僕はそういう人たちを差別していい立場じゃない。

でもこんなの、こんなのはただ、裏切りじゃないか。

電柱に貼られた広告の中に、探偵事務所のものがあった。浮気、素行調査、その他……  
今までだつて視界に入つてたはずなのに、こういうときに見えるようになるんだ。

食い入るように見つめて電話番号を覚えた。鞆はどこかに落としたりから、手元には手帳も何もなかった。

姉ちゃんから貰った金は興信所を雇う金になった。職場で大掃除があるなんて嘘をついて土日をカプセルホテルで過ごし、後日、探偵の報告を受けた。

報告書だというファイルを広げて説明を受けた。ミキちゃんが入っていたテニスサークルはヤリサーだそう。ヤリサーって何ですかと聞いたら、探偵の人は「性行為が主目的のサークルです」と言った。ヤリサー、へえ。初めて聞いた。

子供の父親が僕である可能性は低いのではないかと探偵は言葉を濁した。避妊のためにゴムをしていた僕より、避妊していたとは思えない乱交相手の誰かが父親である確率は高い。

それでも、それを知っても津美紀はかわいい。僕が自立しようと頑張れたのは津美紀がいたからだ。

なのに……興信所に紹介された弁護士先生が言うには、女に原因のある離婚でも、僕が津美紀の親権を取るのには難しいらしい。実父であるか分からないことも理由の一つだけど、たいいていの場合で子供は女親といるべきだと家庭裁判所が判断するそうだ。

離婚したら津美紀を奪われる。離婚しなければ津美紀の健全な成長が乱される。

困ったな、どうしようか。

——数ヶ月後、ミキちゃんが死んだ。死ねばいいのにつてずつと思つてたお陰かな？  
高架の歩道橋をシユウタと腕を組んで上つていたときに、足を滑らせて、二人絡み合  
うようにして落ちたらしい。病院についたらミキちゃんの両親がいて、蒼白な顔色で僕  
を窺つていた。笑つちやつたよ。だつてミキちゃんの両親……特に父親だけど、挨拶の  
とき「お前に娘はやらん！」つて怒鳴つて僕を殴つたんだ。挨拶はそういうものだと思  
つてたから黙つて殴られたけど……これだからね。

その大事な娘が結婚から一年足らずで浮気して、浮気相手と事故死したなんてホント  
笑つちやう。

血の気が全く引けて白い顔をしながら平身低頭して「うちで津美紀を引き取りましよ  
うか」なんて言つてきたから、何言つてるんだらうと二人の正気を疑つた。津美紀は僕  
の娘だ。こいつらになんてやるものか。

こいつらが育てたミキちゃんがあだつたんだ、津美紀がミキちゃんみたいに育つな  
んて考えたくもない。津美紀は僕と母さんで育てる。津美紀の親権は僕……僕の家  
にある。

東京から飛んで帰つてきてくれた姉ちゃんは当然ミキちゃんの浮気なんて事情は知  
らなかつただけど、僕の顔を見て「何があつたの」と聞いてきた。

姉ちゃんは電話を引いてたり携帯電話を持つてたりしなくて——週に一度か二度、公

衆電話からうちに電話をかけてくる。世間様に好まない水商売だからって僕の結婚のときも津美紀が生まれたときも、うちに帰ってこずにお金だけ送ってきた。ずっと東京に行ったまま何年も会ってなかったのに、姉ちゃんは一目で僕の機嫌が分かるのか。有り難くて嬉しくて……頭が下がった。

詳しいことは話さなかった。津美紀は姉ちゃんの姪、それでいいじゃないか。

東京での姉ちゃんの暮らしについて色々聞いた。僕と同じ年の弟分がいて、最近その人が結婚したらしい。十二月末か一月の始めくらいに子供が生まれるそう。奥さんの方から弟分さん——トウジさんにアタックしたらしいけど今じゃトウジさんの方が奥さんにベタ惚れで、せっせと奥さんと子供のために巣作りしてるのかわいいんだと教えてくれた。

お互いにぞつこんな夫婦だから一緒にいて気持ちがいいよと笑った姉ちゃんに、母さんが「あんたは結婚しないの?」と——言った。

姉ちゃんは笑顔のまま「あたしはしないかなあ」と答えた。

母さんが不審そうに姉ちゃんを見て、僕もなんだか違和感を覚えて姉ちゃんの顔をまじまじ見た。

「おろしちゃったんだ」

どうして、とは聞けなかった。僕に事情があるように、きつと姉ちゃんにも何かがあ

る。

——人を呪わば穴二つという。二人呪ったなら、二人分支払わないといけない。

姉ちゃんに東京を案内して貰おう、観光しようと話して、車を借りて高速に乗った僕らの目の前で車がスリップ。咄嗟にブレーキをかけたけど……無理だ。僕らの乗った車が、相手の車の腹に飛び込んでいくのが分かる。助手席の母さんは膝の上の津美紀を後部座席に投げ、ぎゅうと目を瞑った。

半生を思い出すのって、走馬灯って言うんだっつけ。

マリリンの父親が残していった借金が完済されるらしい。母親と弟が死んだ事故で下りた慰謝料が入れば、すぐ。

「そんな金なくなつてき、あと少しだったんだよ」

慰謝料なんてなくなつたって完済できた、とマリリンは言った。

すばすばと味わうことなく灰にされていくのはマイセンの3ミリじゃなくて10ミリ。

「あの子はあんたと同じ二十三歳で……これからだつたのになあ」

ずっと苦勞してきたから、これから幸せになつてほしいと思つてたのになあ。人生つ

てクソだわマジで。いやんなる。

ままならないにも程があるんじゃないの。酷すぎるっしょ。

マリリンの愚痴を聞きながら甚爾もたばこを取り出した。甚爾は普段たばこを吸わないけど、付き合い程度には吸える。マリリンが欲しがるから甚爾が買うのはいつもマイセンの3ミリだ。

マリリンの隣で一緒にヤンキー座りして、ぶかぶかとたばこをふかす。甚爾はマリリンの家族に会ったことなんて一度もない。だけどマリリンの面倒見の良さとか性根の明るさとかから、どんな人たちだったんだろーかと想像することは出来る。真面目で、人の痛みを理解しようと努めるような善人だったに違いない。

しばらくそーやって過ごして、マリリンは「どっこいせ」と掛け声ひとつ上げて立ち上がった。

「葬式のあいだ津美紀の面倒見てくれてありがとね」

「いえ、津美紀ちゃんはあるまり泣かなくて良い子だったつす。恵と比べりや天使つすね」

「でしよ〜？ それね、弟に似たのよ。あの子も全然泣かない子でさあ。ほんと泣かないもんだから逆に心配になったから頼たつねつたりしてわざと泣かしたこと何回もあるのよね」

「何してるんすか」

「だけど残念ながらとゆうべきか、慰謝料での借金完済はできなかつた。相手方には支払能力がなく、雲隠れ……つまり夜逃げしてしまったのだ。丁寧なことに家財道具はリサイクルショップに売り払われて、鍵屋を連れた裁判所の執行官が立ち入りしたら室内はほぼ空の状態だったそーな。」

「ライジング・サンって実在したの?」

「お待たせしました、夜逃げ○本舗ですってそんなまさか」

流石に一晩で逃げたわけじゃあないはず……きつと。

悲しい話、どつかの企業の車と事故起こすのと、個人の車と事故起こすのは、こーゆーオゼゼの面で大きな違いがある。企業は自分とこの社員が仕事中に起こした事故について使用者責任とゆーのを負ってて、被害者が「お前のとこの社員だろ、慰謝料払え！」って言うてきたら慰謝料の全額を支払う義務がある。

使用者責任とゆーのを分かりやすく説明するなら、使用者ってのは凄く獰猛でヤバイワンコの飼い主なのだ。ペットの躰は飼い主の責任だから、ワンコが庭から脱走したり人を噛んだりしないよーに飼い主は躰ないといけない。でもワンコが庭から脱走してそこらへんを歩いてた人を噛んじゃった。「犬のしたことです……」なんて言ったところそんな道理は通らないわけで、飼い主は噛まれた人に対し手術費用やら入院費

用やら、怪我のせいで働けない分の補填やらをせねばならぬ。

これが使用者責任とゆうやつだ。

じゃあ事故を起こしたやつが責任逃れてウハウハかとゆうと、そうでもない。事故を起こした労働者の帰責性……たとえば会社が無茶苦茶なシフトを組んだせいで三徹目、意識がもうろうとしてて事故を起こしてしまいました、みたいな状態だったら労働者は悪くないから責任が軽い。

会社の車で社外に営業に行つて、帰りに一杯ひっかけて飲酒運転したら事故りました、こーゆうのは当然労働者の責任が重い。

労働者は被害者に支払う慰謝料のうち、「労働者本人の責任の重さ」で負担額が減ったり増えたりする。当然のことね。

とまあ長く話したけど、つまり会社の車が加害者ならぬ加害車になったら、被害者は慰謝料全額を手に入れられる可能性が高いのだ。だって会社だもん、夜逃げなんてそんな簡単に出来るものじゃあない。

でも個人が相手に「オゼゼ持つてまちえん。我が家は破産でしゅ」とか言われると慰謝料を貰えなくなる。その事故で稼ぎ頭が事故死してたとしてみろ、被害者一家は一気に困窮するからホームレス○学生生活が始まるのだ。全く笑えない話。

マリリンの家族が死んだ事故の加害者は、個人だった。逃げられたらそこでおしま

い。

マリリンの母親も弟も遺せたのは骨と日用品だけ。実家って言っても安い賃貸アパートだから、引き払ってしまったら……二度と帰れない場所になる。

葬式から四ヶ月が過ぎたある日、マリリンが甚爾たちの家に来た。あたしき、田舎に帰ることにしたよ。あつちでスーパーのおばちゃんやって生活するんだ。

実家も東京のアパートもどっちも維持するなんてまあ無理な話。なにせ片方のガスや水道を止めてたとしても毎月数万円かかる。実家か、十数年住んだ東京か天秤にかけて——マリリンは実家の維持を選んだ。借金は先日無事に完済、今の仕事に拘る必要もない。

甚爾にとってマリリンは、東京でできた姉だった。血が繋がった実の兄弟連中なんてドブを煮詰めたよなクズばかりで、師匠は姉とは言い難くて……どっちかってゆーと婆ちゃんの存在だ。

少し年上の女の人で、甚爾が尊敬してる唯一の人。それがマリリンだから、彼女とここで別れてしまったら——寂しい。お中元とお歳暮を送り合うだけの知り合いになるなんて嫌だ。

甚爾は膝に乗せてた息子を持ち上げた。

「あの、津美紀ちゃんに従弟は要らないっすか」

「へ？」

「盆休みとか年末年始に会って飯食ったり、親戚付き合いつばいのしたりできるチビが……ここにゐるんつすけど」

『山』にはわざわざ盆やら正月やらに帰らなくても問題ない。甚爾は一応対外的には自営業つてことになつてるし、どーにでも都合をつけられる。盆と正月以外の時期に『山』へ帰つたらいいのだ。

——恵に従姉ができたと師匠に電話で報告したら、今度連れてこいと言われた。無理言うな。

## その8 (引きずり込め!魔道師さん!)

だいたい千年前、リタ・ギニヨレスクは生まれた世界を離れ、異界に転移した。異界への道を探しだしたのは赤眼の魔王・シャブラニグドウの配下……の生き残り。

地球という星であること。大陸が六つあること。大きく分けて白人、黒人、黄色人種の三種類の人種がいること。ほぼ単一民族で構成された日本という国があること。そーゆー情報だけで『地球』を見つけ出した高位魔族が凄いのか、それとも探せば案外簡単に異世界が見つかるものなのか。そこらへんのこととはリタには分からないけど――

――高位魔族が地球を見つけれなかったのは事実なわけで。それで高位魔族のはしくれなゼロスが異世界である地球と行き来したら、始めは獣道だったものが千年後には天下の大通りになってました、なんて別におかしい話じゃない。

でも、いくら道が通りやすくなったところで他の魔族は地球に来ない。とゆーのも、ゼロスによると他の魔族たちは「ただの人間だったくせに魔王の欠片を吸収して魔王もどきになったリタ・ギニヨレスクがいるんだから地球は地獄の世界だ。間違いない」とか「リタ・ギニヨレスクって魔族を踊り食いしてるんでしょ? やだ無理、こわーい」と

か「あの悪夢シヤブみたい吸いな女をせっかく円満に他所へ追い払えたんだ。こつちから会いに行くわけがあるか」とか言ってるらしい。いくら破滅願望があつても流石に踊り食いされるのはごめんだ、つて言つて道に近寄りもしないそうな。

リタの口はそれほど大きくないとゆーのに失礼な奴らだ。

とゆーよーに、天地がひっくり返つても絶対に魔族は通らない道だけど……たゆたいし王こと上司様はその限りじゃあない。年がら年中ぶかぶか揺れて暇を持て余してゐる様だ、高位魔族が頻繁に行き来している先——地球に興味を持つのもとーぜんと言えばとーぜんの話。

この頃（※この数十年）頻繁にこつちの様子見に来てゐるな——と思つてたらあの世界が舞台のラノベが発表されるわアニメ化するわ漫画が何冊も出るわ、一般市民の皆様が「日本語」でとはいえ混沌の海によびかけまくるわ、地球はL様の気配が年々強まつていった。

地球が爆発しよーが賽の目切りにされよーがどーでもいいゼロスはともかく、リタはそれを危険視していた。L様つてほら寂しがり屋だし……自分の支配する世界だけじゃなくて、別の世界も取り込もうとするかもしんない。

「私に還りなさい」つて魂のルフランを仕掛けてくるL様をどーやって止めるのか。地球は異世界です別の神の管轄です諦めてくださいとお願ひしたつて無駄だろーし、L

様を前にしたら部下Sその2でしかないリタは無力だ。地球は混沌の海とゆるLCLに還りました。完

く完くじゃー困る。ハッピーエンドならまだしもバッドエンドはホントに困る。どうしたもんか逆立ちしたりブリッジしたりして悩んだけど答えは出ず、リタはだんだん悩むのが面倒になって考えるのをやめた。

悩んだところで答えなんか出ないし。

さて、時は2003年。中国でSARSが流行し、スク○アとエニ○クスが合併して会社名が長くなり、ヒトゲノムが全て解読され、八月には火星が大接近して一昨日には自衛隊のイラク派遣が決まった。——そして、あと十日ほどで伏黒家のぶりちーエンジェル恵くんは一歳になる。ついでに弟分の悟くんも四日前に十四歳になった。

出産したばかりの奥さんを動かすのもまだ首が据わらない乳児を長距離移動させるのもリタがストップをかけたから、恵が生まれてから甚爾が京都に帰省するのは今日が初めてだ。もちろん向かうのは実家なんかじゃなく——『山』に帰るのだ。

甚爾は帰省の前、呪術のことも実家のことも『山』に住む魔王とその配下のこともほとんど全てのことを妻に打ち明けて、自分の話を証明するため簡単な魔術も見せた。『山』にいたる間は安全だが市街では実家の連中から襲撃されるかもしれねえ。俺から離れるなよ。

離婚されるのも覚悟の上で話した甚爾に、彼の妻は真面目な顔で「スレイヤーズ、ツ○ヤでビデオ借りてくるね。勉強しないと！」と言った。違う、そうじゃない。いや世界観とか魔術の種類とかはその通りなんだけど、そーゆー話じゃない……はず。きつと。

『山』の最寄りの駅で下りれば、なんとなく顔に見覚えがある親族の連中や他家の奴らがあちらに一人、そちらに一人、二人、三人四人五人その他たくさん。唇を食い千切らなばかりに噛み締めて睨んでくる彼らに「べろべろばー」って目を剥いて舌をヒラヒラさせてやりながら甚爾は『山』へ入る。性根のできた奥さんは「ダメでしょ」って怒ったけど知ったことじゃない。恵の教育に悪くてケッコケッコケッコ、脳みそが腐りきった呪術師の連中にお行儀よくする必要はないんだとお父さんが体を張って教えてるだけだ。俺は悪くない。

だけど三人が『山』に入ったとたん、麓まで迎えに来てたりタが真つ白な顔で崩れ落ちたのには驚いて飛び上がった。

地面に無様に這いつくばった師匠に慌てて駆け寄り「おい大丈夫か師匠！」と肩を掴むも、肩を捕まれた本人はふつかあい溜め息を一つ。

おろおろと困ってる甚爾の嫁の案内は悟に任せ、おまけに四日遅れの誕生日プレゼントも押し付け、甚爾はリタが復活するのを待った。

詳しい話は家に着いてからねってことで、居間にはリタと甚爾と恵の三人——奥さんはギニョレスク家の料理を教わるとゆー名目でゼロスや悟と台所だ。悟は簡単な手伝いと味見要員。もちろん甚爾だって長いこと一人暮らししてたから料理ができないわけじゃない……たんに甚爾より奥さんのが料理上手で遣り繰りも上手いのだ、適材適所。

熱い煎茶がすっかり冷える時間、リタはL様降臨の可能性があることを説明した。L様が来ちゃつたらみんな仲良く赤い海になるかもしれない。……あとね、これが本題なんだけどさ、あんたの息子L様に唾つけられてるわよ。まだ一歳児なのにお気に入り扱いなんでL様つたら気が早すぎじゃない? もしかしてシヨタコン? でも一歳児はロリシヨタじゃなくてペドだし、シヨタコンよりもつとヤバい。L様はペドフィリアだった? なにそれこわい。

「は? 恵が?」

目を剥いてる甚爾にリタは大きく頷く。

甚爾は呪力を全く持たないとゆー天与呪縛でもって、人間捨ててるレベルの五感やら身体能力やらを得た。もちろん天与呪縛の内容は人それぞれで、逆に呪力が無尽蔵になるとゆー恩恵の天与呪縛もある……代わりに半身不随とかになるけど。

つまり断ち物の一種が天与呪縛。

甚爾は血統から言えば絶対に持つてゐるはずの呪力の一切を奪われている。代わり  
に得たのが五感と身体能力——はつきり言おう、奪われたものと得たものの価値に差が  
ありすぎる。たつたこれだけの恩恵では甚爾は損をしている。

呪力がなければ呪霊を倒せないのに甚爾の呪力はゼロ。呪術師としては四肢をもが  
れたに等しい。どないせえ言うんや、つて頭を抱えたくなるよな酷さだ。

だけど甚爾は魔力を得た。魔王が作ったヤバイ石を一年掛けて自らの体に取り込み、  
魔王と高位魔族の指導の下で魔術の腕を磨いた。

——甚爾の天与呪縛は単純明快、呪力の一切を無くすことによる他の才能や能力のか  
さ上げ。

甚爾には魔道師としての才能があつた。やる気もあつて、努力を欠かさなかつた。一  
般の学校に通いながら部活動をして……定期試験や受験勉強だつてあつた。高校は私  
立を狙つたから試験前の数ヶ月は修行出来なかつた。

魔術だけに注力できる生活じゃなかつたのに、高三になる春にはもう、リタが教え  
られる全てを身に付けていた。

魔力も割と多い方だ。

だから分かる。甚爾とゼロスの間には文字通り桁が違うレベル差があり、そしてリタ  
はゼロスの万倍はヤバイ。

七分の一でしかないリタでこれなのに、七分の七シヤブラニグドウその他を創造した  
L様なんてどんだけヤバいか。——そのL様が、一歳になるかならないかとゆー赤ん坊  
に唾をつけた。信じられない……信じたくない。

「どうして、恵に」

「どーやって恵に接触があつたかなんて、どーして恵が選ばれたかなんて、L様ではな  
いリタたちに分かるわけもない。

分かるのは恵の将来が波乱万丈間違いなしってことだけだ。

ここまで来たらもうL様と会話できる人員を増やすしかない。現状では、L様の腕に  
すがり付いて泣き喚きながら地球の助命嘆願できるのはリタと甚爾の二人だけ……。  
こうなつてはもう仕方ない、悟を巻き込もう。

悟くん十四歳は思春期、無傷の腕に包帯を巻いたり物もらいでもないのに眼帯を付け  
たりノートに羽根の生えた十字架を描いたりしたくなつちやう年頃だ。——その思春  
期特有の情熱を、まだ柔軟な脳みそを、混沌の言語習得に使わせる。

悟は五条家の麒麟児だ。生まれながらにして豊かな呪力や強い術式を持ち、それを十  
二分に伸ばす才能もある。実家と折り合いの付かない甚爾と違い悟は一族の期待を一  
身に受けて育てられ、家の者が課す修行で手一杯だ。だから今までリタたちは悟に魔術  
を押し付けることがなかったし、悟にとっての『山』は家の面倒な勉強や修行から逃れ

られる場所だった。

でも、L様が地球に興味津々つぽいからには呪術界の天才児をのんびりさせてる猶予なんてものはない。一歳のベビーがL様の大暴れに巻き込まれる過酷な運命を抱えているんだから、十四歳のボーイはむしろ自ら率先して巻き込まれるべきだ。なあに大丈夫だ、厨二心があれば混沌の言語なんて楽々身に付けられるさ。なんせ五条悟くんは呪術界にその名が轟く天才少年なんだし、まあ三日くらいあればペラペラになる。間違いない。君ならできる。

でも正面から頼んだところで天の邪鬼な悟が頷くわけがない……とゆることで、リタと甚爾は二人で悟に発破をかけることにした。煽るとも言う。「えーマジ（魔術に関して）童貞!?」「キモイ」「（魔術について）童貞が許されるのは小学生までだよねー」「キヤハハハ」以下略。嫁がうさみちちゃんみたいな目で見てくるのも構わず、甚爾は弟分をからかいまくった。甚爾は愛する息子のためならエロ本の真似だってできる。

「だああ!!」むかつくことばつか言いやがって、甚爾にできることなら俺に出来ないわけないだろーが! おーおーやったらあやったらあ、あとで吠え面かくんじやねーぞ!」

甚爾は満面の笑みを浮かべそうになるのを頑張って我慢し、鼻で嗤う。

「お前には無理だよ」

——それから二ヶ月。悟が混沌の言語を習得したと聞いた甚爾は愛の巣で拳を天に突き上げた。有難う天才、愛してるぜ天才。ちゅーしてやろーか。

レンタルビデオ店で借りてきて毎日一話ずつ見てるスレイヤーズのアニメが流れる居間ではママの膝の上に座った幼児がキャツキャとご機嫌に笑っている。この幸せな家庭を守るため、悟には魔術も身に付けてもらわねばならない。

そういうえば、むかし甚爾の胸に埋められたあの赤い石。一体あれは何だったのか。もしかしてこのグローブのデーモンを召喚できるコレと同じものだったとか——真実とは時に残酷なものだから、知らない方が良さそうだ。甚爾は名探偵じゃないから「いつも一つ」な真実なんて知らなくても構わない。考えないようにしよう。

ちなみに甚爾は探偵モノならホームズよりコロンボが好きだ。安楽椅子に座ったヤク中はちよつとなあ。

「頑張れよ悟……」

リタの話によるとだけど、2008年にはまたスレイヤーズの新作アニメが放映されるらしい。なんでそんな未来のこと知ってるのか謎だが……リタが断言しているからには間違いない。

悟には才能がある。魔力に目覚めればきつと魔術もスルスルと身に付けるだろう。そして師匠の力を借りる魔術も学んで——そして絶望するのだ。術式を持つ悟は高専

に通うことになる……同年代の子供は新旧作アニメを見てたり原作を知っていたりするだろう。そいつらの目の前で竜破斬を使ってみろ、影で「好きが高じて術式にまで高めた歴戦のアニオタだ、近付いたら引きずり込まれるぞ」とか「あの年して魔法の呪文とか恥ずかしくないのかしら……」ってヒソヒソ噂されたり、人の話をちゃんアニメのアニメリと聞かないアミバカに絡まれたりするんだ。

最高じゃねえか、その絵面。

甚爾はにっこり笑んだ。悟は今十四歳だから、高専に入るのは来年の春。——そうだ、来年の春からはフリーランスを辞めて定職に就こう。

ケータイを取り出してアドレス一覧から番号を探す。選択して、発信。

「あ、俺俺」

軽い口調のせーか詐欺の電話に聞こえる。

「前にあんた勧誘してきたろ。今でもアレ有効か？」

電話の相手は驚いたよーに声をあげる。それに甚爾はふはつと笑って目を閉じた。「高専の仕事なんざ儲からねえしごめんだと思ってたが、興味が湧いた」

なってやるーじゃねえか、体術教師。

## その9 (オタクは感染する)

きやら〇いをメガホン状に丸め、甚爾は担当生徒に激励を送る。

一学期には間に合わなかったけど、甚爾は二学期から呪術高専の体術担当になった――夏休み明けから在校生は走ったり実戦での訓練をしたり。

で、庵歌姫は走ってる方。

「庵ー、へろへろ走るな、気合い入れろ気合いー冥冥を見習えー」

メガホンにされてるき〇らびいは十月放送開始のアニメが表紙だ。ツインテールの小学生がパンチラしながら「どうして魔法の呪文はリリカルマジカルなの？」と目で訴えてる――らんまで磨かれた甚爾にはパンチラ小学生は「おやおや元気だねー健康的(?)だねー」としか映らないけど、世の中には小学生相手に性愛を感じちゃってる層もいる。でも人間誰しも老いるもので、永遠の小学生なんてものはいない。小学生女兒にしか性的興奮を覚えぬ奴は「目の前にいる相手」じゃなくて「小学生とゆー概念」しか見てないんじゃないかなろうか? パーツ萌えとか属性萌えの一種と言えそーなのかもしれないけど……甚爾には理解できない分野だ。

ちなみに十月開始のアニメで甚爾が観ようと考えているのはジャぱん。

「ひいーっ、ひいっ、ひい……ぜえっ、ひよーっ!!」

校庭をぐるぐる何十週目になるか分からないくらい走り続けてる俺は目もぐるぐるにしながら不思議な叫び声をあげた。大声が出るだけまだ安心していいだらうけど……そろそろ終わりにしないとヤバいかもしれない。

「俺イあとちよつと！ あとちよつと走ればゴールでいいぞー。冥冥もそのゴールで上がれ」

あと十メートルくらいで一応のゴール。ランニングのフォームを保てず酔っぱらいの千鳥足みたいな俺がゴールを越えてからは二人三脚みたく支えてしばらく歩き、ポカリの蓋を開けて渡してやる。

腕が上がらないらしい俺が「おえ」とか「あー」とか呻くから、甚爾は仕方なくペツトポトルを口に突っ込んでやった。日差しで温くなってるポカリが俺の胃に消えていった。

——俺は二十リットルの水が入った袋を背負って、一周二百メートルのトラックを何十周か走った。背中ではちやばちや揺れる水は走るのに邪魔だし、約二十キロあるから重い。でも除霊現場から巻き込まれた一般人を背負って逃げるなんてことはよくあるし、その一般人が錯乱してないとも限らない。それと比べれば水袋はギャーギャー耳元で騒がないからまだマシだ。代わりにチャポチャポ揺れて文句を言ってくるけど。

されるがままの庵が背負うリュックのバックルを外し、腕を抜いてやればリュックがどすんと地面に落ちた。登山用のお高いやつだ……背中に当たる部分がメッシュになって、袋は弧を描いているから背中が蒸れない。胸の上、胸の下、腹の三ヶ所にバックルがありリュック自体は体に密着するから、中身が暴れる水でなければ長時間背負ってられるだろう。

「伏黒先生……どうして走り終わってから歩かせますか？」

冥冥は庵より十周近く多く走ってるはずだけど、へろへろでポロポロな庵と違って汗すら爽やかだ。そろそろ冥冥の水袋を三十リットルにしてもいいかもしれない。

「俺も詳しくは知らんが、俺の師匠によると『急ブレーキをかけて止まるチャリはすぐに悪くなるけど、ゆっくりブレーキをかけて止まるチャリは長持ちする』って話だ。人間様より単純な構造のチャリでそうなんだから、複雑な構造をしている人間なら余計にそうだろうよ」

「なるほど」

冥冥は大きく頷いた。甚爾の師匠——リタの比喩は分かりやすい。

「こうして頻繁に水分補給をさせるのも何か理由があるんでしょうか」

「そりゃ、呼吸するだけで水分消費してんに、汗かいてる時に水飲むなーなんてバカな話あるか？」

「ふむ……」

科学とゆーものは日進月歩だ。ついこないだまで64メガバイトのメモリーカードが高額で売られてたのに、二〜三年経ったら256メガバイトがそれと同じ値段で売られてる……なんてことはザラにある。スタミナハンデ○カムも始めは「(録画時間は)八時間だもん」つつつてたのに、たつた二〜三年で「何で十二時間も録れちゃうの？」つて歌うようになった。

かがくのちからつてすげー！

そーゆー風に、昔の常識はいまの常識とは違うし、いまの常識はきつと未来の常識とは違う。いま「正しい」とされてるルールより、甚爾は自分が納得できる手法を選ぶ。師匠の説明が甚爾にとって納得のいくものだったから自分の担当生徒の指導方法として採用した——ただそれだけのことなんだけど、冥冥にとって興味深いことだったらしい。

授業や任務で聞いたこととか知ったことについて、冥冥が甚爾に質問しに来ることが増えた。

甚爾は体作りについての質問には教師らしく真面目にタダで教え——実家で耳にしたけど別に口止めされなかつたし口止め料ももらつてない話を、有料で冥冥に教えた。だつてほら、実家がそれで困ろーが苦しもーが甚爾には関係ないもんで……。

甚爾に懐いた（？）のは冥冥だけじゃない。

高専に在るのはほぼ全員が呪力を持つ術師とか補助監督とかで、「呪力ありません術式ってなんですかそれ」ってゆうー人は高専所属の術師の身内とかそんなのだけ。非術師と接触することが少ない高専の生徒の情操教育が云々とゆうーとても学校つばい理由により、体術を教える甚爾も嫁さんと子供を連れて高専の寮に入った。

そんで分かったのは、寮の料理担当者たちより、伏黒妻の方が料理が上手いとゆうーこと。持ち回りで生徒の食事を用意していた高専事務員の方々は「我々に特別手当を出すより伏黒さんを雇った方が安いし美味しいと思います！」と目を血走らせて雇用契約書を人事から強奪し、ご飯担当とゆうー今まで存在しなかった仕事の雇用条件を書類にした。雇用保険、労災保険、健康保険に厚生年金も加入。日祝休みで額面十三万はいかがでしょうか。

術師には屑が多いってのは学生でも同じで、うっかり微妙な味付けの料理を出すとかグチと文句が煩かったらしい。料理するために高専に入ったわけでもないのに料理をさせられ、不味いだのなんだのと文句を言われる——かなりのストレスだったに違いない。

寮の施設管理は総務がやってるから伏黒妻の仕事は昼食と夕食の用意だけ、それで日当だいたい五千円なのはさすが高給取りの業界。

ちなみに朝食はパンか、各自で冷やご飯をチンしてインスタント味噌汁と目玉焼き。昨日の残りがあればそれを食べても良いし、他に何か欲しければ買い出しを頼む……と言つても、元々生徒数が少ないうえ、やれ任務だなんだと頻繁に高専を離れるからいつも前日の夕食が余る。自然とみんな朝食は前日の残りを食べるよーになった。

日曜と祝日の食事はどーすんだって？ 自炊するか外に食べに行つたらいいのだ、任務でお給料貰つてるんだし。

美味しいご飯は心に余裕を生む。甚爾の赴任時は一年から四年までみんなカリカリした雰囲気だったのが、伏黒妻が飯担当になつて半月もすれば和気あいあいとしたものになつてきた。一般家庭出身の四年生<sup>タカシ</sup>が潤んだ目で「家に帰ってえ……カーチャン……」と呟く回数も増えたけど。

カーチャンはカーチャンでも恵くんのカーチャンである伏黒妻は先ずそーして高専生の味覚を掴み、「美味しいご飯を作ってくれる姉ちゃん」としての地位を得た。なにせ美味しいご飯の前では術師だとか非術師だとかつて不粋な枠組みは存在しない。姉ちゃんが作る飯は美味しい——だから姉ちゃんは正義。

遊びに行つたら美味しいおやつを出してくれる姉ちゃんと丸いほつべが可愛い恵くんがいる伏黒家の部屋に生徒が入り浸るよーになるのは早かった。その二人の旦那でパパである甚爾も引きずられる形で株価が上昇、クリスマス前には「みんなが慕う伏黒

センサー」が誕生し、恵くんは盛大に二歳の誕生日を祝われた。

「伏黒さん、なんでいつもアニメ流してるの?」

「スレイヤーズ見てる理由? ああ、めぐくんの将来のために流してるのよ」

「将来……ほほーん?」

甚爾の出生が禪院だということを生徒みんな知っている。流出したの伏黒女史。家出した若かりし甚爾と伏黒女史の運命的出会い、ロマンチックな再会、(伏黒女史による)情熱的なアタック、そしてゴールイン……とゆー彼女のノロケ話はもちろん、「え、あの人の前の名字? 禪院っていうの。私はよく知らないけど、なんか有名な名前なんだってね?」とゆー会話……個人情報ガバガバだ。

で、生徒の中には禪院家の現当主の術式を知ってるやつもいる。御三家に近い分家とかそーゆー生まれの生徒だ。

禪院家当主、禪院直毘人ぜんいんなおびとの術式は投射呪法という。自分で予め設定した動きをトレースするとゆー「え、なんて? もつかい言って?」な術式だ——分かりやすく説明しよう。

①自分がしたいと動きを決める。ちよつとくらいなら物理法則を無視した動きでもいい。

②セルアニメみたく一秒を二十四分割したコマによって構成されたものと見立てて、

①で決めた動きをその二十四分割のセル画に当てはめる。

③まあ、なんということでしょう、②のとおりに体が動くのです。

つまり、自分の肉体を使ったセルアニメを現実に映写する術式。

さてここで伏黒家の話に戻ろう。姉ちゃん、恵の母親は「めぐくんの将来のために」アニメを家で流していると言った。

御三家に近い家柄の生徒はこの言葉を誤解した。——伏黒恵の生得術式は禪院直毘人のそれに類似しているんだろう。まだ幼いからどんな術式を持って生まれたのか詳しくは分からない状態だけど、恵の父親である甚爾は「恵は当主に似ている」と感じたのだ。きつと。それで間違いない。

その誤解が高専生の共通認識になり、家族に伝わり、御三家に——禪院直毘人の耳にも届いた。

「ほう、あいつの息子が」

いま禪院が欲している相伝術式は十種影法術、手で印を結び影絵を作ることと特定の式神を召喚するものだから……伏黒恵が禪院直毘人に似た術式持ちなら、甚爾の息子は禪院が求める相伝を継いではいない。

甚爾から漏れた情報であればブラフの可能性を疑ったが、情報源が色々<sup>・</sup>と<sup>・</sup>抜<sup>・</sup>け<sup>・</sup>て<sup>・</sup>い<sup>・</sup>る<sup>・</sup>妻<sup>・</sup>の<sup>・</sup>方<sup>・</sup>。ある程度は信じて良いものと考えられる。

だから——今のところ伏黒恵は捨て置いて良い。これが禪院家の総意になった。

噂とゆーやつは本人の元にはなかなか届かない。悪い噂ならすぐ届くんだけど、良い噂やら良くも悪くもない噂やらはなかなか本人に到達せず、本人の周囲をぐるぐる回る。だから甚爾が息子の術式についての噂を聞いたのは三学期末、二月の終わりだった。

顔は怖いけど親切な夜蛾——呪術界の高倉文太と甚爾はこっそり影で呼んでたりする——彼が甚爾に差し出したのはビデオテープが入った紙袋だ。何かと思えば、映画製作のドキュメントビデオ。中古アニメグッズ専門店ならプレミア価格で売ってそーな美品だ。

「どうしたんです、これ」

「お前の息子の術式が禪院当主と似た術式になりそうだと聞いたのでな……映画のメイキングのビデオはコマ割りについて学ぶのに良いだろうと思っただけだ」

「はあ」

誰だそんなウソ広めたやつ、と思っただけど口には出さない。恵はまだ術式のじゆの字も分からない幼児だぞ。いくらパパの目を以てしても恵の生得術式がどんなものなのかなんてまだ分からない。恵のお気に入りのおもちやが何なのかは分かるけど。

とはいえ、誤解を解く必要性をさして感じないし、誤解させておいた方が都合が良さ

そーだ。色々と考えて甚爾はニッコリそれを受け取った。

「あざまーす」

紙袋抱えて愛する家族が待っているはずの部屋に戻れば、妻は不在で俺が寝転がってお腹の上に恵を乗せていた。

「あいつは？　そんでウチで何してんだお前」

「伏黒さんは買い忘れたものがあつたつて言つて買い物ですー。私は留守番とめぐくんの相手頼まりました。めぐくん大きい猫ちゃんみたいで幸せ……ずっとこうしていたい……」

「さよか」

テーブルの横に紙袋を置いて、デッキにビデオを入れる。

「あー！　北斗○拳のシン！　の声の人！」

「あたるだよ」

ジェネレーションギャップとゆるより趣味の違いか？　だつてあのアニメが放映されてたのは俺が生まれる前だし、ラムちゃんがブラウン管で「ダーリン浮気はだめだつちや」つて言つてたのも似たよな時期だ。俺は特濃ソースな顔面が好きなのかもしれない。

画面にはもっさいおっさんたちの音頭取りで一本の映画が作られていく様子が流れ

る。一枚一枚セル画を撮影していくなんてまあホント大変そーだ。まさか全部手作業だとは……。

「やつぱりめぐくんって禪院当主の術式と似た術式を持つてるんですね」

凄いとは思うけど自分がするのはごめん被ると思いいながらビデオを見てた甚爾に、ぼつりと零すように庵が尋ねた。

「やつぱり」ってどーゆーことだ。もしかして変な噂の出所は高専なんだろうーか？

「それ言い出したのが誰か知ってるか？」

「え、加野先輩ですけど……もしかしてまだ内緒にしておく予定だったんですか？」

加野は加茂の本家に近い分家筋だ。加野の先代が加茂の先代の弟だったから、加野の当主は加茂の当主の従兄弟。そして高専四年の加野は当主の末の弟だ。

何をどう誤解してそんな噂になったのか——ここまでウソ情報が流れてるとなると、恵の術式が判明したとき加野青年は大目玉で済まない叱責を受けるかもしれない。

「いや……まだ『そうかもしれない』って俺が疑ってるだけだから、恵がどんな術式を持つてるかはまだ分かってないんだわ。加野にもそう言っとけ」

「了解でーす」

軽く返事した庵に「ちゃんと伝えとけよ」と念押しして、甚爾は庵の腹から恵を取り返す。

恵がないと胡座が寒い。

## その10 (結局ジュピターは不在)

甚爾は自分の天与呪縛を便利に使っている――

「呪霊エ？ はあ、見えないっすね。ほら俺つてば呪力ないんで」

「呪霊を倒すなんてっ、ボク、呪力がないからそんな怖いことできませんっ」

「呪術は専門外でーす、担当者にとーぞ」

「身体能力だけが取り柄だから俺、現場には出ねーぞ」

リタから貰ったグローブかトンファーを使えば呪霊の力の源を削れる……千柿さんの鬼鮫さんがブンブンやつてる鮫肌みたいな道具だと思えばいい。

グローブとかを使わなくても魔皇<sup>アストラル・ウヴァン</sup>霊斬<sup>アストラル・ウヴァン</sup>を使えばそこら辺の鉄パイプを呪具もどき<sup>アストラル・ウヴァン</sup>にできるし、呪霊四王陣なら呪霊はもちろん術師のみなさんのメンタルを破壊できるし、<sup>ウイスファランク</sup>霊王結魔弾<sup>ウイスファランク</sup>では正義執行とゆーお題目の撲殺……もといタコ殴りができる。<sup>ガルクールハルト</sup>霊王崩爆旋<sup>ガルクールハルト</sup>なんて酷いもんだ、その場の自分のそばにいる奴以外の全員が精神と肉体を殺られる――フレンドリーファイヤを気にしないとゆー豪快な魔術だもん。

でも非常勤講師の伏黒先生は現場に出ないから、お休みが多い。

ええーっ、正月休みがない？ 大変だねえ学生さんなのに任務だなんてヒヤハハハ。



勢海老が鎮座ましまし、どうぞどうぞと三人で譲り合つて甚爾の口に入った。

蒸したのも美味かつたから今度は刺身で食べたい。

正月っていいな。正月特番はどこもみんな雛壇に乗つてて放送局毎の区別がつかないけど、仕事が休みで餅が美味い。水ちよつと多めで蒸して作つた餅であんこをくるみ、両面を軽く焼くと梅ヶ枝餅っぽくなるので太宰府が近くにない人は試してみよう。

——スーパーが四日から開くのでレジ打ちパートの万里も四日から仕事。三日の朝に波多野家を出たけど冬休みは十日まで。じゃあ今度は京都に行くか、と甚爾が運転するレンタカーで渋滞と無縁な高速を走り着きましたる『山』。嫁さん子供と荷物を『山』に置いて車を近くのレンタリースで返却し、滞在期間五日の里帰りとなつた。

居間には寝転がつて漫画を読んでる悟の姿。横に山積みになつてるのは、見たところ花○ゆめの漫画本だ。

——『山』にある漫画は少年向け少女向け関係なく揃つてて、甚爾も少女向け漫画を読んだ。BASA○Aとか彼方○らとかのファンタジーものには特に夢中になつた覚えがある。

実は『山』の図書室には全年齢向けだけじゃなく、成人以外立入禁止の暖簾が掛けられた隣室にスケベな物も揃つてたりする。エロゲやエロ漫画——有害図書の指定を受けてる作品は全部暖簾の向こうに置かれて十八歳以下は入れない。有害図書ガー青

少年の健全な育成ガーと国会で問題になる前……時期としてはだいたい沙織事件（エロゲの制作会社フェアリー○ールの社長が猥褻画像販売目的所持の罪で逮捕された事件。ちなみにその親会社はジャ○トってゆーんだが、文書作成ソフト○郎の会社とは関係ないので注意されたし）の前あたりは暖簾がなかつただけど、『甚爾ん家に行つたらエロ本が読める』なんて噂が広まるとヤバいので入室に制限がかかった。

甚爾はショックを受けた。目覚めてからまだ一年ちよつとの熱い性的衝動をどうしろと？

項垂れた甚爾に、リタが言った。

「あんたが隠してる物まで取り上げるつもりはないわ」

そして甚爾は——パチ屋に入ろうとしていたかにもスケベそうな顔をした爺さんに千円渡して「めちやくちやエロいのを買ってきてくれませんか」と頼んだ。爺さんは「任せろ」と雄々しく頷き、パチ屋に消えて戻ってこなかった。

世の中は糞だと学んだ。

そして高校は男子校、クラスメイトの兄貴の物とゆー話のエロ本を回し読みして語り合つた。女の子のおっぱいには夢が、おしりには希望がつまつてるんだ！——勉学の偏差値は高いのに馬鹿丸出しな会話だった。

高校卒業後は荒れたけどなかなか男女関係とゆーものとはご縁がなく、姉のよーに

慕ってるマリリンが水商売してたから風俗で脱童貞したらマリリンに噂が届きそうで怖かった。

甚爾は顔が整ってる方なのに、女性と縁の薄い人生を送ってきた。伏黒女史がアタックしてくるまで女の影とゆーものが存在しなかった。性欲がなかったわけでもないのに。

もしかすると甚爾の弟分も——悟もそれと似たような人生を送るのかもしれない。いや、甚爾の半生より酷い可能性もある。実家とほぼ絶縁して東京をふらふらできた甚爾と違い、悟は五条家の跡取り。地位とか血筋とか面の良さとかに惹かれた蛾が周囲に集ってくるのではなかるーか？

少女漫画にあるよーな恋愛なんてできないに違いない。悟が自由にできる金と権力は余るほどあるから、借金抱えた女の子を……みたいなことはできるだろーけど。

五条家の跡継ぎといえば。

「おまえ実家は？ 正月の挨拶あるだろ」

「めんどいからフケた。ん、お土産は？」

寝転がったまま悟は掌を突き出し、その悟の手を甚爾は軽くチョップする。

「ゼロスにもう渡したよ」

「え？ 俺の分は？」

「個別に買って帰るわけがねえだろ。リタにねだれリタに」

「可愛い弟が健気に待ってたつてのに、俺用の土産がないとは……あーあ、ケチくせえ兄貴だぜ」

悟は漫画を閉じて起き上がり、漫画を山の上に重ねた。

「ま、おかえり」

「おー。ただいま」

煎茶のお茶請けになったのは東京呪術高専の話。甚爾が語った「みんなから愛される素敵な甚爾先生」なんて疑わしいから誰も信じなかった。これが信頼とゆーやつだろ  
う。

悟はひでんマシンならぬ「ふしぎなあかいし」がまだ溶けきつてないそーで、魔術の訓練は高専に入ってからになる。甚爾が高専の教師になってくれて良かったぜ、あつちで魔術を教えてくれよなと笑った悟は知らなかった——理解できていなかった。

呪霊の湧きが多くなる長期休みに、甚爾がのんびり里帰りできているのは何故なのか。高専で長期休みとゆーものと無縁になる悟に、ニチャついた笑みを浮かべた甚爾が「がんば★」と家族旅行に旅立つ背中を見送らされる未来が訪れることを。

悟は考えてもいなかったのだ。

——そして迎えた春、チヨウチヨが飛んだから一年生。隣に座る子はいい子かな……

と期待していた悟は、開きつばなしの扉から教室を覗き込んで頭を横に振った。

「甚爾、こりや駄目だ」

「何が駄目だ。はやく教室に入れ」

「だってきよーしつん中、このご時世にボンタン着た目付きが悪い不良と、高一のくせに平気な顔して教室でたばこふかしてる不良しかいねーもん。ここでやってくのは無理だ」

「残念ながらそいつらがお前の同級生なんだわ」

俺とおんなじ一年生？ あれが？ 嘘だろ絶対。ならあいつらサバ読んでるんだろ、ボンタンは甚爾の同年代で、たばこふかしてるのは二十歳越えてるんだな。

今まで学校とゆーものに通ったことがない悟は、高専で出会う同級生に夢を持っていった。ドキドキドン！ と胸を弾ませていたのにクラスメイトは不良二人。嘆きたい気持ちには分かる。

「傷つくなあ……。私は不良じゃあないさ。ただ私に似合うファッションがボンタンだった、というだけなんだが」

「そーそー。私たち同い年だよ、怖くないよ」

教室前の廊下で騒げば中に丸聞こえなわけで、扉の枠にもたれ掛かったボンタンと、その後ろから体を曲げて身を乗り出した違法喫煙者が悟に笑み掛けた。

「うわ、うそくせ……」

そんなこんなで始まった新年度。担任が任務で不在になったから、東京呪術高専一年生の始まりは——副担任の伏黒甚爾の挨拶から。

「副担任の伏黒だ。呪力はないが体術は……まあ、実際に訓練すりや分かるこつた。そんじや白髪、女の子、お団子頭の順番で自己紹介しろ」

「せんせー、コレ白髪じゃなくて白髪はくはつでえす」

「細かいこと言うなよ。シラガだろうがハクハツだろうがどつちにしろ色素細胞が死んでるんだ」

「ワキガじゃないだけマシと思え」なんてよく分からないことを言われ、そういう問題だったつけと首を傾げながら悟は立ち上がり、ピチピチの一年生仲間——ボンタンの不良と喫煙の不良を交互に見やった。

「俺は五条悟。好物は土産物のお茶請け、嫌いなものは外野から口を出してくるだけの連中。よろぴく」

「五条悟くんでしたー、拍手ー。はい次、女の子」

「家人硝子。たばこは術式に必要なだから吸ってるだけで不良じゃないよ」

「なんだそれなら仕方」

「ま、嘘だけど」

副担任の前でも平気な顔をして喫煙してる家入はやはり癖の強い生徒のよーだ。物言いたげな表情の悟はスルーで次の人。

「それじゃ最後、お団子頭のうさこちゃん」

「先生、私のお団子は一つだけですし私は男です」

「おつ、お前セーラム○ン見てたの？ 親近感覚えるわ、よろしくな」

「妹がいるので……」

たんこぶ一つのうさこちゃんは夏油傑、崇高な信念を持つて呪術師になることを決めたっぽい一般家庭出身の少年だ。——この三人が今年の東京呪術高専の新入生。これでも同級生が多い方なんだから、呪術界隈は万年人手不足とゆうのも納得しかない。

「うさぎちゃん、俺のことはレイちゃんって呼んでいいよ」

「おや……じゃあ私のことは亜美ちゃんって呼んでね」

「ノリノリだなお前ら。先生はコードネームはセ○ラーVでいくから、ブイちゃん先生とお呼び」

「この学校には教師も生徒も馬鹿しかいないのか……？」

そんなわけで、セー○ーV伏黒甚爾、セーラ○ムーン夏油傑、セーラーマ○ズ五条悟、セーラーマーキ○リー家入硝子とゆう後世に残る酷いあだ名を持つ学年が誕生した。きつと担任がタキシ○ド仮面をしてくれるはずだから、あとは他学年にジュピターとか

ルナとかを用意すればいい。

京都の呪術高専にウラヌスとかネプチューン向きの人材がいますよーに。

「さて、今こうやって自己紹介をしたわけだが……我が校には一般の学校には存在する『入学式』、『始業・終業式』、『卒業式』といったイベントがない。当然『新年度のガイダンス』なんてものもない」

表情を引き締めた三人に、甚爾は教卓に手をついて——にやりと笑った。

「担任がいらないから科目の授業も呪術の授業もない。だから……これから体術の授業だ。そのままの格好でグラウンドに集合！ 十分後に始める！」

「はい、ブイちゃんせんせー、体操服に着替えなくていいんですか？」

「いい質問よ亜美ちゃん、今回は制服のままがいいの。……あ、かなり走るからスポドリ買ってこいよ」

初対面。家入はノリがいいけど悟は始めての学生生活で緊張してたし、夏油は真面目なんだろうけど少々面構えが不良くさい。結果的に三人は会話一つせずグラウンドに出た。

グラウンドに並べられていたのは水がなみなみと入ったバケツが三つとリュックサックも三つ。三人とも頭からバケツの水をぶっかけられた。

「これから、うさぎちゃんたちにはその濡れ鼠の状態でグラウンドを走ってもらおうわ」

「その女言葉やめませんか」

「この目的は三つあるの。一つ目はあなたたちの今の体力を調べること、二つ目は今の改造制服で任務に行つて、どんな場面でも自分が思ったように動けるかを確認すること、そして三つ目は同じ悲惨な目に遭わされた者同士で仲間意識を醸成することよ」

「悲惨な目？」

三人は革靴つまり革靴を履いていたから、頭から水を被つたら靴の中がスニーカーより酷い状態になる。それだけでも走りにくいのに十リツトルの水袋入りリュックサックを背負わされてヨーイドンだ。同年代の中では体格が良くて体力に自信があつた夏油も十五周目には踵やら膝やらが悲鳴を上げ始める。

全員ゲロ寸前まで走らされ、大の字を三つ並べて青空を見上げる。三人の頭がある方に鬼畜生甚爾がしゃがんだ。

「革靴は走りにくかつただろ。あとボンタンとスカートも足に貼り付いて邪魔だつたら？」

高専の制服はお前らの仕事着だ。雨に降られたり、劣悪な足場を移動しなきゃいけないって場面はこれから何度も起こりうる。だから――

「今のファッションを貫きてえなら体力つけな。そうじゃないなら、スニーカーを履くとか動きやすい格好しな。お前らには身体能力を底上げさせられる呪力つー便利な

力があるが、基礎体力がミジンコならいくら底上げしたところで魚のエサにしかたねえよ」

翌日夏油が履いたのは普通のスラックスで、家人はスカートの下から七部丈のレギンスが覗いていた。三人とも靴は軽く動きやすいスニーカー。授業の後、事務員に頼んで最寄りのショッピングモールへ連れてつてもらったのだ。

寮の食堂で昨晚の残りをチンして食べ三人仲良く外へ出た——ちようどそこに、隣接する教職員寮から出てきた甚爾がいた。いい子の夏油が「おはようございます」と良い子の挨拶をする。

「おーおはよー。そうだ、昨日伝え忘れてたけどな、担任は昨晚帰ってきたから今日の朝礼は担任がやるぞ」

「はーい。じゃあブイちゃん先生は来ないんですか?」

「行く行く行くこうぜベルサイユ。あ、言っておくけど、あなたたちの担任は幽○白書系のイケメンよ。楽しみにしてなさい」

幽○白書系のイケメンとは一体、と三人は顔を見合わせた。

そりゃ蔵馬だろ、いけすかない性格だけど顔が良くて人気がある。飛影もカツコいいよ……背が低いけどね。影のあるイケメンなら樹とかはどうだい。あ、おっぱいのついたイケメン枠で軀!

「昨日初めて出会ったよーには見えないくらい打ち解けた様子なのは、課外に一緒に買い物したからだろーか？」

「わくわく教室で担任を待ち——揃ってツツコミをいれた。」

「戸愚呂弟じゃん！」

担任の名前は夜蛾正道。戸愚呂弟とタキシード仮面を組合わせて「戸愚呂仮面」と受け持ちの生徒から呼ばれるようになり、次第にそのあだ名が学年を越えて広まってきた……一般の呪術師からも「戸愚呂さん」と呼ばれるまでになって、彼は泣いた。

## その11

悟が魔力に目覚めてから約一年、二年生になってから二ヶ月、後輩にルナとアルテミスとゆーあだ名を強いてからだいたい一月半。

皆の弟分——天上天下唯我独尊三歳児様が海老のよーに反り上がって床を転がった。

「めぐくんもガーくんほしーいーいーいーいーいーいー！」

「今度ママとわんわん見に行こうか。動物園には動物さんがたくさんいるんだよ。わんわんもにやーにやーもいるよー」

「やだああああガーくんがiiiiiiiiiiガーくんじやなきややなのおおお!!」

ママの代替案は却下された。恵くんは自分もしやべる犬の石像が欲しくてたまらないだと全身でアピールしてる。

ああ罪深きはアニメ——キラキラとした非現実的な夢を振り撒く諸悪の根元。わんわん泣きながら床を転がり回るちびっ子はもう三歳と半年になるのに幼稚園にも保育園にも通えてないのだ……麓の保育園が遠すぎると、なんとママが妊娠しちやって送り迎えが難しいのとで恵くんは自宅待機。

同年代の友達がほしいうに、めぐくんの回りには年上のお兄さんやらお姉さんやらしかない。可哀想に思った兄貴分は——とある人に電話した。

「なあ師匠、めぐくんに友達用意してやりたいんだけど……」

そして届いた……届いたとゆうか、突如甚爾の部屋に飛ばされてきたのは双子の幼女。一人は呪力が小指の先レベル、もう一人は多少あるけどそれでも少ない——ぜんいんマキちゃんとマイちゃんとゆう名前らしい。お年は四歳。

顔の雰囲気は禪院だし、名字もぜんいん。誰の娘かは知らないけど恵の従姉か又従姉あたりだろう。マキちゃんが持ってたお手紙には「活きが良いのを見つけたので送ります。恵のお友だちにいいんじゃないかな？ リタより」と書かれてて、甚爾はそれを握り潰した。

児童誘拐は犯罪です。

甚爾が禪院に電話するのは二十年ぶりかそこら。血は繋がってる他人——遺伝子では叔父にあたる禪院家当主のケー番は夜蛾に聞いた。

「俺の姪かそこらだろ、マキちゃんとマイちゃんって子。その子たちが『山』の人の気まぐれでウチに飛ばされてきてな。俺はそっちに行く気ねえから、迎え寄越してくれや」

そして次に犯人へ電話をかける。

「おいババアふざげんな児童誘拐は犯罪だつてテレビで勉強しなかったのか？ あの二

人は禪院に帰らせることになったからな」

『え、帰らせちゃうの？ いい友達になると思ったのに』

「俺は合法的に友達を作らせたいの、分かる!? イリーガルなオトモダチとかはお呼びじゃないの!」

禪院からの迎えが着くまで、マイとマキを伏黒家の部屋で世話することになった。原因の一端を担った悟は幼児の監督員とゆー無給の任務に就き、夏油と家人も自薦で監督員に就いた。見てるだけを監督員と言っていいなら、だけでも。

「こうして小さい子を見てると幼稚園の先生も良いなと思えてくるね」

「あはは、高専に通ってる意味ないじゃん。でもちっちゃい子つて可愛いよね」

真剣な表情の夏油にケラケラ笑う家人。

「お前らさ、俺がおもちゃにされてんの見ながらよくそんな事言えるよね」

「そりや他人事だし」

「頑張れ悟。君も小さい頃はお馬さんごっこしただろ？ 大人は子供の馬になるものなんだ」

「え……こんなんしたつけ……?」

悟くんの寂しい幼少期について追及するのは控えた。二人は、一般家庭出身の夏油くんと一般家庭ではないけどそれに近いおうちで育った家人には想像もつかない子供時

代を送ったのだらう悟の心の傷をあえて掘り返すことはしなかった。御三家の跡継ぎだもん、そりや普通じゃない育てられ方してるだらう。

実際は小学校に上がる頃から『山』で饅頭やらなんやらを食べながらゲームをしてアニメを見て漫画やラノベを読んだエリートオタクなんだけど、二人はそんなこと知らない。

ちなみに悟がお馬さんごっこを知ったコンテンツは漫画だ。

「サトル号よそ見しない！ ほら右！ 右行つて！」

「へへ〜」

「へへーとちやう、お馬さんはひひーんって鳴くもんや！ サトル号しつかりしい」

「ひひーん」

未来の自分が青ざめるだらう傍若無人を五条家の跡取りに命じ、生意気そうな顔のマキちゃんとマイちゃんは無知を、もとい鞭を振るつた。でも幼女だから許される——だって幼女だもん。

そして恵はとゆーと。

「マキちゃんとマイちゃんがあ、ぼくのぎどー兄ちゃーどつだあ」

「取られてないよ、お兄ちゃんはお兄ちゃんとお兄ちゃんだからね」

「そうだよ、さとりお兄ちゃんはめぐくんが大好きだよ」

「どつっだのっっ!!」

「大丈夫なだけどなあ〜?」

誰より自分が優先されてきた恵はいま、悟が取られたことに不満爆発で顔をどろどろにして泣いている。ママと夏油たちが宥めても全く泣き止まないし、泣きすぎて上手く呼吸できてない。

残念ながらリタの作戦は失敗だ、友達じゃなくて敵ができてしまった。

翌日の昼、二人を連れ帰るため迎えが来たけど、私の強い幼女たちはヤダヤダと暴れるわ悟の長い脚にしがみつくわ「サトル号と一緒にいるー!」と馬名を叫ぶわで校舎正面出入り口の前は混沌と化した。

二人は屈強な男もとい戸愚呂仮面が抱えて車に乗せるまで暴れ倒し、車の後部ガラスに貼り付いた二人に悟たちは大きく手を振る。

「嵐のようだったね」

恵の相手しかしてなくせに夏油がしみじみと呟いた。恵の相手しかしてなくせに。

「子供のテンションヤバいわー。小さいのに音量だけは大人以上じゃん」

家人は夏油の言葉に頷いて、女の子二人の音量の凄さを思い返す。あのちびっ子たちはそこらへんの小型スピーカーに負けず劣らず声がデカかった。二人いたから余計に

凄かった。

「俺は耳の近くでその大音量だったからね？ 疲れて寝転がったら耳元で『起きろサトル！』って大声出された俺の気持ち分かる？……この二日であの二人に比べりゃめぐくんは大人しい方なんだって学んだよ」

——そこに残念なお知らせ。甚爾に怒られて大人しくなるならそれはリタではない別の誰かだ。

二人が京都に連れ戻された数日後、『山』から東京呪術高専・伏黒甚爾あての宅急便で送られてきたのは……犬の形をした別のなにかだった。

昼休み甚爾の城もとい体術教官室に呼び出された悟は、段ボール箱の中をちらりと確認してすぐ蓋を閉めた。真顔だ。

「見たな？……先に質問したい。恵の友達云々について師匠には何て言ったんだ？」

「友達を用意してやりたいって言った。あとは……吉永さんちのアニメを見て、恵が『ガークンほしい』って泣いたことも言った覚えがある」

甚爾は呪力や呪術には明るくないけど、魔力や魔術に関しては一人前の魔道師だ。高い才能、芳醇な魔力、真剣に積み重ねた努力のお陰で、魔術の精度に関してはリタから絶賛されるほどだ。

呪術師の階級分けを当てはめるなら特級魔道師と言える甚爾は——送られてきた「犬

の姿をしているなにか」が何なのか、一目で分かってしまった。そして「それ」の声を聞いて確信した。

あの馬鹿師匠<sup>アヤマ</sup>、犬のぬいぐるみに魔族<sup>ゼロス</sup>押し込みやがった。

送られてきたデカイ段ボール箱の中には、ふわふわの黒く輝く毛並みは頭部がおかっぱ、糸目、とぼけた表情の——ぬいぐるみがぎゆうぎゆうに押し込まれていた。サイズは超大型犬サイズ、犬種は分からない。

それが耳慣れた声で「こんにちは」とか言ったのだ。そんなの誰だつてびびる。

「あの女に常識というものが欠けてるつてことはお前も知ってるだろ。こんなことが起きないように、これからはあいつに相談する前に俺に相談しろ」

「そうする……」

もうガムテープは剥がしちやったし、目的地に到着してるわけだからゼロスが外に出るのを阻むものはない。はあどっこいしょと段ボール箱から出て来ると後ろ足で首の辺りを掻いた。犬らしい仕草だけど、ぬいぐるみだから違和感が大きい。

「リタ様の命令で恵さんのお友だちになりました」

「帰れ」

「帰ってくれる?」

いやあこころへんは負の感情が溢れ返っていて良いですねえだの、来た甲斐がありま

したただの、空気が美味しいですだの、ゼロスは帰宅を促す二人を無視してピスピスと鼻を動かす。器用だ。

「おや、僕を帰らせてしまつて良いんですか？ 君たち二人では対処できないことも、僕がいればどうにかなる……と自負しているつもりですが」

どちらかとゆーと怖い顔した犬がニンマリと笑う。ぬいぐるみなのにどーやつてんだろーか。

「何が起きるつてんだよ」

甚爾が唸る。

「貴方たちもご存じの——かの小説を引用すれば『L様』と呼ばれているお方。あの方は恵さんを目にかけていらつしやるご様子ですから……うんちが不快だ、お腹が空いたと言つて泣くのならまだしも、人に傷つけられただの誰それが嫌いだだのという強い感情を持たれると」

犬は飄々とした顔で、一拍おいてから言葉を継いだ。

「お気に入りの子供が傷つけられたから、なんて理由で周囲一体に——そうですねえ、分かりますく言えば無差別型重破斬が吹き荒れます。僕はそれを防ぎに来たんですよ」

「ようこそゼロスありますがどうババア愛してる！」

「今日の放課後にでも高級ジャーキー買ってくるわ」

「残念なことにはこの体には食べる口がないんですよ」

ゼロスのガワ——ワンちゃんのぬいぐるみはキーホルダーサイズに縮むこともできる。ゼロスが恵や恵の周囲の負の感情を食ベ……もとい減らし、満たされた人生を過ごさせることでし様降臨を防ぐ。そのために取った手段が人格ジョを持ったペツト……なるほど合理的だ。ただ我が子がゼロス犬と戯れるとゆるーのは心理的にこう……滅茶苦茶とてもかなり嫌だ。

どうせならノーマッドが欲しかったのに。皮肉屋で一言多いけどゼロス犬よりマシだ。

——負の感情を吸収するなら甚爾のグローブやトンファーもあるとはいえ、恵が一人で外出する時などにトンファーを持たせるわけにもいかないし、幼い子供に持ち歩かせようなものじゃない。ワンちゃんキーホルダーならどこでもいっしょ、めぐくんのト口はゼロス犬。ゼロス犬を後ろから見るとなんかデカイゴキブリっぽく見えるけどまあ、前から見ればちゃんと犬に見えるから問題ないことにした。

午後の仕事も終わり、デカイぬいぐるみを抱えて部屋に帰った甚爾を見た恵は、ポールみたく跳ね回って喜んだ。

伏黒家のお母様は三時半から学生の夕飯の用意を始め、その時には恵を学生寮に連れてっててんだ……が、大きくなりだしたお腹を抱えながらどんどん姑息になっていく恵

の相手をしつつ料理するのは大変だとゆうことで甚爾が時短勤務を上押し込んだ。甚爾の上がりりは三時二十分、伏黒家のママと交代でパパ業ができる。非常勤ですんでほら、どうとでもなるつしよ？ 時短勤務してる間は給料下げていいからさあ。

甚爾の貯金の額を考えれば多少の減給なんて屁でもない。もし駄目だと言われたらフリーランスに戻つてもいいし。

良かったことに時短勤務許可は円滑に通じ、月収は減つたとはいえ我が子と昼間から健全な交流をできるよーになった。こういうところが柔軟なのは呪術界のいいところだ。別のところはガチガチで硬化してるけど。

しかし——「ガーくんだあ！」と歓声を上げてゼロス犬に抱きつき頬擦りする息子を甚爾はどんな顔で見守ればいいのか……。中身がゼロスつてだけでももう全く可愛く見えぬ。

「ガーくん」

「はーい」

「ガーくん」

「なんでしよう」

「ガーくんっ」

「はいはい」

「ガーくん」

「はあどっこい」

「ガーくん!」

「チヨコラ○タンにへんてこUFO」

「返事するの疲れたのは分かるけど絵描き歌はやめろ」

繊細なめぐくんはあれを見たとき泣いたのだ。歌うときは覚悟を決めろ、このお父さんが容赦せん。

さんざん名前を呼ぶだけ呼び続けて満足した——と思われる恵が甘食に興味を移したあと、ゼロス犬がとことこと甚爾の足元に来た。

「ところで甚爾さん。吉ガーは深夜アニメですけど、夜はきちんと寝ているんですか?」  
「ああ心配すんな、夜はちゃんと寝てる。録画したのを夕飯前に見てんだよ」

それは良かった、と艶光りするゴキブ、ゼロス犬が大きく頷く。

「こつちこそ聞きたいんだがよ、これからあんたが恵とずっと一緒ならリタの飯はどうなる? あんたが作ってたろ」

そーなのだ。甚爾はリタが料理してるところなんて一度として見たことがない。もしや料理ができないのでは……?」

「いやーやだなあ、リタ様は料理できますよ。面倒だからやらないだけで」

「それはそれでどうかと思うが」

「それに最近はどうぞん家電が便利になりました。電気圧力釜は素晴らしい発明ですよ！ 近頃はボタンでメニュー番号を選べば自動で料理をしてくれますからね」

「あー、広告で見た覚えがあるわ。確かにあれ便利そうだな」

伏黒家に電気圧力釜はない。でも学生寮の調理室にデカイ圧力鍋があり、それで作るおでんは本当に美味しい。圧力鍋を発明した人は凄い！ 偉い！ これこそ時短！

「お忘れですか？ リタ様は趣味で食事を取っておられるだけで、我々の主食は人間の負の感情です。食事の心配は必要ありませんし、しばらく独り暮らしする程度で人恋しくなるような殊勝な性格の方ではありません」

「確かに……！」

本人が食い道楽で御三家に食料を献上させてるから忘れがちだけど、リタは元人間の魔族（？）。モノを食べなくても生きていけるとゆうか——人間の負の感情を食べてればそれでオールオツケーな存在だ。食事の用意なんて気が向いたときだけでいい。

ドラマやアニメを見たり漫画やラノベを読んだりと時間を潰す方法をいくつも持っているリタが「あーんゼロスがいなくて寂しい〜！」なんてゆうワケがない。日がな一日ゲームして過ごしてるかも。

「まあそれなら良いけどよ……！」

そして盆休み。帰省した甚爾を待つていたのは——『山』の一角に作られた簡素なバーベキュー場で肉を焼くりタだった。誰が見ても独り暮らしを楽しんでるとゆるーだろー満喫具合。

キャンプ用品は日進月歩ね、なんて真面目な顔で語るリタはもはやいっぱしのキャンパー。薫製にもハマったらしい。

「出来立てのスモークチーズの美味しさをあんたたちに教えてあげるわ！」  
「いやっやめて！ 既製品食べたら物足りなく感じる体にされちゃう！」

甚爾の周囲は平和だった。甚爾は笑って過ごしていた。けど高専で悟たちに持ち込まれる依頼はどんどん酷くなって、どんどん強い相手や質の悪いものが増えていく。翌2007年、悟たちが三年になる冬。悟たちは夜蛾から任務を命じられた。

次の天元様になる少女の護衛と——

## その12

星漿体の少女の護衛任務——呪詛師集団Qとゆー探偵学園を思い出す組織やら盤星教とゆー怪しげな宗教団体やらから星漿体の少女を守り、天元と同化する日にはそこへ少女を送り届ける。

はつきり言つて胸くそ悪い任務だ。

星漿体の少女——天内理子がネットで賞金かけられてるとか、賞金目当ての呪詛師が何人も現れるとか、人質取られて沖縄に來たけど滞在期間伸ばして一泊した分の旅費は経費で落ちるのかとか、様々な悩みを抱えつつ天元同化当日の朝の便で東京に戻った。ちなみにこたつで食べるアイスは正義だから詰め合わせを伏黒宛で送つてある。旦那の方はともかく奥さんの方はいつも高専にいるから荷物を受け取れるし、持ち帰るより安全安心。

わらわらと襲撃があつて——いま四人がいるのは東京都内、小平駅から数百メートルの霊園だ。人気のないところへと移動した結果なんだけど、駅からこんな近くに大規模霊園があるつてどーなんだ？ いちおー四十分くらいで渋谷に着くとゆー便利な土地のはずなんだけど。

ちなみに小平の隣にある田無とゆう土地は、田んぼがないから田無とか種籾すら残らないくらい重税を課されたから種無とか——後者だとこの地域に住む男性諸氏への罵倒としか思えないので前者であることを祈ろう——まあ諸説ある。前は……つて言つても四十年以上前になるんだが、陸穂の田と里芋とかが植わつた畑が広がつて何も無い場所だつたから、きつと前者であるはず。

さて小平の大規模墓地。地方出身者は「やつぱり都内つて金があるんだな」つて悲しくなつちやうくらい綺麗に整備されて、ベンチの並んだ広場があれば街路樹も植わつてるし何より道が広い。墓地なのに片側二車線とかふざけてんのか墓地なのに。

車道も歩道も広いし植樹で空気が美味しい場所だからジョギングの人やら犬の散歩中のお爺ちゃんやらもいる。すぐ横には新青梅街道が通つてるけど植樹のお陰か、墓地はひんやりと静かだ。

その静かな墓地に、男が一人立つていた。男から天内理子に向かう殺意……また敵さんが来たよーだ。

「二応確認するけど、俺らのお迎えじゃないよな？」

「いいや、お迎えさ。……あの世へのね」

上手いこと言つたつもりなの奴つて恥ずかしくてやーね、と悟がせせら嗤えば男は額に青筋を立てた。

「呪術師一族の箱入りお坊っちゃんには現代の文化的素養というものが欠けているようだ。人生を豊かにしてくれるテレビドラマや映画など見たことがないのだろうか？　だから私の言い回しの魅力が分からないのだろうね」

「ドラマの持つて回ったような言い回し、現実でやると嫌われますよ」  
「腹の立つ口調じゃな」

夏油と天内のツツコミで更に増える青筋。

「ふん、教養のない者はこれだから困る。——君達が価値のないものと決めつけて観もせずにいるドラマは私にたくさんのお話を教えてくれたよ。一つ、頭脳明晰な者は今の私のような口調をしていること。二つ、命を懸けた戦いの場は静かな場が……この墓地のような場所が似合うこと。三つ醜い浮世の鬼を」  
「退治されんのお前なんだけど」

桃太郎男の出番、終了——！

そこに小平までトコトコ迎えに来た補助監督が到着し、車で高専に向かう。彼女が天元に同化できないと世界が滅亡しちゃうレベルのVIPだけど、迎えに来たのは口〇ルスロイスじゃなくて防弾ガラスの国産車。もちろん車内に冷蔵庫もワインの用意もない。

「妾の迎えがそこらで良く見かけるような国産車……おかしくないか？　妾は天元様ぞ

? 天元様ぞ?」

「護衛対象が目立ってどうすんのさ」

「車を襲撃される度に数十万から数百万円するワインとワインを楽しむための一式が無駄になるわけだし、もったいないからでは?」

「そんな常識的で庶民的な回答は欲しくないのじゃ!」

襲撃に即座に対応できるよう気を張りつつもふざけたおしゃべりをして——高専に着いた。補助監督は桃太郎男を高専内の留置所もとい呪詛師を監禁しておくための専用施設に連れていくため、四人を鳥居の前でおろす。

鳥居を入れれば天元の結界内だ。申請がある者以外が入ればアラートが鳴り響くよーになってるから、この中なら気を張り続けなくても問題ない。

「そんじゃ——」

天元がいる地下へ、と言いかけた悟の背中から腹を貫くように、杭か……いや、巨大な針が刺さっていた。

「おや、ずれてしまったか」

ぱつと振り返った悟たちの背後にいたのは、さつき補助監督が連れ行つたはずの桃太郎男。そのはずなのに何故だろう。男の呪力はさつき迎えに来た補助監督のそれと同じだ。

「貴様……！」

夏油と黒井が天内を庇うように前へ出る。悟は背中を夏油に向け、針を夏油が掴み引き抜いた——針の頭には白い袋があり、中に液体が入っていたのが窺える。

「私の術式は一族で連面と継いできたものでね、陽炎呪術と言う」

四人に走る緊張。術式の開示だ！ここでさっさと倒してしまえばいいんだろが、桃太郎男の呪力はさっきの墓地の時とは全く違う。夏油に勝るとも劣らない量だ！どうやってこれだけの呪力を隠していたのか？呪力が変わっている理由は？そしてこの針は何なのか。

「これは物語に登場する非実在人物の能力を一人だけ選んで使うことができる、というものでね、たとえ物語にされていようが『過去に実在した』人物の能力を使うことはできないし、複数の非実在人物の能力を使うこともできない。また、自分が考えた物語を使うのも不可だ。だからかつて私の一族では、親が子のために利便性の高い能力を持った人物の物語を作ってプレゼントしていたものだ」

不便そうに聞こえるが、能力と物語を上手く作れば何でもできるようになる術式だ。手強い敵かもしれない。

「だが、今や様々な能力の物語が巷に溢れている。ドラマ、小説、映画、漫画、アニメ……！私はドラマチックな展開が大好きでね、弱いと見て倒したはずの敵が実は強かつ

た、という話が好きなんだ。むろん私はその強大な敵の方にこそロマンを感じるのだがね？——さあ絶望するがいい、泣いて許しを乞うといい。私が選んだ非実在人物はジョジ〇の奇〇な冒険のカーズ！ 地球上全ての生き物の可能性を持った存在、アルティメット・シィングのカーズだ！」

「なにいつ!？」

「めんどくせえのが……」

悟や夏油世代のジャ〇プ愛読者にジョジ〇を知らない奴はいない。つい数年前までは本誌連載だったのだ。

「か、カーズって……なんじゃ……?」

知らないのは天内だけらしい。カーズの名前に疑問を持たずゴクリと唾を飲み込んだ黒井は二部をリアルタイムで追っていた可能性がある——なんせこの場で唯一の三十路だ。桃太郎男がいくつなのかは知らんけど。

「カーズは漫画の敵キャラクターです。……倒す手段がなかったため、火山の爆発を利用して宇宙に飛ばすという方法でカーズを地上から排出して解決としました」

「宇宙!?!」

日光のエネルギーだけが弱点だった強者が日光を克服してしまえば倒す方策などない。——その能力を真似ていて、術式の開示でその精度などを上げている。そう簡単に

勝てる相手ではない、かもしれない!

「私は何にでもなれる。五条悟……キミにもなれるし、さっきの補助監督にもなれる。呪力を増やすことも無くすることも他人に似せることもできる。むろん動物にもね、二部のカーズはそうだったろう?」

質の悪い呪術だ。

「キミに刺したのはスズメバチの毒。3センチかそこらのスズメバチの毒の量と成人男性である私の刺した毒の量とを考えれば……君の未来の姿は明らかだね」

スズメバチの毒はアナフィラキシーショックを起こすし、目にそのスプレーを浴びると失明の危険もある。というのもスズメバチの持つ毒はそれぞれ別の効果がある成分が複数混ざったカクテルになっていて、痒みや腫れを引き起こすヒスタミン、タンパク質を分解するプロテアーゼ、呼吸不全を引き起こす神経毒のセロトニン等々が含まれるからだ。

一匹のスズメバチによる毒液は数マイクロリットル(1マイクロリットル=1/1000ml)に留まる。だが、ちよつと刺されただけでも腫れやら痛みやらが酷いのに――成人サイズのスズメバチから射出された毒ならどうなるか。

「君達は私を倒すことなどできない。私は億……いいや、兆にも届く数のスズメバチとなり君達を襲い、殺すことができるのだから!」

男の言うとおりに、悟の背中は今焼きごてを押し付けられたかのように熱い。——蜂毒の血清なんてこの場にあるわけがないし、間に合わない。治癒か？<sup>リカバレイ</sup> 駄目だ、治癒力を高めるとアレルギー反応も高まってしまう。同じ白魔術でも麗和浄なら解毒が可能だが、悟はこの魔術を発動できなかったことがない。ちよつとレベルが高い魔術なもので。

甚爾を呼べたら、甚爾が来てくれたら——

いいや、と下唇を噛む。無い物ねだりしてどうする？ 今から呼んだところで甚爾が間に合うかも分からないのに。

「傑！ 少し任せてもいいか!？」

「もちろんだとも——だが、医務室に電話して間に合うか?」

「間に合わねえ……間に合わねーけど、なんとかする!」

履歴から甚爾の番号を呼び出し、天内に放り投げる。

「その電話の相手に高専の入り口前に急いで来いって言え!」

喉が潰れていくような息苦しき。悟は地面に膝を突いた——もう立っていられない。ただ顔だけは正面を向いて男をきつと睨み付ける。男は圧倒的な自信ゆえか、ゆつくりと指先からスズメバチの群れに変わっていく。

「助けを呼んだところで間に合わないさ。五条悟、君に成り代わってあげるよ。そうすれば星漿体の抹殺代金と五条家の莫大な資産が手に入る……一石二鳥というものだね」

じわじわと殺してやろう、とニタニタ笑む男に夏油が何体もの呪霊を放つも、あちらの持つ圧倒的な数の有利を覆せない。生身で近寄れば蜂に群がられるから近接戦闘は難しい。糞みたいな嫌らしさだ。

スズメバチはレギオンと化し、黄色と黒という危険色の帯が騒がしい羽音を立てながら空を覆い尽くさんと広がっていく。

黒井に守られてはいても何か所も刺されている天内が「急いで来て！ 悟が死んでしまおう！」と通話相手に涙声で叫ぶのを聞きながら、悟は潰れかけの喉で、唱えた。十四歳の時に身につけた混沌カオス・ワールドの言語を、途切れ途切れに。

「……よ手御、の、し癒るな聖」

この世界の言語ではない、誰も聞いたことのない言葉。男はスズメバチを生み出していく腕を天へ掲げるようにして哄笑した。

「おやおや、人間の言葉を話せなくなったようだが……頭にまで毒が回ったかな？」

心配そうに振り返る夏油に片目をつぶった。体の中で練り上げられた魔力が背中の熱さを越え、なのに頭は冴え渡っていく。

「……えまたき除……り取、をのもるな浄不、す汚……を体身のら我」

——できる。俺ならやれる。

このままでは死ぬという状況が、悟に成長という名の階段を三段飛ばしに上らせた。

「麗和浄……！」  
「ディクリアリイ」

リタたちがいた世界では神官や巫女だけの魔術——主に利権の問題で宗教関係者しか使えない決まりになっている白魔術。だけどここは地球だ。あつちの利権なんて関係ない。

呪文は知ってるけど、宗教関係者に睨まれるからほぼ使うことなかったんだよね、とリタは言っていた。だからどの程度の毒にまで有効なのかりタも知らない。だつてリタも使ったことがない。五条家の跡継ぎだから料理や水に毒を盛られたことは何度もあるけど、毒味役が倒れるだけで……悟が被毒したことはなかった。そんな風に守られていた。

俺と成り代わる？ 冗談きついわ。五条家の主人つて地位は、てめーなんかに務まるような楽なものじゃあない。

喉の痛みは全くない。暗くなりかけていた視界もクリアだし、むしろ肩が軽いよーな気分すらする。顔を伏せて笑った。

「あんた創作物が好きなんだよな？ ならこれも知ってるだろ」

「ふむ……？ 毒の回りが遅いのか……？」

言い訳をさせて欲しい。この時の悟はテンションが高かった。ハイテンションとゆー表現ではぬるいほど——脳内麻薬がドバドバ出て、ラリつてた。仕方ないよね命

の危険に晒されたばかりだもん。

悟はゆらりと立ち上がると、体を揺らしながらへらへら笑った。その姿は毒で頭がやられたよーに見えたかもしれない。

夏油も黒井も天内も、仲間の誰も悟を気に掛ける余裕がない。目の前の蜂を打ち落とすのに必死だ。

誰も悟を止めない。止められない。

『黄昏よりも昏きもの、血の流れより紅きもの』

『有名なアニメの呪文じゃないか。それがどうした』

五条悟の術式は有名だ。四百年ぶりに生まれた相伝二つの抱き合わせ。無下限呪術に六眼の両方をもつて生まれた五条家の麒麟児。

男の陽炎呪術と似た術式を持っているという噂は聞いたことがない。また、他家から相伝を取り込んできた禪院ならまだしも、血統に誇りを持っている五条に陽炎呪術の持ち主が生まれるとは想像しがたい。

毒が頭に回ったんだろう。男はそう判断した。

『時の流れに埋もれし偉大な汝の名において、我ここに闇に誓わん』

それに――五条悟は呪力を消費していいのだ。陽炎呪術であれば、呪文を唱えるなら呪言師のように声に呪力をのせるのだ。へらへらした笑みを浮かべながらアニメの

呪文を唱えているだけの五条悟を、どうして男が怖がる必要があるだろう？

『我等が前に立ち塞がりしすべての愚かなるものに、我と汝が力もて、等しく滅びを与えんことを』

だが。だがどうして、五条悟の手元には赤く球状の何か煌々と輝いているのか。

——本来であれば、悟は竜破斬ドラゴンブレイクを打つことが出来ない。竜破斬を打てるだけの魔力を持つてないからだ。

竜破斬は「人間として最大級の魔力容量」を必要とする魔術。着弾した相手の精神を破壊すると共に余剰エネルギーが爆発、街一つが瓦礫に沈む、完。……そんなわけでリタの出身世界では「ドラスレ魔道師を数人抱えてる国は外交上大きな顔ができる」とさられて——まあざっくりゆーと、ドラスレ魔道師は自動追尾システム搭載で多発式な小型爆弾のよいなものと考えればよろしい。

悟は御三家のお坊ちゃん、期待を一身に受けた跡継ぎで、無下限術式に六眼の抱き合わせ。これだけ既に恵まれてるつてのに魔力も豊潤で魔術の才能に溢れてる……つてのは流星に神様も許さなかつたらしい。リタの出身世界では他より頭一つ抜けてるかなつて程度の魔力と、悪くはないつて程度の魔術の才能。

本当なら竜破斬なんて打てない。だけど他の魔道師にはなくて悟にはあるモノがある。赤眼の魔王と同一存在であるリタとの縁だ。

他の魔道師は自分の魔力だけを使って赤眼シヤブラニグドゥの魔王のサポートを引つ張らねばならぬのに対し、悟は赤眼リの魔王タにただ呼び掛けるだけでいい。

繰り返し言おう。悟のテンションはマックスを突き抜けて天にまで届きそーな勢いだった。身内はともかく周辺の施設への被害が、とかそんなもん知ったこっちゃなかった。

『竜破斬』——！』

男が吹き飛んだ。一緒に鳥居も吹き飛んだ。男は精神を破壊されてこの世からさよなら、男の一部だったスズメバチは爆風で塵と化し、木々は倒れ建物は鉄骨も折れて倒壊、天元様が待つ高専地下への門——百以上ある鳥居はまとめてみんな瓦礫になった。

「……で何が起きた?」

電話を受けて押っ取り刀で現場にやってきた甚爾は、手持ちの呪霊をクッションにして黒井と天内を守ってたらしいズタボロの夏油に訊ねた。悟は少しはなれた場所で俯せに倒れてて——爆心地は悟っぽい。何があつたんだ。

「悟が……」

「悟が?」

「悟が——異世界に飛び立ちました」

「あそこで寝てるように見えるが？」

夏油は必死に頭を横に振る。

「飛び立ったんです！ 異世界にどうか、三次元から二次元にどうか！」

「……ここに女子供を寝かしくのは不味い。とりあえず中に入るぞ」

甚爾は嫁に電話をかけた。ビデオカメラ用意しといて。

## その13

私室つぽい室内のベッドで眠る白髪はくはつの青年と二十代後半らしき黒髪の男。

「おい悟、そろそろ起きろ」

「う……」

肩を揺すられても「ううーん」とか唸るばかりの青年を、男はしつこく揺すった。

「う……ここは……」

ようやくと起きたかと思えば、青年は目を開きはしたもののぼんやりと天井を見上げる。頭が痛んだのか顔をしかめ、右手で額を覆う。

「俺は……確か、竜破ドラグ・スレイブ斬を使って……そうだ！ 傑たちは!」

青年はがばりとバネ仕掛けみたいに起き上がり男に詰め寄る。

「落ち着け、夏油たちは無事だ。だが忌庫への道も高専最下層に繋がる道も何もかもが瓦礫になっちまったよ」

「そっか。傑たちが無事ならいいや……。あのエセ藍染隊長に竜破斬ドラグ・スレイブをぶつぱなしたは良いけど、頭ん中パーンってなあってて理子たちの安全を確保すんの忘れてたからさ。みんなが無事だったなら良かったよ」

男に掴みかからんばかりに身を乗り出していた青年は安堵の息をついてベッドに戻る。

「ありがとよ、悟」

「何だよ突然礼なんて言つてさ」

「いや……お陰でいい画えが撮れたよ」

「絵？ なんのことだ？」

——ピッと一時停止ボタンが押されて、テレビに映る二人の姿が停止する。

そう、今までのやり取りはビデオ録画。一昨日に青年の部屋で行われたやり取りだ。体力気力を使い果たして二日ほど寝込んだ青年がケータイで伏黒嫁に「そろそろお肉も食べたいです」と電話したら、十分後に男が現れ、DVDプレイヤーにDVDをセッanf ang、始まったのはもちろん英霊召喚じゃなくて録画観賞会。

室内にいるのはテレビに映る二人と黒い犬のぬいぐるみ。リモコンを操作したのは男の方。

男はおもむろに口を開いた。唇の端が痙攣してる。

「残念なことにお前が竜ドラ破斬スレイブをぶっぱなすシーンは撮れなかったからな。せめてそのすぐ後の画はほしいと思ってカメラを回したんだが……まるで漫画かドラマみてーな画が撮れたもんだから、あの場で笑うのをこらえるのは大変だったぜ」

「おい……ちよ……ま………」

唇を戦慄させる青年——つい先日高専の施設や私有林を破壊し尽くした五条家の悟くんは、テレビ画面を指差して、男——兄弟子兼魔術の師匠の甚爾を見た。

で。甚爾の隣にお座りしてるぬいぐるみ……もとい、ゼロス犬がきゆるると声を跳ねさせる。

「上手く撮れているでしょう？ 撮影は僕がしたんですよ」

「リタにはもうコピーを送ってある。感想が楽しみだな」

動きを止めた悟くんの反応に、性格の悪い兄弟子とゼロス犬は声をあげて笑ってしまふ。でも仕方ない、真面目な顔をしようといくら頑張っても、気を抜くと満面の笑みになつてしまうのだ。

人の不幸は蜜の味とゆうーに、他人が「俺は不幸だああ！」と上条くんみたく泣き叫んでるのを見るのは実に楽しい。もちろん不幸な事故に巻き込まれた人は可哀想に思うけど、その人の身から出た錆とか欲を掻いた結果とかの不幸なら——最高だ。もつとやれ。

「……はっ」

——五条悟の悲劇はこれに留まらなかつた。とゆうーか留まつたらビツクリだ。ノリノリで魔法（に見えるなにか）をぶつぱなした悟はまさに時の人。門とかの施設管理部

門はあの現場で何が起きたのかとギョロ眼状態だし、事件当時現場にいた夏油ほか二名は魔法が発動したのを目撃したせいで教員職員その他の皆様から質問責めにされてるし、あれだけの爆発なのに五条悟の残骸が全くないことに気付いた方々が「どーなってるのー」とドーナツ島やつてる。なお悟はドーナツ島世代で甚爾はブンブンとニコニコ島を跨いでる世代だけど、二人とも子供番組を見て育たなかったからネタを振られても分からない。

快復したと噂を聞き付けて質問のため襲撃してきた教職員らの波からどーにか逃れ、お昼を過ぎたあたりによーやつと教室に着いた悟を待っていたのは親友・夏油傑のつむじ。

「頼む、悟。どうやって二次元を三次元に引き上げたのか教えてほしい」

「江？」

「螺旋丸を……螺旋丸が無理ならかめはめ波を、打ちたいんだ」

「波？」

悟にとって、傑は初めて出来た友達だ。互いの部屋に泊まりに行つて「友人の家に遊びに行く」よーな気分を楽しんだし、一般家庭出身の傑が一般の常識を、生まれたときから呪術に触れてきた悟が呪術界隈の常識を教え合つたし、放課後に街で甘いものを食べたりしよっぱいものを食べたりと食べ歩きしたし……俺たち二人いれば呪術業界で

敵なしだぜと笑った。

友達の願いは叶えてやりたい。叶えてやりたいけど——傑をL様との問題に巻き込みたく、ない。

「ごめん、傑……それは出来ない」

プライドの高い傑が頭を下げた、それくらい真剣な願いだとは分かっても……異世界から襲来する異界の創造主とのワンサイドゲーム（※蹂躪される方）に巻き込むのは駄目だ。

悟はそーゆーところが良心的だった。でもそれは当然のことかもしれない——傑は悟にとつて初めての友達なのだ。デッド・オア・アライブではなくL様に殲滅みなごろ（される）か蹂躪オモチャに（される）かの選択肢しかない魔術界限に、どーして親友を引っ張り込めるとゆーのか。

「そーゆーか……」

頭を上げた傑の表情は気恥きぢずかしそうな苦笑だったけど。その瞳の奥に悔しさが隠れていることに、悟は気付いてしまった。だから要らん一言を足してしまった。

「許してくれ……創造主（※L様）との戦いにお前を巻き込むわけにはいかないんだ」

悟は真面目だった。真面目にそー言った。

だけど考えてほしい。創造主との戦いってどこのラノベだ？

夏油傑が求めたのは、螺旋丸とかかめはめ波を打てるようになる呪力の使い方だ。魔力がどーだとかこーだとか全くの認識外だし、この世に呪力以外のふしぎパワーが存在してるなんて信じちやいない。魔法や魔王なんて存在しませんよ、ファンタジーやメルヘンじゃないんですから……。

夏油はこの目で見えるものしか信じていないリアリストだから、今まで自分が信じてきたリアルを打ち砕かれるとメンタルがやられやすい。ガラスの青年なので取り扱いは注意されたい。

つまりだ。夏油は漫画もアニメも小説も読むけど——ファンタジーはファンタジーでしかないと考えている。ファンタジーな仕事をしてる割に思考回路が常識的だ……呪霊なんて非常識の極みのはずなんだが。

「悟、あと二日くらい療養したらどうだ？　まだ疲れてるんだろう……そんな時に困らせて悪かったね」

結果、悟は（頭が）疲れているとゆうーことになった。疲れてない元気一杯だといくら悟が主張しても夏油の温かい視線は変わらない。家入も「もう一晩か二晩ぐっすり寝なよ」と心のこもった声掛けをしてくれる。温かい同期の絆……思い合う関係とゆうーのはとても素敵なものだ、すれ違ってるけど。

俺ってば超元気なんだけど、とゆうー悟の主張は空に溶けて消えた。

——さて、天元とフュージョン予定だった天内理子には時間の余裕が生まれた。

なにしろ鳥居が竜破斬されたことで、薨星宮へ繋がる門も崩壊、入る手段がない。これが「今すぐ入らないと世界が減んじやうの！ だって今年はセカオワの活動開始年だから！」とゆるー切羽詰まった状況なら、薨星宮に入るほかの手段を探したんだが、どーしてか今のところ天元が安定している。今すぐ合体しなくていいのだ。

とりあえず鳥居の再建を優先とゆるーことになり、天内の薨星宮行きは無期延期。天内の身はしばらく高専預かり。

ぎつちよん高専で過ごしてるとはいえ天内の命が狙われていることに変わりはない。天内の暗殺依頼を出してる盤星教がある限り今の生活が続くのだ。

なら盤星教を叩いちやえば解決では、とゆるーのは安易な考えだと言える。確かに今の盤星教の指導者は逮捕されるだろうし幹部連中も逮捕されたり監視がついたりする。盤星教本体が解体される可能性も高い。でも、「盤星教の意思を継ぐ」団体を作っちゃいけないとゆるー法律はない。新しい組織が自分達を宗教団体として申請するとは限らず、内輪だけの仲良しグループとして活動されたらもう……追いかけるのが大変だ。解体させられた宗教団体の信者をそのまま引き継いだ別名義の宗教組織なんて——実例があるしね。

別組織立てられたり地下に潜られたりするよりは現状維持で監視を強める方が楽な

のだ。そーゆー理由で盤星教は今も元気に活動中だし、天内の暗殺依頼をアイツにいいのこイツにいいのと違法行為を繰り返してる。

そのうちこの暗殺依頼で国内の呪詛師が全滅するのではなかるーか？ いいぞもつとやれ。ひやつはー汚物は消毒だー！

そんなこんなので、天内は笑顔と襲撃が絶えない毎日を送っている。分かりやすくゆーとブラック・ラグーン号みたいな毎日だ。頭上を飛び交うのが鉛弾か術式かって違いしかないから似たよーなもんだらう。

では、汚ブラック・ラグーンえ貯水池号ならぬジュジュツ・コーセン号の乗組員を紹介しよう。

あるときは戸愚呂仮面、またあるときは組長先生、その名を夜蛾正道。可愛いものが好き。

魔術・呪術の二丁拳銃、白い短髪だけどレイちゃんを自称する五条悟。甘いものが好き。

螺旋丸への夢を諦めきれない真面目な男——いつかはつちやけて変な方向に暴走しそうなうさぎちゃん夏油傑。口直しになるなら何でも食べる。

ウィザード級のハッカーじゃないけどウィザード級の治療能力を持つ反転術式の天才、亜美ちゃんを名乗るなら禁煙しよう家入硝子。未成年の癖にへビースモーカー。

この他にホテル・バラライカのタイ支部ではなくフシグロファミリー本部があつたり

する。ファミリーのビッグ・ママに胃袋を捕まれているためコーセン号の乗組員のほとんどはママに逆らわないが、サーの方とは唾を吐き掛け合う仲だ。そしてジュニアはマスコットキャラで最近プリンセスが増えた。

しかし暇なのは暇なわけだ。一ヶ月も経てば頭の上を呪霊たまが飛んでいくのにも慣れるし、その度に襲撃犯の魂たまが消し飛ばされるのにも慣れる。始めはひたすらに怖いばかりだった暴力のやり取りにも慣れてきて、だんだん気持ちが変わってきた。

悟が甚爾にやられて地面をバウンドしたり夏油が甚爾にやられて空に射出されたりしてる校庭のはしつこで、天内はフシグロファミリーの二代目（まだ継いでない）・恵くんの相手をしながら、ぼつりと独り言を溢した。

「私も強くなりたいなあ……」

「りこ姉ちゃんも戦いたいなの？」

妹誕生で兄に目覚めたらしい恵はメキメキと心も体も成長し、海老ぞりだっ子めぐくんから「ぼくはお兄ちゃんだから」なエツヘンめぐくに進化した。ちっちゃいお兄ちゃんがあんまりぷりちーなものだから、しようこおねえさん（※高専にいる方）はめぐくんの写真を撮りまくっているとかなんとか。

「りこ姉ちゃん弱いもんね……じゃあぼく、何でもできるよーになる、すごい呪文おしえたげる！」

「おお！　どんな呪文？」

子供の知ってる呪文なら、ニチアサの実写ヒーローの変身の口上あたりだろうか？……でも嬉しそうに「教えたげる！」と話す幼児の言葉には金額に出来ない価値があるのだ。なにしろ可愛い。

「テゴネイルマ」

天内はすぐくほっこりした。歌詞を間違えてることに特にほっこりした。手捏ね入間かな？

ちなみに入間市は先に紹介した種無たなしもとい田無……西東京市よりも西にあり、埼玉県の市の一つだ。その入間市——の隣には同じく埼玉県所沢市がある。日本人なら誰もが知っている「となりのトロール」もとい「となりのト〇ロ」……この〇トロとゆーのは魚のトロでも豚トロでもなく、スタジオ関係者のお嬢さんが所沢を「ととろざわー」と言ったことからだ、とゆー噂がある。幼女は正義だ。

幼児も正義だ。——つまり、めぐくんは正義だ。

二人で一緒に何でもできるようになる呪文を歌った。

## その14

悟くんはいつまでも「あなた（頭が）疲れてるのよ」な状態ってわけではない。悟は施設破壊事件から復帰後、改めて親友の夏油氏から頭を下げられ「螺旋丸を現実のものにするために手助けをしてくれ」と頼まれてしまった。

だけでも——竜破斬は呪力操作によるものじゃない。この世界における赤眼の魔王の力を借りた、純然たる魔術だ。それに悟はレイ||マグナスやリナ||インバースみたく魔術の才能に溢れた人間ではなく残念ながらの凡才だから、新しく魔術を組み立てるのなんて無理。そして魔力も足りない。頼られて嬉しいけど自分じゃ親友の役に立てない……なら、どーするか？

答えは単純だ。できるヤツに相談すればいい。悟は先日鹿肉の薫製を送ってきた相手、『山』に暮らす師匠に電話をかけた。

「どうにかならねーかな」

「呪力操作とか言われても困るんだけど……あたしってほら、呪力については食べる専門だしさ。魔術を使えるようにするって解決法はダメなわけ？」

「俺たちの問題に傑を巻き込むわけにはいかねえだろ」

——悟はリタを孫に甘い婆ちゃんのように思つて慕つてる。なにせ悟の身近な親族はだいたいが蛆の湧いた生ゴミみたいな性格してるし、「呪術界を率いる名家として云々」とか「五条家以外は禪院も加茂もみんなカス」とか頭が高すぎる発言ばかりで漫画の悪役そのものなのだ。

まだ甚爾が実家もとい『山』にいた頃、漫画部屋の漫画を読んだ悟はドンガラピシャーンとゆー衝撃を受けた。

烈火○炎のラスボス森光○の言動が……母親の言動そのものだった。嘘だと言つてよバ○ニイ。母親と森○蘭で違う点は、母親も森○蘭も言動が双子みたくそっくりだけど、森○蘭は下品に見えて母親は品がよく見えるとゆー点。

悟はこの世の真理の一つを知つた——顔がよければ……顔面偏差値が高ければ、言動が屑の極みでもハイ・ソサエティの一員に見えるのだ。その驕りきつた言動を許され、認められ、尊ばれる。それは……なんておぞましい。

悟は学校から帰つてきた甚爾に突進して、そのゴツゴツした腰にしがみついた。そして「母上が森○蘭に見える」と恐怖を訴えれば、甚爾は悟りを開いたような目をして悟の頭を撫で——教えてくれた。諦める悟。御三家とそれに連なる連中には、一家に一人は森○蘭がいるんだぜ、と。

一家に一森○蘭。その事実はいかに衝撃的すぎた。悟は二週間ほど『山』に引きこ

もり、リタや甚爾の腰にしがみついて「五条家なんて継がずに一般人になるう」と泣いた。

しばらく甚爾はだっこちゃん人形ver悟を抱えて歩いてくれたけど、やつぱり二週間も続くと邪魔だったよーだ。悟を子猫みたくぶらさげて『山』を下りると、結界の外にポイと放り出した。

「悟、お前には力がある……世界を革命する力が」

「いやだああああおれ『山』から出ないといーじのバカアアアア!!」

「潔くかつこよく生きていこうぜ」

「うっせー甚爾しねええ!!」

結界の外で待ち構えていた五条家の護衛に連れられて家に帰れば、五条家の森○蘭が悟を抱き締めて「心配しましたのよ」と頬擦りしてきた。煉華扱いされてるよーに感じられて、悟の目は死んだ。

——比較対象が森○蘭だからとゆるわけでもないが、男兄弟ってこんなもんなのかなと思わせてくれる甚爾と、かなり真つ当に保護者をやってるリタの株は高い。特にリタは甚爾と悟に甘いし……可愛く甘えればなんとかしてくれろと信じてる。

「なあ師匠、無理か？」

「……仕方ないわね。あんまり期待しないでよね」

「やった、ありがと師匠！」

それで数カ月後に届いたのは右手用の手甲型呪符タリスマン。螺旋丸っぽい魔力弾を口から撃つてくる大トカゲの喉の革を使ったとゆーそれは、革製品だけどシンプルで特徴がない見た目だ。魔力じゃなくて呪力を撃てるよーにするのが大変だったとのこと。もしかしなくても材料は大トカゲじゃなくてドラグ……まあ、赤眼の魔王には大トカゲもドラゴンも変わらないのかもしれない。

ちなみに、この手甲を使うには呪文が要る。夏油にはキーワードって伝えた方が厨二っぽくなくていいだろーか？ とりあえずこの手甲は、呪文だかキーワードだかをスイッチにして持ち主の呪力を吸い上げ、呪力製の螺旋丸を自動生成するとゆーものらしい。

「作ったヤツによるとキーワードは二文節以上にするのがいいらしい。単語一個とかにすると誤射の危険があるから、『我は射つ光塵の魔弾』みたく日常会話では絶対に使わない言葉にするようにってさ」

「なるほど……だから悟はあの長い呪文にしたわけだね」

「ん？」

「いや、なんでもない」

手甲を付け訓練場で螺旋丸（偽）を放つ夏油の顔はこれ以上なく満たされていた。ち

なみにキーワードは「呪術的装備により撃つ螺旋丸」から「呪装螺旋丸」にしたらしい。

——これが、目立った。

在野の呪術師に『山』のことを知られると、『山』が騒がしくなる。リタは『山』に雑魚がいくら湧こうが別に気にしないだろうけど、悟にとつての『山』は実家よりも実家らしい場所だ。だから夏油にすら「俺が昔から世話になつてる知り合いの呪具師に作つて貰つた」とだけ説明して『山』の情報は出さず手甲を渡したんだが——まず、『悟が（リタに頼んで）作らせた』呪具とゆーだけで目立った。

御三家には先祖代々継いできた呪具もあるとはいえ、それらをメンテナンスができる人員は必要だし、術式は相伝のものだけじゃないからオーダーメイド呪具を必要とするよな術師もいる。そーゆー名家の仕事をしてる呪具師は機密保持のために専属契約や縛りを結んでるから、他の客を取らないってか取れない。

もちろん、どこにも属さず呪具を作つてるよーな呪具師もいる。ただそーゆー独立独立歩系職人には、紹介がなけりや店に入れなかつたり、気に入らない相手には使い捨て呪具すら売らなかつたり、相手によつて売価を著しく上下させたり……厄珍堂が善良な道具屋に思えるくらい酷いのが多い。

その酷いのばつかりな呪具師連中だけど、一定以上の能力があるからそんな態度が許されてるんであつて、無能は自然淘汰されるのが世の常。

有能な職人にはプライドがある。量り売りの量産呪具ならまだしも、お高くつくのかオードーメイドとかなら『私が作りました』とゆー印を付けるのが普通だ。なのに、夏油が手に入れた呪具にはそーゆー印がない。

五条家の跡継ぎが友人に渡した、誰が作ったのか分からない呪具。目立つのは当然だった。

そして——夏油は、他人の生命・財産の心配をしなくていい任務の際、手甲を使った。

「呪装——螺旋丸っ！」

ちゅつどおおん!!!

——高専の外ならいくらでも「目」を飛ばせる。呪術師も呪詛師も、「目」を飛ばせる者はみんな夏油の持つ手甲の効果を知って物理的に目玉を飛ばした。

それで。御三家とそれに連なる皆様方……特に禪院家が大騒ぎした。その中でも狂ったように騒いだのは禪院家当主・禪院直毘人で、「おれもおれもおれもおれも!! おれも螺旋丸撃ちたい!!」と年甲斐も糞もない暴れ方だったそーな。息子の直哉君は「何言うてんの親父、どうせあと五年もしたら俺が相続するんやし親父が使っても無駄やろ。あの手甲は俺のや」と直毘人を煽って禪院家は半壊。

直毘人は権力をちらかせて夏油を京都に呼び出すも悟がそれに付いてきたせいで手甲の徴収もとい強奪は成らず、じゃあ呪具師を紹介してくれと悟の膝にすがり付かん

ばかりの勢いで頼むも「無理」と一言でばっさり切り捨てられた。

「そんな便利な呪具があつたら呪術師の致死率が下がると思わんのか!? 五条、貴様には人の心がないのか!」

「人の心がない筆頭に言われても全然心に響かぬーわ」

それな、と夏油は隣で頷いた。東京高専の体術担当である伏黒甚爾が禪院家の生まれだつてことなんて高専に三年も通つてれば自然と耳に入る。伏黒先生は禪院家では存在しない者扱いを受けていて、家出して「師匠」なる人の元で育つたらしい。

三年生にもなれば色々なことを耳にする。御三家の横暴も、呪術関係者の中ではまともな方の伏黒先生が実家を嫌悪してゐることも知る。

人の心がないなんて言われたつて、「鏡を見たらどうだ」としか思わない。

手甲を誰かにくれてやるつもりもない。これは夏油が友達に頭を下げて——友達が夏油のために手配してくれた物だ。

だから、この手甲は真つ当な使い方をしたい。

猿の駆除にはこの手甲ではなく——呪霊操術を使わないと。

## その15

手甲を手に入れてから夏油に振られる任務が増えた。睡眠時間を考慮せずみつしりと詰まったスケジュールには、夏油を疲れさせることが目的なのだろう、夏油が行く必要もないような任務から複数人数で当たるべき任務まで様々あった。

御三家の縁者だという術師と共同任務に当たったとき、背後から斬りつけられた。殺気があからさまだったからひらりと逃げたけれど——あの刃は夏油の首を狙っていた。そういうことが何度もあった。

貴様などが何故悟様に目をかけられているのか、と怒鳴られた。分かりやすい嫉妬だった。

その手甲を禪院家に持つていけば金になるのだ、と要求された。金銭欲とか名誉欲とかのために殺されてやる謂れはない。

この業界には糞しかいないねと悟に話したら「そういう世界だぜ、うちって」と何の慰めにもならない返答。「森○蘭タイプとはまだ一緒に仕事したことねえんだろ？ ならまだマシだ」なんて言われても全く嬉しくない。いや森○蘭と関わることはないのは有難いことだけれど。

「俺ん家はオフクロが我が家の森○蘭でさ、やべーよ。分家にもあと五人はいる」と笑えない話をする親友や、他者に反転術式を使える術師だからと使い潰されそうな勢いで任務を回されている家入。糞を煮詰めたような実家と縁を切ったという伏黒先生。呪術界隈は、特に上が——腐っている。

ぎゅうぎゅうに詰め込まれた任務のひとつは後輩二人との任務で、堕ちた産土神を相手にしないとイケなかった。後輩のどちらも死ぬことはなかったけど——笑顔が爽やかな方の後輩、灰原は左足の膝の少し上までを食われた。もう一人の後輩、七海もぼろぼろで、夏油が灰原の太股を止血帯できつく縛り、背負って帰った。

背負った灰原が一歩ごとに腐敗していくような、おぞましい感覚は頭を振って放り捨てた。

家入の反転術式を受けて灰原は回復したけれど、病室前の長椅子に座る七海は真っ白な灰になったジョーのようだった。

「五条先輩なら無傷で討伐できたんでしょうね。……あの人がいれば自分達なんていらないうんじやないですか。なんで自分達が働くんですか」

「七海、いくら悟でも分身の術は使えないんだよ」

「はあ、まあ……そう……ですな……」

夏油も、ほぼ何でも出来るようになった悟との間に距離を感じることは確かにあつ

た。七海の言うとおりの悟なら無傷で産土神を倒せたのではないかと思わないでもなかった。

任務も受けずらふらと国内外をふわついている一応はたらけニート特級術師の九十九が世界全員術師化計画やらなんやら語るのを聞いて「それもいいな」と心が動かされたりした。

だけど——悟は親族のことで様々な苦勞を負っている。七海のように後輩ではなくて、同級生だから。夏油は悟の努力を知っている。強ければなんでも出来るなんて漫画の話だ。むしろ強くなればなるほど色んな組織のしがらみに縛られていって、悟はどんな身動きが取れなくなっている。悟の体はひとつしかないし腕も二本しかないのに。

——強ければ発言力や影響力が増すなんてただの幻想なのだ。抱えきれない荷物を押し付けられて進むことも退くこともできなくされるだけ。

それに。人類をみんな術師にしたところで、呪霊は生まれなくなるかもしれないが……別の問題が生まれないか？ みんなが術師になるということは、現在の呪術界の構造が世界規模で当てはめられるようになるということじゃないのか——つまり、御三家やそれに連なる一族の傲りに倣った連中が、全ての日本国民に対して権威を主張できる世界になるということではないのか。

まともな者が上に立つならまだしも、今の上層部や森○蘭の一人が上に立つてみる。

日本は終わりだ。

というわけで結論。九十九の全人類術師化案は不採用、屑が増長するだけ。以上！

でも……そうだな。屑がいるから選択肢が狭められてしまうというなら、今の上層部や森○蘭連中を処分すればどうだろう？ あいつらなんて生きてても無駄だし、邪魔なだけだ。あいつらが皆いなくなれば全人類術師化計画を進めてもいいかもしれない。

もちろん処分するのは術師だけじゃない、屑は非術師にもいる。そいつらが生きていなければならないのか？ でも人殺しはなあ……人を殺すのには二の足を踏む。――

二の足を踏んでいた。

黒々と隈が刻まれた目元を揉み、ため息を吐く。

「あーあ。人でなしどものせいで、何故私が悩み苦しめられなければならないかだったんだろう？」

自分達と違うからといって人を痛め付けるやつら……呪力がないからと伏黒先生をない者扱いたした禪院家のやつらや、呪霊が見えるからと幼い女の子二人を牢に閉じ込めたこの村のやつらは、きつと人間じゃない。同じ二足歩行というだけの猿なんだ。人種が違うんだ。自分がホモサピエンスなら、あいつらはピテカントロプスなんだ。

そうとも、世界から猿を取り除いて、善良な人類ばかりの世界になればこんなに苦しまなくていいんだ。

たとえば悟、硝子、先輩に後輩、若手の術師のような善良な術師とか。

たとえば伏黒先生一家、家族、落とした財布を拾って追いかけてくれた人のような善良な非術師とか。

そういう人ばかりになればいい。そういう善良な人類だけで世界を作れたらいい。そう思ってるだけじゃ何も変わらないことを知っている。変えたいなら、動かなければ。

蠅による腐敗を概念とする呪霊に命じて村人たちに卵を植えさせて、菜々子と美々子という双子の少女だけを連れて高専に戻った。植え付けた卵の成長は速いから——遅くとも二日後には真つ赤な臍物の花畑が広がるだろう。

連れ帰った二人は女の子で、幼児だ。彼女らの世話を頼めないかと伏黒家の部屋に行けば、先生は不在だったが奥さんがいた。ご飯の匂いが染み付いた指先に安心したのか、美々子たちが奥さんを怖がる様子はない。よかった。

恵が脚にしがみついて「寝ろ、すぐる！」と夏油を布団に引つ張ったけど、外せない用事があるからと謝って伏黒家の部屋を出た。伏黒家のテレビには今日もスレイヤーズ。DVDと録画分をその日の気分で適当に選んでいるらしい。

双子のことで大事な報告があるから上と話したいと補助監督に伝えれば、二時間後に面会が叶った。残念、全員は集まらなかったようだ——でも八人も駆除すれば少しは上

もマトモになるはず。……ならないかな、どうだろう。

その足で京都に移動して御三家の屋敷を襲撃して三十七人を駆除し、その倍の数を戦闘不能にした。嬉々として夏油に飛びかかってきた禪院直毘人と直哉がいなければもつと掃除ができただろうに。残念だ。

翌日の昼過ぎ。人がいない駅で、全身汗みずくの悟に見つかった。線路を挟んで大阪市内行きのホームに夏油、京都市内のホームに悟。

「セーラームーン！ おまえ、なんで呪詛師に……！」

悲痛な声で詰られた。——だが、これは世界平和のためなのだ。善良な人々が傷つかない世界を作るために必要なことなのだ。そう語れば悟は夏油をぎりりと睨む。

「なんだよそれ……何が人のためなんだよ」

「マーズ。私はね、腐った組織の上層部を一新させる手っ取り早い方法をとっただけさ。——腐ったところを切除すればいい」

癌は切除しないと転移するし、イボは搾りきってしまわないとまた膿み始める。腐った部分をそのままにすると全体に腐乱が広がる。私は呪術界の外科医となり患部を切除するのだ、と夏油は親友に語った。内側から抗つてもどうにもならない。外部から破壊しなければ、この腐敗を止める方法はない。

五条悟は激怒した。必ず、この暴走した夏油を殴らなければならぬと決意した。悟に

は普通の友人というものがわからぬ。悟は、高校デビューが学校デビューだったボツチである。『山』で漫画を読みゲームをし、甚爾と遊んで暮して来た。そしてアニメに対しては、人一倍に敏感であった。

——夏油がR2を見ていないことはよく分かった。上層部が任務をバンバン回したせいで忙しく、見たくても見られなかったんだろう。それは分かる。けれども……これでは悟がスザクで夏油がルルーシユになってしまう。

今からではもはや遅いとはいえ——無印からR2まで全話視聴しろ。考察ブログを読め。ギア○サーチを使えばたくさん見つかるから。

それにセーラ○ムーンで悪堕ちするポジションはちびうさだ。うさぎちゃんが悪堕ちしてどーする？ ちなみに悟はまもうさぎ派で家人はデマうさぎ派。夏油は以前、ピュアな恋心がどーのこーのと主張してエリちびこそ至高とか言っていた。自分のあだ名がうさぎちゃんだからか「うさぎのCPは地雷です止めてください」と言っていた。

そんな下らない会話を思い出して、悟の目から涙が溢れる。

「おまえさ……なんでそんなに極端すぎんの？ 主人公なのに悪堕ちすんなよ。お前の主演作品セーラーム○ンじゃなくて灼眼のシ○ナだった？」

「君の例えはいつも漫画かアニメだな……」

「シ○ナはラノベだよ！」

「知ってるよ」

まるでどーしよーもないオタクが、まるでどーしよーもない悪堕ちオタクになった。魔王になってもかっこいいオタクは田○和夫だけだし、物語だから楽しめるのであつてリアルに悪堕ちはキツイ。

でも……悪堕ちするくらい追い詰められ、大変な思いをしていたのか。親友を自称してるのにそれに気づけなかったのか。

様々な感情が悟の胸を渦巻く。

大阪市内行きのホームに、電車が到着しますとアナウンスが響いた。悟は左手を上げて——大阪方面を指差す。

「……行けよ。俺はお前を見つけられなかった、そういうことにするから……死の外科医（笑）でもなんでもなっちまえよ、セーラ○ムーン」

「マーニ悟ずアとる」

三年近く、うさぎちゃんだのセーラーマ○ズだのと呼びあつた仲だ。お互いの名前をちゃんと呼んだ回数の方が少ないから——なんとも酷い別れ方だ。全く締まらないことこの上ない。

でもまあ、二人らしいと言えば、そうなんだろうか。

「悟、私は世界を浄化してみせるよ」

「うっせ、キャラが痛々しいんだよ。アニメキャラか？」

「厨二の君に言われたくないな」

「どこが厨二だよ俺ただのオタクだし。黒歴史ブラ○クヒストリークッキーはネタでしかねーもん。

……もういい、さっさとどっか行っちゃまえ。あと最後にアドバイスしとくけどコード○アスレンタルして全話見ろよ、傑」

電車の到着を知らせる軽快な音楽が流れ始め、止まったのは準急。

「傑……京都で……特別な帳に隠された『山』を探せ！ きつと手甲がありや入れる！」  
怒鳴るような大声が、車体を回り込んで傑の耳に届いた。

——京橋駅を出て右手にある階段を登り、一番近いネカフエでアニメを見た。久しぶりのアニメはなんだか懐かしくて、始めはくすくすと笑いながら見て……だんだん引き込まれていった。

ルル○シユ、見本にしてみようか。

もちろん夏油はルル○シユのように死ぬつもりはない。だけど、プライドと信念を突き通す姿は見本にしたい。形から真似をして仮面でも被ってみるか？ いや仮面とか逆に恥ずかしいよな……素顔で活動する方がいい気がする。

家人のよろず夢サイトを開いてコメント付き拍手に「ルルーシユ目指して頑張るよ。元気でね。あとすまないんだが家族の保護を頼めないか？ byうさぎ」と書いて送り、

黒背景に蝶が飛んでいるページを眺める。

「貴方は……一、十、百、千、万……96, 467人目の夢見人です、か……」

——そうとも、夢を追おう。善人が悲しまない世界を作るといふ夢を。

先ずはそうだな、悟の言っていた『山』を探してみるか。この手甲を作った呪具師がいるんだろう『山』を。

そのしばらくあと。大阪から約五百キロ離れた東京の山奥で、目の下に隈を作った女子高生が悲鳴を上げた。世界的なビッグウェーブに乗って数カ月前に購入したばかりのア○フオンを放り投げ、背の高い後輩の首を掴んで振り回しながら「夏油<sup>あいつ</sup>を殺せ！今すぐニダ！ 奴だけは生かしておけぬ！」と半狂乱になった姿が目撃されたとか、目撃されなかったとか。

## その16

京都は御三家のホームグラウンドだからとゆる理由で大阪を拠点にしてうろついていた傑は、奈良との県境にある市を歩いてきた。大阪市内の安いサウナで一晩過ごそうとしたら襲われたからだ——同性に。うっかり殺しそうになったけど非術師だったから片方の玉を手持ちの呪霊に食わせ、それを除霊した。世のため人のため私のため、さようなら性犯罪者のゴールデンボール。

ある程度現金を引き出してると資金は有限だし、どこかこつそりと過ごせそ—な場所はないものかとあつちをふらふら、こつちをふらふら。最終手段は人のいない神社だろ—なんて考えつつ昼ごはんを吉野○で食べ——駅前を離れマンションや戸建住宅が入り乱れる市街地をぼんやりと歩いてた傑が見つけたのは……市民農園に倒れ伏す人の姿。

「大丈夫ですか!？」

入り口には少し距離がある。柵を飛び越えて農園に入りその人の元に行けば、七十かそこらの老人で——青い顔をして地面に横たわっている。

「どうしましたか、大丈夫ですか!？」

「腰が……」

「腰が？」

「腰が痛い……」

倒れていた老人の名は武田光一。地面に転がったシャベルを持ち上げよーとしたらギックリ腰になってしまい、大声を出すと腰に響くから助けを呼ぶこともできず倒れてたんだそーな。

光一氏のかんたんケータイでご自宅に電話したら娘さん——つて言っても僕より年上らしいけど——が車で迎えに来てくれることになった。

十分と少しして農園に現れた光一氏の娘、武田光希は美人だった——困り眉、たれ目気味の一重に泣き黒子、厚めの唇……そして胸がでかい。骨太なのか腕やら首回りやは細くないのに、胸がでかいから全体的に細く見える。僕は頑張つて光希の顔を見た。視線を下げたらスケベ小僧扱いを受けるのは間違いない。彼女の顔面に視線を固定して「ぼかあ紳士です」とゆるー表情を保つ。

「ごめんねえうちのお父さんが迷惑かけて」

「あ、いえ」

「でも見つけてくれてホンマ助かったよ。今日は農園に指導員さんがいはれへん日やから、あのまま君が見つけてくれんかったらお父さん寒空の下に放置されて夕方まで、と

かなってたかもしれない」

「うん、あのまんまやったら風邪引いてたかしらん。助かったわ夏油くん」

「夏油くんが親切でホンマ良かったよ。ありがとうね」

武田家に着くまでの十分足らずの間、ずっと僕は褒め倒されることになった。呪術師の任務でもこんな褒められたことはないのにギックリ腰の老人をちよつと介護しただけで「人間ができてる」だの「氣つ風がいい」だの「素晴らしい若者」と褒められるんだから……呪術界限は殺伐としすぎではなかるーか。この親子が人を褒めすぎなだけかもしれないけど。

しかしこの褒め殺しのお陰で僕の自尊心はこれ以上なく満たされた。そうなんです私は素晴らしい青年なんです、もつと褒めてくれてもいいんですよ。

武田宅は築四十年くらいだろうプレハブ工法の一戸建てで、間口は広いけど駐車できるスペースはない。自転車置場はある。家の前で光一氏と僕は車を下ろされ「家の中入つとつて」とゆるー言葉と共に家の鍵まで渡されて光希の車はどこかに走っていく。

「ちよつと駐車場遠いねん。重いし寒いやろ、はよ入る」

「了解です」

玄関は一畳くらいか。左手にある引戸は直に居間に繋がっている。居間の奥には階段。

「ガラス戸の右の奥に洗面台あるから、そこで手え洗おか」  
「分かりました」

居間に入つて右手にあるガラス戸を開ければダイニングキッチンで、四人掛けのテーブルや食器棚、冷蔵庫でごちゃごちゃとした印象を受ける。右に短い廊下で蛇腹のカーテン、その向こうに脱衣所兼洗面所。洗面所の左はトイレで右が風呂場らしい。

洗面台の下には子供用の踏み台があつた。

「お孫さん……ですか？ いらつしやるんですね」

「うん。今保育園行つてるからおらんのやけどね」

光一氏を背負つたまま体を屈めて手を洗わせ、ダイニングキッチンの椅子に座らせてまた洗面所に戻る。浴室の磨りガラス戸横の籠に——暴力的なサイズの下着を見つけてしまった僕は顔を覆つた。

僕は必死に頭を振つた。相手は子持ちの人妻だぞドーマンセーマン、陰陽師を呼べ去れ煩惱！ 臨兵闘者皆陣列在前！ 除夜の鐘を打ち鳴らし百八つの煩惱を打ち破れ！ 大丈夫だ悪は滅びるし煩惱は去る、だって梁山泊の英傑は全員死んだから。

——それで、僕は武田家に泊まることになった。優しい子だとか体格が良くてかつこいいよだとか年上二人から褒めに褒められ、熱い煎茶にお煎餅を出され、お礼に夕飯食べべていきなと誘われ……その流れで「うちで食べるなら親御さんに連絡しないと」と

言われ、慌てて「実は今自分探しの旅の最中で、実家は関東なんです」と言い訳したせいで。二人がどこまで傑の言うことを信じたかは分からない。もしかしたら家出っ子と思われた可能性もある。

ここにいたいだけいたらいいよと言われたけど、一晩宿を借りたらそのままお暇するつもりだ。御三家の皆様……特に禪院の当主と息子に見つかつたら武田家に迷惑がかかる。あの二人は傑の手甲を手に入れるためなら周囲の被害を省みない層だし。

夕方になり武田家に増えたのは光一氏の孫・宗介くん五歳、お母さんに似た一重たれ目の男の子だ。伏黒家の恵くんで子供の相手に慣れていたのが功を奏し、傑は数十分もせずに宗介くんと打ち解け……馬になった。なにせ武田家にいるのはギツクリ腰をするよーな年齢のお祖父ちゃんと、ママだ。馬になれる人がいない。それに対して傑は若いし体格のいい男だから馬に必要な素質を完璧に備えていた。

時々暴れ馬になり騎手を振り落したり、二足歩行の馬人間に進化して騎手を振り落としたり、牡の十九歳馬・スグル号は何度も落馬事故を起こした……んだけど、騎手は愛馬を見捨てなかつた。別に見捨ててくれてもよかつたのに。夕飯の席でも馬○の背中から離れようとしないう宗介くんはママに怒られ、渋々椅子に座って唇を鳥のくちばしみたたくき出した。ちびっこが不貞腐れても可愛いだけだ。

夕食のあと光希がギツクリ腰老人の風呂介助をしようとするのを見て、傑は「男同士

ですから」とか「僕は力持ちですから」とか言つて役割を交代した。風呂場横の籠にはバスタオルが掛けられていて安心なよーな残念なよーな。

今回のギツクリ腰はかなり痛みが酷いらしくズボンを脱ぐだけでも辛いとかで、光一氏は今日は早じまいすると言つて宗介くんを連れ、ヨボヨボと二階の寝室に消えた。宗介くんがいると僕が休めないから、ゆっくりできるよーに配慮してくれたんだろう。

騒がしく暴れまわるちびっこがいない静かな居間のこたつで、ぬくぬく暖まりながら隣室の向こう端に置かれたテレビを見る。耳の遠い人用の手元スピーカーから「奥さん、漏電がどれくらいビリビリするかご存じですか?」「ビリビリビリビリ! こんなもんですか?」とゆるしユールなCMが聞こえる。なにこれ。

キッチンにいた光希が居間に戻つてきて、僕の前に煎茶とスープで通年売つてるよーなみたらし団子が配膳された。

「ごめんねえホンマ、お礼のはずやつたのに宗介の面倒見てもろてしもて……。家には無茶振りできる大人の男の人がおれへんから興奮してもーたみたい」

武田家には光一の物以外に男物の服はなかった。細身の老人である光一のシャツは僕にはサイズが小さくて入らない……。まあ、僕は背も高く体格がいいからLサイズであつても小さいんだけど。そのせいで着れる服がない僕はノーパンでネズミ色のスエットを穿いて半纏を着るとゆるい変態チックな格好だ。お陰様で尻の据わりが凄く

悪い。

「あの子のお父さんとは離婚してねえ、出戻りなんやわ、うち」

「あ、顔に出てましたか」

「いやいや、ふつー疑問に思うやろ。なんでこのうち旦那おれへんのやろーって。半年……もう一年近く前になるかな？ テレビでも雑誌でもすんごいニュースになったから覚えてると思うんやけど。盤星教って宗教団体が女子中学生の誘拐事件起こして、警察が入ったやんか」

「ああ……」

盤星教女子中学生誘拐事件は僕がほぼ一から十まで関わった事件だ。天内に粘り強くしつこく殺し屋を送り続けてきたから、わざと彼女を誘拐させ、持たせておいたGPS情報を使い「ここに連れ去られています！」と警察に追いかけてさせて施設に突入。盤星教は「神のために女子中学生を誘拐した」頭がおかしい犯罪組織として紙面を賑わせた。盤星教のお陰で国内の殺し屋さんは激減したし、殺し屋さんに依頼を繰り返してた盤星教自身も消えて日本は平和になった。盤星教ありがとう。

「あそこの幹部の一人、うちの旦那やってん」

「はい？」

苦笑を浮かべる光希を僕はまじまじと見つめた。あのととき現場にいた信者全員の顔

を覚えてるわけじゃないけど、光希の顔には全く見覚えがない。

「うちはユルユルのお西につさんやから盤星教とはなんも関係ないんやけどね。旦那がなんの宗教を信じてようが、うちに押し付けてこーへんなら好きにしたらええと思つてたんやけどさ……入信しとつたのがまさかの性犯罪宗教団体とか、夫婦続けんのなんて無理やん?」

離婚届見せたらめっちゃ泣かれたけど、組織ぐるみで女子中学生の誘拐企むよーな犯罪者と家族で居続けんのはちよつと考えられへんやん。罪を償つて社会復帰頑張りやつてゆーて大阪に帰つて来てん。

——そんな話をネタに出来るとゆーのは、ここらの土地全体の治安と人々の雰囲気がいいからなんだろうーか。それと光希本人がサバサバした性格だから、とか? 普通なら「元旦那が性犯罪組織に関わつてた! やばいやろ!」とか他人に言えないだろうーに……いや、もしかしてこれが大阪のノリだった?

そんな考えが顔に出てたのか、光希は手を伸ばして傑の頭をポンポンと叩いた。

「傑くん、なんか悩んでんにやろ。顔見たら分かる」

へ、と目を丸くした。すぐそばに泣き黒子がある。

「うちの話、傑くんの自分探しの役に立たへんかな。世の中にはこんな人もおるんやつて知るだけで何か変わるんちゃう?」

——その時、傑くんの脳内で悪魔がこう言いました。

『エロくて美人で親切な関西弁元人妻つてAVかな？ 押し倒せ！ いけ！ 男を見せろ傑！』

それに対して天使はこう言いました。

『人の親切をスケベ解釈するんじゃないやねーよ！ あと今の自分の格好を考えろ！』

天使のゆーとーり、ノーパンの上にスエット穿いて上半身は裸に半纏の変態的格好の傑が「奥さん……」「ダメよいけないわ二階には幼い息子と父が」なんてふざけた展開になれるわけもない。

結局、傑は居間の隣の部屋に布団を引いて健全に寝た。

暖かい布団でぐっすり寝た翌日。光希が仕事に行くのに合わせて傑も武田家を出ることにした。駅前の小児科で受付事務をしてるから、朝はそんなに早くなくていいそーな。

「今日はどうすんの？ まだ大阪におるんやつたらホンマ、うちを拠点にしてくれてええんやからね」

「いえ……友人から京都で『見えない山』を探すようアドバイスされたので……京都に行くこうと思います」

朝食の席でそう話せば、光希が「へえ」と声をあげた。

「京都行くん。ならお父さんの弟一家が京都市内に住んでるし、一泊でも泊まらして貰えんか聞いてみよ。な、お父さん」

「せやな、それがええわ。傑くん、今から誠二に——京都に住んでる弟に電話するさかい、今晚はそこに泊まり」

「えっそんな、そこまで迷惑掛けられませんかよ！」

「ええのええの、どうせ誠二んとももう子供はみんな独立しとるし。お客さんの一人や二人かめへんかめへん」

断つたのに住所を書いた紙を押し付けられ、「油小路の隣の筋やねん」と説明されたけど油小路がどこなのかすら分からない。京都駅で地図とにらめっこすることになりそーだ。

出勤準備のため光希が忙しそーにあっちへ行きのこっちへ行きのしてるのをよそに、光一がふむと息を吐いた。

『『見えない山』ね……』

「何かご存じだったりしますか？」

「いや、見えない山は分かんが、山がある日突然消えたあ言う話なら聞いたことがある」

「……詳しくお聞かせ頂いても？」

京都市内の生まれ育ちだった光一の話によると——時は遡り、大石内蔵助ら四十七人が吉良邸に討ち入りし一般庶民を喜ばせていた頃……つまりだいたい三百年くらい前。京都の東にあったはずの山がある日突然なくなったのだとか。昔話によるとその山には健康長寿の神様が住んでいて、山の麓に詣でるだけで病が治るほどだった。が、その山が突然消えてしまったもんだから天変地異の前触れだとゆー噂が流れ、京都は上から下から大騒ぎになったらしい。

『見えない山』ってソレではなかるーか。いやでも、こんな簡単に答えに辿り着けるはずがない。きっと他に別個で『見えない山』があるに違いない。

だいたいどこらへんに『突然消えた山』があったのかを教えてください京都へ向かう。京都市内に入ってからはバス移動になったんだけど、どの路線がどこと繋がってるのか、京都初心者には良く分からない。……僕は迷子になった。

言い訳になるが、僕が迷子になるのは仕方ないのだ。以前禪院から呼び出された時は京都駅に迎えの車が来たとし、御三家襲撃の際は呪霊に乗って空を移動したからバス停がどこにあるか知らなくても問題なかった。

だから僕は悪くないのだ。京都のバスが悪い。

光一に教えて貰った『突然消えた山』の最寄りのバス停を下りたのは午後四時過ぎ。そこから三十分ほど東に向かって歩けば『山』があったはずの場所に着くらしい。

——こんなに簡単に『見えない山』の情報が入るはずがないし、どうせ外れだろう。そう思っていたんだが。

「まさか初回で当たりを引くとは……」

地面に打ち込む釘型の呪具は帳を長期間固定するための補助具だ。

この『特別な帳』の向こうにはきつと——山がある。

電柱の上に停ったカラスが、太い声でカアと鳴いた。

## その17

冬の夕方四時はだいたい暗いしこれから夕飯つて時間に押し掛けるのは憚られる……とゆうことで、傑はまた迷子になりかけながら京都駅に戻り、光一の弟夫婦の家——京都に昔からあるよーな間口が狭く奥に長い家で一晚過ごした。

年寄りの早起きに巻き込まれて六時半に目が覚めたけど就寝が十時半だったから睡眠時間は十分すぎるくらい。なんでかお土産に八つ橋を持たされて武田宅を出て、バスの時刻表を不倶戴天の敵とばかりに睨みながら今日は迷うことなく『見えない山があるかもしれない場所』に辿り着いた。昨日の夕方は『帳』の前で引き返したけど、今日は——今日こそは入ろう。

『帳』は空を飛べる呪霊に乗って上から見て回ったところドーム状で、中がどーなってるのかは全く見えない。これなら非術師たちが山がまるごと消失したと誤解するのも当然だ。

地上に降りて元の道へ。こんな面倒そうな『帳』、本当に入れるんだろーか？ 悟は「手甲があれば入れる」とか言ってたけども。

手甲が鍵になるなら、『帳』の中にいるのはこの手甲の制作者か関係者だろう。

三百年前に消えた山つてことだから、この場所には昔から何かが隠されている……もしくはここで隠れて住まなければならぬ人がいることとイコールかニヤリーイコールだ。

もし人が隠れ住んでいるなら……世俗を離れ隠れ住まねばならないほどの凄惨な呪具師一族がこの『帳』の中で暮らしてるとか？ もしそうなら、昔話で「病魔を祓う神様がいた」とゆーのはきつと高度な呪具か術式の力に違いない。悟から貰った『見えない山に入れる』手甲は付け心地も使い心地も素晴らしく、傑がそれを見せつけたら禪院の当主と息子から親の仇か何かを見るよーな目を向けられた。

当主すら欲するような呪具を作る呪具師がこの『帳』の向こうにいる可能性は高いのでは。

だけど、当主ではない五条悟が知っていて、長年当主を勤める禪院直毘人が知らない呪具師なんて存在するんだろーか？ 五条の一族でこの呪具師を囲い込んでいるのだとしても、禪院も五条も本家は京都にある。かつて五条がここを隠したのなら禪院や加茂その他の呪術師一族が気づかないわけがない。

全く謎だ。どんな縁がどんな風にどーなってるのか全然分からない。——でもまあ、ここで悩んでも時間の無駄だとゆーことは明らか。とりあえず中に入って見て、それから考えればいいのだ。

右手を『帳』に添えると拒まれることなく手が入った。

「(ハ)は……」

『帳』の中は明るかった。後ろを振り返ると今来た道が見える。中から外は見える仕様らしい。

ただどこかが明るいのは日光がさんさんと照っているから、とゆーだけじゃない。

この『帳』の中には呪霊の気配が全くないのだ。あんまりにも清浄すぎる環境——整備された長い石の階段はまっすぐに山の頂上に伸び、歴史の古い神社を思わせる社殿が見える。呪具師が暮らしているのではなく隠し倉庫だったのか？ 山ひとつ丸ごと？

「すいぞ」

すいぞ、とはしやぐ。ここはまさに理想郷——九十九はこのことを知っているん

だろうか？

傑が興奮してるのには訳がある。この地球上で呪霊がない場所なんてものはほぼないに等しいのだ。もちろん人類未開の地なら別だけど、ここみたいな人口密集地に比較的近い場所で呪霊が皆無なんてのはありえない。新人がしがちな誤解の一つに、神域イコール呪霊がない場所だ、とゆーものがある。……が、神域だろーが寺院だろーが呪霊は出る。神社の主たる神が堕ちて呪霊になることもあるし、蠅頭程度の弱い呪霊ならどこにでもいる。

呪霊とゆーのはいわば雑草みたいなものだ。しつかり草刈りしてきれいになつたよーに見えても、人間の負の感情とゆー種がまたどこぞからふよふよ飛んでくる。刈つても刈つてもまた芽が出るもんだから呪術師は死ぬまで雑草と戦わねばならない。いたちごっこここに極まれり。

でもそれが呪術師のお仕事だし、この世には目に見える成果がある仕事ばかりじゃない。死亡率が高い危険なお仕事な分給料も高いわけだし、諦めて毎日草刈りしないかね。

一言でまとめよう。草刈り機ブンブンが必要ない場所なんてものは、存在しない。負の感情が負の感情を呼び呪霊が生まれるのはもはや自然の摂理なのだ。

だから、『普通』じゃない場所が存在することに、傑は圧倒された。

——だって、なあ、見てくれ、ここには夢のような環境が広がっているんだ。ここでは誰も呪霊に苦しめられやしない。きつとここを作った誰かは呪霊を生み出さない『帳』を完成させたんだらう。麓を詣でるだけで病魔を祓つたというのもきつと呪具の力なんだ！

傑の心臓はドキドキと高鳴つた。この社殿の中にきつと、傑の夢を叶える呪具がある。心ある人々を守る力がある。長い石段を登る足が軽い。

有り難く呪具を頂いていきますね、と先に謝罪兼お礼。神社の鈴を鳴らして二礼二拍

手一礼、作法を指示する案内の掲示がなかったので伊勢のやり方で詣でた……ら、奥の社殿の扉がゴトゴトと開き、赤毛の女が顔を出した。

えつ、そこつて倉庫じゃなかったの。

「はいはい、どなた〜?」

女が現れた瞬間、傑が取り込んできた呪霊という呪霊が女の方へ引つ張られていく。地面から足が浮くほどの勢いだったから賽銭箱——の見た目をした冷蔵庫——に抱きつくよーにして傑本人だけはその場にどーにかこーにか留まつたけど、傑が使役する二百数十体の呪霊は全て体外へ飛び出し勢い良く女に向かう。傑はわけも分からぬまま「逃げるー」と声をあげた、が。

「あらまあオヤツが向こうから」

女に触れた瞬間、呪霊はセミの脱け殻が崩れるようにボロボロと空気に散っていった。その場に残ったのはノルディック柄のセーターで着膨れした赤毛の女一人。

使役する呪霊全てを奪われたことを怒るべき場面のはずだし、唾然呆然と立ち尽くすべき場面でもある。だけどなんだか、体が軽いし気分も爽快なのだ。怒ろうとゆー気が全く起きない。肩の荷が下りたよーな心地とゆーか、面倒ごとから解放された時みたいな。呪いの何たるか、自分の呪術が何なのかを知らなかった時のよーな気楽さがあった。人生万事塞翁が馬、なんとかなるさつてね。

「ごちそうさま。こんなにお土産引き連れてくるなんてありがとね、そんでお客さんはどなた様？」

「へ、あ！ はい！ 私は夏油傑です！」

蛙みたいにしがみ付いてた賽銭箱いや冷蔵庫からぴよんと飛んで下りる。その勢いでスキップしたい気分だ。夏油選手見事な着地です、十点！

——さて。この女が神の域に至った呪具師の末裔なんだろう？ 三百年前から『帳』の中に隠れ住む一族にしては見た目が国際的だ。赤毛に赤い瞳と彫りの深さからしてハーフかそこらか、日本語に癖がなくて流暢だから日本生まれ日本育ちだろう。

「ああ聞いてるわよ。スグルくんね、悟の友達。あたしはリタ・ギニヨレスク——好きに呼んでいいからね。さあ、なんにもない場所だけど上がってちょーだい」

「あ、はい」

促されて入った社殿の中は生活感に溢れていた……社殿の外観をした住居とゆーべきか。古い旅館のよーない感じの寂れ具合なんだけど、あっちこっちに人が生活しているらしきがある。たとえば靴箱に入りきらない靴やサンダルが上がり框の下にあつたり、靴箱の上に十二支の土鈴があつたり、延長コードが柱に這わされてたり。

うちにスリッパはないから靴だけ脱いで上がってと指示されてリタの後ろをついて歩く。廊下はフローリングじゃないのにつやつやぴかぴかしている。

「それにしてもここに辿り着くのがはやかったわね。まだ悟から電話もらってから二日よ？　こんなすぐにうちが見つかるとは思ってなかったわ」

「実は一晩お世話になった方が京都市の出で、『消えた山』の話をしてくれたんです」  
「へー、どんな話だろ」

リタは女性の平均身長からすると背が高いけど、傑よりは低い。つむじが見える。

案内されたのは居間らしく、畳敷きの部屋の真ん中に古いが大きな一枚板のローテーブル。こたつ布団には人が抜け出た跡がある。テレビに映るアニメは録画かDVDか、一時停止中だ。

テレビ横のビデオラックの上にリタともう一人に子供が二人の写真が飾られている。家族かな？

「今お茶の準備してくるから、適当にこたつ入っという。あ、テレビ見る？　最近寒いからさあ、引きこもってアニメ三昧なのよねー。あ、このアニメ好きなんだってね？　予習してたのよく面白いわねこの純口マってアニメ」

そー言つて、再生ボタンを押して居間を出ていった。好きなアニメも何も、絵柄に見覚えがないし知ってるキャラクターでもなさそーだ。誰がそんなことを言っただか。

再生ボタンから一拍してアニメが動き出す——灰色の髪をした唇の厚い男が、茶髪の青年をベッドに押し倒した。青年が慌てた様子の声をあげる。

『ちよつウサギさん!』

「ん?」

さして興味がなかったアニメに傑の意識が向く。なんせ傑はこの三年近くうさぎやらセーラームーンやらと呼ばれてきた男だ。東京高専のうさぎちゃんとは私のことよ。

『可愛いなお前は……』

『アツ、ウサギさんっ』

傑はリモコンに飛び付いてテレビの電源を消した。

誰だ。——誰がこのBLAアニメが好きだとリタに伝えた? まあどう考えても悟しかないんだよなあ。悟よくもあの野郎ぶつ殺すぞ。

すぐるくんは強く拳を握り締める。今度会った日が悟の命日だ。首を洗って待ってろ。

悟への殺意は今仕舞って、テレビに背を向けてこたつに座れば、すっかり冷えていた脚が温もりに包まれた。ほつと一息吐いて天井を見上げる。

——さつき、傑が集めてきた二級から準特級までの呪霊が全て消滅した。ファンタジックな表現になるけど、呪霊は体力とか血とか……生命力にあたるモノを全てリタに吸いとられて消えてったように見えた。あれが彼女の持つ術式なんだろう? 名付けるなら吸血術式、とか。

今までの苦勞がペアにされたと言えばまあそーなだけで、怒る気にはなれない。呪霊はまた集めればいい。どうせまた勝手にポコポコ湧く。

そんな風に許せちゃうのはきつと、今までになく気分がいいからだ。体も心も頭も軽い。もちろん頭が軽いつてのは頭がペアになったとゆー意味じゃない。

「あら、アニメ見てないの？——まあ初めて来た他人の家でテレビ見るのは憚られるか。実家みたくなって無理は言わないけど寛いでちよーだいね」

「温まらせて頂いてます」

「うん」

リタが持ってきたのは新しい湯飲み二つと急須、茶葉、個包装された揚げせんべい。テーブルの上の給湯器の頭を何度も押しして急須にお湯を注ぐと、「高い茶葉だから美味しいわよ」って言いながら保証付きのお茶を僕に出した。リタの言うとおり煎茶なのに美味しい。

バリバリと揚げせんべいをかじる音、茶を啜る音。

「悟、高専でどんな感じ？ 腹の立つクソガキ？」

「いえいえ、この界限では珍しい常識人ですよ。気遣いができるし。色々助けられてます」

お茶が美味しいと気が緩む。打ち解けた雑談は呪具あたりから。

「リタさんがこの手甲を作ったんですか！ すごい！」

「そーなのよもつと褒めて。螺旋丸打てる道具を作ってって言われたときは悟の頭が遂におかしくなったのかと思つてさー。あんた頭どーしたの、って聞いちやったわ」

出会つて三年経つてようやく明らかになる伏黒甚爾と五条悟の關係。なんとこの女が伏黒甚爾の育ての親らしい。まだ二十代——若作りだとしても三十代にしか見えな  
いのだけど、甚爾以上となると……いや、女性の年齢を計算するのは止めよう。

「あの二人は年の離れた兄弟か従兄弟か……みたいなの？ 悟つてばほぼ日参レベルでうちに来てたし、まあ兄弟みたいなもんでしょーね」

「高専では全くそんな雰囲気を見せませんでしたか……」

「身内だから鼻息してるとかさされてるとか誤解されなくなかったんじゃないの？」

「伏黒先生はそういうことをする人じゃないなんて、担当を受け持つて貰えばすぐ分かりますけどね」

——そして、僕が呪詛師になったことについて。

「どうして悟は私にこの山を探せと言つたんでしょうか」

「そりや、悟にとつてスグルくんが大事な友達だからでしょ」

え、と顔をあげた。

「……なら賞金目当ての呪術師や呪詛師からの襲撃なんて気にせず過ごせるからね。」

——ここに入るときに見たでしょ、うちが帳で封印されてるの。だいたい三百年くらい前にあれが出来たから、今じゃうちのことを知ってるのは御三家でも本家と本家に近い分家の当主とかそこらしかいないわ。これ悟情報ね。あたしの存在についてみだりに口外できないって関係者全員縛りを結ぶことになってるから親しい相手でも教えることはできないそーだし……つまりまあ、ほとんど知られてないのよ、この山。ここにいれば誰もスグルくんを見つけれないの」

あたしはスグルくんが犯罪者だろーが人殺しだろーが呪いの王だろーが、あたしにとつて無害なら別にそれでいいのよ。だってあたし警察じゃないもん。

好きなだけうちにいたいらしいし、疲れた時に泊まりに来るつてのもいいよ。あたしはずっとここに居るからさ。悟の友達ならいくらだって泊めてあげるわ。

——そう言われて、悟を殺すのは止めることにした。なんだよ悟……私のこと大好きかよ。照れるね。

しかし……自分で隠れ住んだのではないのなら、リタの一族はきつと呪いを喰らう血筋なんだろう。外にいれば疑われ排除こされると分かっていたから『帳』の中に閉じ込められることをよしとしたのだ。——なんせ呪霊を喰らう姿は圧倒的過ぎた。

もしかして寓話の吸血鬼はリタの一族のことだったんじゃないか？ それで国から国を転々として日本に流れ着き、この山に隠れた。

寓話を信じるならリタは見た目どおりの年齢じゃないかもいけない。一族で逃げたんじゃないやなくて一人で逃げてきた。だからこの家にはリタ以外に人の気配がないのだとも考えられる。

「リタさん、貴方は——」

なんなんですか、と訊ねた僕に、リタは「そーねえ」と首を傾げた。

「魔王様かな」

あれっ、おかしいな……ちよつと予想と違ったかも。

## その18

リタのいた世界——呼び名がないとこれから面倒なのでスレイヤーズ世界とでも呼ぼうか。スレイヤーズ世界は、世界が誕生してからウン万年、赤眼の魔王シャブラニグドゥが七分割されてから八千年、竜破斬を編み出したレイ||マグナスが北の魔王として封印されてからは四千年、リナ||インバースが活躍したのがもう三千年前、リタが飛び出してから千年。

少なくともスレイヤーズ世界の人類が文明を持つてから四千年は経つのだ。経つはずなのに——あまりにスレイヤーズ世界は変わらな過ぎた。

時代と共にファッションは変わる。服だけじゃない、武器や防具のデザインも変わっていくのが当たり前だ。なのに、少なくともレイ||マグナスの時代からリタの生まれた時代まで、デザインや素材の変更がそんなにない。

似たよーな肩当てに似たよーな剣に似たよーな呪符。——スレイヤーズ世界はあまりにも変化がない。少なくともリナ||インバースのいた三千年前からはずっと文化が停滞している。昨日と変わらない今日、今日と変わらない明日、千年前と同じ千年後……だから、創造主は外を見た。忙しなく進化していく技術、十年単位で変わる常識、一

分一秒の変化がめまぐるしい世界、地球を。リタが繋いでしまったその異世界を興味深げに覗き込んで、基点と縁深い、世界に大きな影響を与えそうな子供がいるのを知った。平穏な水面が広がる世界にはもう飽いている。何が起きるのか分からない、未知を見たい。知りたい。——この子供と一緒にいれば楽しめそうだが、どうすればこの子供の側にいられるだろう？

観察を続けていたら、その子供に息子が生まれた。子供は息子を毎日抱き上げて毎日一緒に寝て毎日会話をしている。なるほど子供は親になつたのだ。

子供の息子は良いことを教えてくれた。私に恩を売つたり物を教えることなど滅多なことではできないのだぞ、困ったことがあつたら私が薙ぎ払つてやろう。礼だ。

ほら、こうしてこの世界に生まれてやつたんだ。私を楽しませてくれ。甚爾。

「咲良ちゃんは今日もかわいいでちゅねー」

やめろ。私は楽しませろと言つたのであつて、顔にキスしたり顔を擦り付けたりしろとは言つてない。痛いよ髭が。

だが押し退けても押し退けても甚爾は飽きることなく堪えることなく顔を擦り付けてくる。それも毎日だ。

人間として生まれたのは失敗だつたらうか？

もちろんながら咲良ちゃん地球で爆誕とゆうヤバイ状態に気付いてるゼロスとリタは、知ってて放置を貫いてた。ちゃんと理由はある。「あたし甚爾ちゃんと一緒にいたいのばぶばぶ」って言ってる咲良もといL様の意向を尊重してるのだ。近づいたらどんな目に遭わされるか分かんないからじゃあない——ほんとほんと。嘘じゃない。

リタは「赤ん坊はまだ小さいんだし、しばらくうちに帰ってこなくていいわよ」「ちびが二人が増えると長距離移動の車内で面倒見るの大変でしょ。家でゆっくりしてたらどう?」「従姉弟の交流も大事にしなよ」と美しい言い訳で甚爾の京都帰省を断り、横に反らし、不機嫌咲良様との対面を先送りにし続けてきた。でも恵くんが「おぼーちゃんち行きたい」と言ってるそーで、そろそろ帰省するかもしれない。

あと三年くらい帰って来ないでほしい、お願いだから帰ってくるな頼むと毎日祈って十二月、『山』に転がり込んできた青年は当たりだった。リタと同じでモノを取り込むのが得意な体質——ただ、リタは取り込んだものを消化吸収して自分のものにし、青年ごと夏油傑はそのままの状態で保管し利用するのに長けている。

傑の持つ術式はリタの特性と似てるけど違うものだど悟たちから聞いてたから、リタは傑に対して「悟の友達」とゆう以上の興味はなかった。

——でも、違った。傑本人の口から語られた呪霊操術の真価——極ノ番『うずまき』

は、対象呪霊の術式を抽出する。

この子ならあたしと同じことができるんじゃない？ ううん、あたしにはできないこともできるんじゃないの？

傑を客間に寝かせたあと、居間に戻り後ろ手で戸を閉める。

「ゼロス、いるんでしょ」

「はい♡」

闇から現れたのはおかつぱの男、もとい獣神官プリーストゼロス。そのゼロスにリタは固い声で命じる。

「魔王の魂の欠片を持ったヤツ、捕まえといて」

傑の術式なら、シヤブラニグドウの欠片を持った人間から欠片だけを抽出できる可能性がある。

欠片だけ分離してくれば、リタがそれを消化吸収し、そのまままるごと自分の力に出来る。食べた分全てをロスなく積み上げられる。強くなれる。

現在ゼロスはこうしてリタのパシリをしてるとはいえ、上位魔族の一人……一体だ。七分の一の魔王を七分の二に——いや、七分の三とか四とかにしたいとゆるい想いを持つてるはず。しかし魔王として目覚めたレイⅡマグナスの封印は四千年過ぎても解けず、レゾとルークはリナⅡインバースにより欠片ごと滅ぼされた。レイⅡマグナスとリタ

を除けば魔王の欠片は残り三つしかない。

残る欠片をリタが吸収すれば、リタの人格をベースにした魔王シャブラニグドゥ……いや、新魔王リタ・ギニョレスクが誕生する。竜神の四分の一ずつである竜王たちと、八千年の封印で弱体化したシャブラニグドゥの七分の四ではどちらが強いのか。希望的観測かもしれないけど七分の四シャブラニグドゥの方が強いに違いない。強いはず、メイビー。

欠片を取り込むのに多少時間と体力を消費するかもしれないけど、この世界にいる限り竜王たちからの横槍は入らない。天敵のいない環境で強化を重ねられるとゆーのは安心だ。

リタは強い魔王になる。ならねばならない。もちろん世界を滅ぼしたいなんてリタは思っちゃいないが、今よりもっと強くならなければならない。

残る三つ全てを取り込んで七分の四シャブラニグドゥになれば、タイマンでなら竜王に勝てるよーになるだろう。ああそうだ、竜王の力を取り込んだじやうのもいいんでは？——そして聖魔王って名乗るとかね。就任して五年が過ぎたら二代目候補者集めて戦わせるやつ。

竜王を食べるかは別にしても、残るシャブラニグドゥの欠片を全て集めれば間違いなくパワーバランスが魔族に傾く。今の拮抗状態……数千年続いた停滞が終わる。

なんらかの変化が起きる、はずだ。

——まだ咲良の産み月まで余裕がある伏黒夫婦が『山』に帰省した際、リタと二人で留守番になったときに恵が言った。「ママのおなかの赤ちゃん、ヒマだーって言ってるよ」。

『あつちはずーつとずーつと何にも変わらないから、こつちに何か楽しいのいかないかって探したらパパを見つけたんだって』

そして伏黒家に咲良が生まれた。混沌の魔力を抱いた赤ん坊が生まれてしまった。

今のリタでも地球に対して過剰戦力だとゆーのに、もし咲良が適当に魔術を放つたりしたら……物理的な意味で地球が割れる。そうなる前にお帰りいただかねば「人類は衰退しました」じゃなくて「人類は（地球ごと）滅亡しました」になってしまう。まだリタは地球に來た目的の一つのなに○黒牛を食べてないのに。

——L様が停滞に飽いて地球に興味を持ったなら、元の世界が流動的になれば意識をそつちに戻すだろう。戻してほしい。

「残る三つの欠片のうち一つくらいは捕捉してるでしょ？ その人間をこつちに連れてくるか、スグルくんを連れて向こうに行くか……どっちの方が簡単？」

「どちらも似たようなものですが、彼女を抑え込むための戦力という点では向こうでやる方が有利でしょう」

「そうなの、と頷く。その人はきつと有能な魔道師なんだろう。

「分かった。残る二つも探すようにあつちに伝えといてちょうだい。……必ずスグルくんの協力を取り付けるから」

「畏まりました」

「L様の機嫌如何で地球が滅びる——混沌の海へ帰ってもらうために協力してほしいと僕に説明しないといけない。

それに『うずまき』で魔王の欠片だけを抽出できるのかはやってみないと分からないし、会ったばかりの相手から「咲良ちゃんは異世界の創造主で、うっかり機嫌を損ねたら地球が滅ぶ」なんて言われたところで僕は半信半疑だろう。お試して異世界に連れていけば信じるだろうか？

信じてほしいし、協力してもらいたい。だって欠片と宿主がくつついた状態でも欠片を取り込めないことはないんだけど、その場合、リタは宿主を食べねばならない。

ちなみにリタはカニバリズムの嗜好なんて持ってない。

ゼロスが闇に溶けて消えたあと、居間の電気をつけて湯呑みや急須をお盆に乗せていく。布巾でテーブルを拭いて、立ち上がる。

タイムリミットは……あと十五年くらいだろうか？ それまでにシャブラニグドウの欠片を三つ集めて吸収しないと。

——そんなでこちら、仮称スレイヤーズ世界……の精神世界。魔族が生まれ、育ち、住処とするその場所で、中位から上位の魔族たちは上を下への大騒ぎになっていた。

ゼロスがひよこつと帰ってきたと思えば「リタ様が魔王の欠片の保持者探せつて命令をしたよ!」と伝えたせーだ。

「あの暴食の魔王リタ・ギニョレスクが帰ってくるのか!? そんな、俺たちはもうおしまいだ」

「あの女のことだ、異世界の全ての生命を食い尽くしたに違いない……」

「適当に千人くらい人間を集めてあつちの世界で繁殖させればしばらくは帰つてこないでしょきつと。定期的に輸出しましょ」

「終焉の始まりだ——魔族の存在意義としてはいいことなんだが、リタ・ギニョレスクに食われて消えるのは勘弁」

嘆く者、考察し始める者、解決策を提案する者、そしてまた嘆く者。

魔族は世界の滅亡を望む存在ではあるんだけど、自分の滅び方は選びたい。

世界と一緒に滅ぶ——最高じゃね?

世界の破滅に巻き込まれる——悪くないね。大将、おかわり。

リナインバース大暴れ期みたたく、作戦の途中で邪魔される——ふざけんな貴様が死ぬ。

リタ・ギニョレスクに踊り食いされる——お前に人間の心はないのか！ やめてください！ 無理です！

リタが聞いたら「好き勝手言ってくれちゃって、あんたたちから食ってやってもいいのよ？」とキレてもおかしくない言い様だ。

だけど魔族の感覚からしたらリタに吸収されるのはタンノくん丸飲みされるよーなものなのだ。いくら自殺願望があるうが死ぬならポックリ痛みを感じず死にたいのが普通であって……タンノくん丸飲みされて窒息死は生理的に無理でしょ、とゆー。「みなさん落ち着いてください。なにも今日明日すぐリタ様がこちらへ帰ってくる訳じゃありません。竜王たち神族を圧倒するため、残る欠片全てを安全な場所で吸収しようと考えていらっしやるのです」

ゼロスが説明を繰り返したおかげでどーにか混乱は収まったけど、今度は誰が現場に出るかで押し付け合いが始まった。

地球は性癖がヤバイ世界なんだろう、前にゼロスが報告してたから知ってるんだ。特殊性癖と特殊性癖でバトルしてるよーな世界なんだってね。その住人の相手なんて絶対にごめん被る。

ゼロスが持つて帰ってきた薄っぺらい絵本読んだら泣いちゃったよ。あんなのつてないよ。

——白蛇のナーガがあんなビキニアマー……ビキニと肩当てだけの格好で町から町をウロウロできたのはスレイヤーズ世界の皆様の性癖が健全だからだ。だからママは子供に「(変態だから)見ちゃいけません」って注意するだけだったし、スケベなヤツが鼻の下を伸ばす程度のことです済んでいた。

お前を強姦するから卵を産めとりナに要求した魚類<sup>フィッシュ</sup>? ほらあれは特殊性癖じゃなくて種族の違いだから。

ゼロスの報告を聞き知ってる魔族たちにとって、地球人は「なんでもスケベに繋げる恐ろしい思考回路の奴ら」だ。

腐女子のことを「なんでも掛け算する恐ろしい生き物」と怖がる前に、地球人……特に日本人は我が身の性癖を振り返った方がいい。他人から見れば目くそ鼻くその可能性もある。

仮にも彼らは中位や高位の魔族だ、魔王の欠片だけ取り出せる可能性がある凄腕魔道師には興味があるし、そんな魔術を使えるなんて珍しいから見てみたい。——けど、それは地球人なのだ。もしそいつと顔を合わせたら、そいつのおぞましい想像で好き勝手に穢され、脳内であーんなことやこーんなことをされる……かもしれない!

そいつと会うくらいなら今すぐ滅びてやると自殺未遂者まで現れた結果、シャブラニグドウの腹心五人のうち存命の三人……の直属の部下たちが、地球から来る予定の変

態・スグルIIゲト一の対応に当たることでは決まった。

嫌だ嘘だあと頭を抱える霸王と海王直属の部下のみなさんに、獣王唯一の直属の部下ゼロスはにっこり微笑む。

「一緒にがんばりましょうね♡」

——実は、ゼロスが地球から持ち帰る報告書は二部ある。一部は彼の上司である獣王に渡す「客観的事実」のみ記したものだ。もう一部は地球のアレなところを濃縮し羅列したものとその参考資料<sup>R18とうじんし</sup>。

実際にはリタ・ギニヨレスクはタンノくんではないし、食事と娯楽を与えていれば大人しいし、魔王としての自覚をうつつすながら持つている。多くの魔族が考えているよーな「魔族の活け作りを食い荒らす特殊性癖の持ち主」ではない……けど、彼らがそれを知る必要はない。勝手に怖がって近寄らずにいてくれればいい。

そうすれば、封印されていない自由な身の魔王が最も信頼する側近は——ゼロスと、ゼロスの上司である獣王になる。まあ、今頃リタがまともな感性を持つていると知ったところで遅すぎるのだけれど。もし今からリタに媚びたところで霸王と海王の地位は獣王より——ゼロスより更に下になる。

地球への道ができたとき、配下を一人でも送れば良かったのだ。そうすればリタとの繋がりが持てた。リタから信頼され、命令を貰うことができた。

魔族に寿命はあつてないようなものだが……千年の積み重ねのあるなしは大きい。  
ゼロスはくつりと嗤った。  
これから楽しくなりそうですね、と。

## その19

『山』に泊まった翌日の朝食のあと、リタから「スレイヤーズは知ってる？」と聞かれて僕はもちろんと頷いた。ついこの間、伏黒家のめぐくんが重破斬を唱えよーとしてパパに止められていたらしい――

「いいか恵、それは必殺技だ。必ず相手を殺す技と書いて必殺技と言うんだ……分かるな？」

「分かった！ 闇よりもなお暗き存在<sup>も</sup>」

「待てなんでパパに撃とうとするんだ」

「パパを倒したらママがぼくと結婚してくれるって言った！」

伏黒家に家庭崩壊の危機勃発、と硝子が教えてくれたのを思い出す。どうせアニメの呪文だし、めぐくんは噂によると投射呪法の使い手。言霊を使えるわけでもない。そこまでカリカリしなくていいだろーに、と二人で笑った。

「なるほど、主要登場人物や用語は分かっているのね。そりや良かった」

うんうんと頷いて、リタは言った。

「実はあたしスレイヤーズに出てくる魔王なの」

「はあ……つまり？」

「主食が他者の負の感情ってことよ」

残念な厨二の人もとりた曰く彼女は負の感情を食べて生きる魔王で、およそ千年前に地球にやってきたのだとか。

彼女の頭は大丈夫なのか、とゆるい隠しきれない疑心が伝わってしまったらしい。リタは快活に笑った。

「ま、信じられなくて当然よ」

「あ……いえ……」

とつさに否定したけどそりゃ、信じられるわけがない。それにスレイヤーズの魔王はシャブー——シャブなんかのはず。リタ・ギニョレスクなんて名前は聞いたことがない。

それが顔に出てたんだらう、リタはうんうんと頷く。

「最初はさ、ちゃんと説明してやれば小学生でもあたしの話を理解できるんだからスグルくんも大丈夫だろ、って気楽に考えてただけ……。要素だけ抜き出してみたらあたしの身の上って『漫画から漫画を渡り歩く最強オリ主多重トリップもの』なのよね」

「はあ」

なんだ俺つえー系オリ主設定だつて自分で分かてるんじゃないか、とゆるい言葉は

どーにか飲み込んだ。

「で、そーゆーウェブ小説読んでるヤツほどあたしの話をちゃんと理解できないよな、と  
昨晚寝る前にハツと気づいたわけ」

「はあ」

「とゆーわけで」

リタが顔の横で手を叩いた。さつきまでと一転して固い声で「ゼロス！」と——ゼロ  
ス？

ぬるりと何もなはずの空間から傑の隣に現れたのは、伏黒家のテレビや原作の挿し  
絵で何度も見た顔の男。艶のある黒髪はおかつぱで、糸目、裏のありそーな笑顔。

「ヤン」

再現度が高いコスプレかと口を開きかけたところで肩に手が触れて、そして——

目の前に現れたのは物凄く嫌そうな……嫌悪感を隠しもしない表情をした四人。い  
や違う、四人が現れたんじゃない。傑が移動したのだ。古代ギリシャの神殿っぽい建物  
だ。一定距離ごとに立つ石の柱は太く、少なくとも十メートルはある。天井には絵はな  
いけど竜やらモンスターやらがモチーフなんだろう彫刻が一面に広がってて、日が差し  
込んでないし灯りもないよーに見えるのに全体がぼんやりと明るい。ひんやりと肌寒  
いのは一瞬前までこたつでぬくぬくしてたからだろうーか。

こんな神殿が現存するなんて聞いたことがない。ここはどこなんだ？

手足になる呪霊が一体もおらず、呪力を回して防御力を高めることしかできない傑の耳に、石田○の声が囁いた。

「ようこそ、スレイヤーズの世界へ♡」

「はっ。」

ぎよつとして振り返れば黒い錐が宙に浮いていた。鋭利な先端が傑の顔のすぐ横にある。

「原作を読みアニメも見ているなら」

黒い錐が一瞬で人間の姿に変わる。

「ご存じでしょう、僕のことを」

ご存じでしょうも何もゼロスはスレイヤーズの主要キャラの一人、知らないわけがない。

これは幻覚か——そんな雰囲気はなかったけど領域に引きずり込まれたのか？ 呪

力なんて全く感じなかったのに。警戒を強める傑の背中をゼロスがゆつくりと押し、嫌そうな顔の四人の方へ歩かせる。

コスプレにしか見えないファンタジックな格好の四人のうち三人が男で、一人が女。

男の一人は髪は表面がぬめぬめして見える深紫だ。はつきり言ってコスプレイヤーに

しか見えない。

「縛こ薙い」縛こ後つせ縛グ綱ルオ？ 昂ゲ綱ト医イ？？」

「隕見九タ◆譚感盜シS縛ハツ譎フヨ驟ウ壹ノ？ 莠莠コ鬚問薙だ□縛が」

「縛ヤ？ ▲縛リア縛嫌雁嫌オ後ハ邁タ√？ 慍地逅球？ ココ縛ヨ透あク審い九て→縛ん薙ん※」

四人がお互いを肘でつつき合い、聞いたことがない言語で何やら言い争い始める。傑は後ろを振り向かずゼロスに訊ねた。

「あの、彼らは何と？　そしてここはどこなんですか」

「……おやおや。失念していました、言語が違いましたね」

ゼロスは「困ったな」と全く困つてない笑顔を浮かべる。

世界が違えば言葉も異なる。傑が魔道師なら混沌の言語を共通語にできたかもしれないけれど——どちらの言葉も使えるゼロス以外、二者を繋げられるモノはない。

二歩進んでゼロスは傑の前に出る。

『彼にはこちらの世界の言葉が通じませんし、滞在中ずっと五人で囲むのは流石に威圧し過ぎでしょう。僕が案内役として彼につきまますので、みなさんには欠片の持ち主の輸送等々をお願いします』

『りよーかい』

『直接地球人と会話するなんて怖気がする。是非そうして』

『あと、彼には今から色々と説明をしないといけないんですよね。欠片の持ち主は……  
そうですね、三時間後にここへ連れてくるということでしょうか？ それまでは  
別行動で』

『三時間後か、分かった』

『たのんます』

この場を離れたい霸王と海王の部下ら四人にそれを認める旨の声をかけ、ゼロスはコミカルな動きで傑を振り返ると日本語に言葉を切り替える。ちなみに四人は文字通り逃げるようにして傑の前から消えた。

「では改めまして。初めまして、僕はゼロスと言います——君の知る、スレイヤーズに出てくるキャラクターの一人。……なんて言うともタ発言っぽくなってしまいますかね？」

「はあ……」

大袈裟な動きで胸に手を当てて腰を軽く折る。人の姿では傑の方が背が高いからゼロスが傑を見上げる形になった。

自称ゼロスは名乗ったとーり、スレイヤーズに出てくる胡散臭い魔族・ゼロスとそっくりだ。ラノベの挿し絵やアニメで見たとーりの格好だし、ゼロス本人だと信じてしまいうレベルで似てる。

「そしてここは君が知るスレイヤーズの世界です。案内しながら説明しますから、とりあえず外に出しましょうか」

「まあ……分かりました」

傑は自称ゼロスの言葉に頷いた。消えた四人は傑に汚物を見るよーな目を向けてきてたけど、自称ゼロスの顔に嫌悪感はない。

とりあえず自称ゼロスに付いていつてみるべきだろう——ここがどこであれ、目の前の男に害意はなさそーだ。今は従っておこうじゃないか。

促されるまま神殿の中を歩き……階段を登り、砂漠に出た。じりじりと日光が地上を焼き、砂漠の表面はゆらゆら揺らいで見える。

これは日本じゃないな。日本にはこんな赤い砂漠はないし、太陽は漂白されたよーに白い。

これで、ここが領域ではないことが分かった。領域ならもつと範囲が狭いし、寒い屋内から砂漠に変わるような景色・環境の変化はない。一瞬で外国に連れ去られたのか——瞬間移動の術式だろーか？

「砂漠は広いですから、少々失礼して」

「へ？」

そー言つて脇を抱えられ——傑は空を飛んだ。

「うわっ!？」

見る間に遠ざかる地表、ぐんぐんと後ろに去っていく地下神殿の入り口。

傑は今、ファンタジーを体感していた。

空の旅は昔話と共に行われた。

——『山』にいる、赤毛に赤い瞳の女ことリタ・ギニョレスクは魔王シャブラニグドウの欠片をその身に宿して生まれた。他の宿主と彼女が違ったのは一点……自分の魂の形を知覚していたか否か。

自分の魂に貼り付いた異物が魔王の魂の欠片だと分かる前から、彼女はそれを自分に取り込むために動いていた。その異物が巨大な魔力を内包したモノであることは分かっていたから……それを吸収できれば強くなれると考えたのだ。

果たしてリタ・ギニョレスクはシャブラニグドウを飲み込んだ。レイニマグナスやルークみたいに魔王と混ざるわけでも共存するわけでもなく、自分の一部として取り込んでしまった。

それは魔族にとって信じがたい出来事だった。人間は魔族より劣る存在。普通の人間は逆立ちしても魔族に勝てない——リナインバース一行みたく魔族をバンバン倒す人間は例外中の例外で、千年に一人いるかないかの激レアさんだ。

そんな弱者であるはずの人間の一人が、七分の一の欠片とはいえ魔族の王たるシャブ

ラニグドウを吸収した。

想像してみてほしい。ふだん食卓に並んでいる物——例えばサンマが「人間って美味しいのかな」とか言い出して食卓の主人を喰い殺し、巨大化してゴ○ラかキング○ドラになり「これからは私が捕食者だ。ふはははー！」とか高笑いしてみる。B級サスペンスホラー映画が現実になったのだ、この世を憐む魔族が現れるのも仕方ない。魔王ですら喰われたのだから、そこらの魔族なんて食後のデザートだろう。

リタ・ギニョレスクはやばい。——格上の同族以外から感じた身の危険、我が身が被食者になる恐怖。縦の繋がりがないと全く協力し合わない個人主義の魔族たちはこの時ばかりは手と手を取り合い、リタ・ギニョレスクをスレイヤーズ世界の外へ放流するという目標に打ち込んだ。

へー、地球で生きた記憶があるの、それでお故郷に帰りたいのね。良かったねえ母星が見つかって。さようなら二度とこっちに来ないでね。

「多くの魔族にとつてリタ様は、人間の皮を被った外宇宙からの侵略者、人型のブルーギル、ハリガネムシ、その他色々。……まあ、悪評しかありませんね」

他にもゼロスが持ち帰る報告と資料のお陰でリタには「最終鬼畜変態」やら「悪趣味界の王」やら「変態性欲」やらとゆー悪評が広まつてるし、地球人全体は性的異常者の集団だと思われてる。けどスレイヤーズ世界の言葉を知らない傑がそこまで知る必

要はないから安心してほしい。

傑が知ってればいいのは二つ。一つ目はリタ・ギニョレスクの紹介である傑が魔族から馬鹿にされたり嫌がらせされることはないという事。でも嫌がらせされないだけで仲良くなれるわけじゃないので注意。二つ目はリタが魔王の欠片を集めて取り込みたいと考えていること。

「どうしてあの人は自分の他の魔王の欠片を取り込みたいんですか？」

当然出るだろうと想定してた質問に、ゼロスは誤魔化さず答えた。

「こーゆーときは煙に巻くより身内として巻き込む方が話が早いのである。

「地球にL様がちよつかいを出し始めてましてね。L様に平和裡にこの世界へお戻りいただくには現在の状態では力が足りないんですよ」

スレイヤーズ世界のパワーバランスを魔族に傾け、数千年間停滞していた世界を破る。もちろんそーなれば多くの人が苦しむし死ぬだろう。それでもその方がマシなのだ。

「L様という『金色なりし闇の王』？」

「ええ。……不思議に思いませんか？ 何故五条悟は竜破斬を唱え、魔術を発動させられたのか。それも混沌の言語で唱えたのではなく日本語で唱えたんですよ。原作の設定ではそんなこと出来ません」

五条悟が竜破斬を撃った跡には残穢がなかったでしょう、あれが呪術だったと今も思っているんですか？ 君が五条悟経由でリタ様から貰った手甲の素材が何なのか——呪装螺旋丸の跡に残穢がほぼない理由を考えたことは？ 滅多に休日がない身の上なのに、五条悟は伏黒甚爾に課外訓練をお願いしている——それはどうしてでしょうね？

昨日聞いたばかりなのにもうお忘れですか？ 伏黒甚爾は……リタ様の養い子です。リタ・ギニョレスクは地球における魔王シヤブラニグドウ本人、だから日本語で詠唱が通じるんです。呼び掛ければ聞き届けられるのです。

次々並べられる言葉に傑の心が揺らぐ。

「L様がリタ様同様、日本語による呼び掛けに応えるようになればどうなるか分かりますか？」

今のところ地球に『生まれつき魔力を持った人間』はいませんが、これからL様の影響がどのような形で現れるか分かりません。地球で神族と魔族が発生したり、生まれつき魔力を持った人が増えるとか——何の気なしに唱えた呪文が力を持っていて人を傷つけてしまう、なんてことが起きるかもしれませんね。

傑の耳元でゼロスが囁く。

「リタ様はL様が地球に滞在されることを望んでいません」

お帰りいただくには力が必要ですが、今の七分の一ではどうしても足りない。でも貴方の『うずまき』なら宿主から欠片を抽出しうる。貴方にしか頼めないんです、あなただから頼みます。

「ですから……手伝っていただけますよね？」

傑はふわふわした頭でウンと頷いた。傑の目の前には白い城壁に囲まれた大都市がある。アニメで見たのと全く同じ——六芒星の都市、セイルーンシティ。それを上空から見下ろしている。

一目で分かる魔術の世界が、広がっている。

ゼロスは傑を抱えたまま「有難うございます！」とはしゃいだ声をあげた。

「貴方のおかげで地球が救われますね♡」

『うずまき』がどのような術かは知らないが、魔王の欠片を抽出された者はどうなるのか……まだ分からない。

何事も起きず無傷で解放できるかもしれないし、死なせてしまうかもしれない。——地球人の、特に日本人の心は脆い。人の死が身近な呪術師でも、人を死なせることを忌避する傾向がある。

だが、大義があれば変わる。傑の行動により救われる数は六十億人で、失われる数はたったの三人なのだと囁けばいい。『私しか世界を救えない』という張りぼての大義が

あるだけで、人は人を躊躇なく殺せるのだ。

「私が……地球を救う……」

ゼロスの言葉を繰り返した傑に、にっこりと笑みを浮かべる。

「そろそろ神殿を出てから二時間半くらいになりますし、戻りましょうか」

空の旅は来た道を折り返す。『うずまき』が役に立つのか役に立たないのかは——三十分後に分かるのだ。

## その20

傑くんが富士見ファン○ジアナ世界でほぼ不死身の魔族とファンタジー体験——マジカルパワーでお空を飛んで、せっかくリアル魔導師に「くっ殺せ！」って言われたのに言葉が通じないせいでキョトンとして、魔王シヤブラニグドウの欠片の抽出成功にバツタみたくピョンピョコ跳ね回ってたそんな時。呪術高专東京校の校舎正面出入口前に黒塗りの外車が止まった。

朝礼とゆーには遅く、昼休みには早い。そんなでもって今日は平日じゃない——そんないやーんな曜日のびみよーな時間にわざわざ校庭に集められた休日の在校生はみんな、仲良く顔を見合わせる。一体何が始まるんだ、お前知ってる？ うんにゃ私にもさっぱり。せっかくの休みになんなのか。

後部座席のドアが開き、中からによつきりと袴を穿いた脚が生えた——現れたのは禪院家当主だ。

当主より先に車を降りていた、京都校の在校生であるはずの禪院直哉が朝礼台の隣に走る。

「東京校生、総員傾聴！」

そして拳を背中に当てて胸を張り、整列なんてしてゐるワケがない東京校生に声を張り上げた。いきなり何言ひ出すんだコイツとゆゝ目もなんのその、ゆつくり台の側まで歩いてきた禪院家当主に頷く。

大きく頷きを返した禪院直毘人はカツンカツンと金属板を靴底で叩く音を響かせながら朝礼台に上り、腕組みして東京校生を睥睨した。

「儂は禪院家当主、禪院直毘人である！」

そんだけゆゝと、朝礼台を下りてつた。それには在校生、そして呼び出された教員全員ずつこける。

「塾長挨拶かよー！」

「あは、にあわねー」

先日二人だけになつた三学年は思つたことをすぐ口に出しちやう脳と口直結型人間なので、もちろん整列してないし態度も悪い。

当主と同じ術式を持つて生まれた次期当主候補筆頭、禪院直哉は五条家のボンたちの発言に盛大に顔を歪めた。

「しゃーないやん、京都校はネタが分かる子おほとんどおれへんし。どーせならネタが通じるところでやりたいーゆゝてな、ほれ、アニオタ甚爾クンのおる東京校なら通じるやろ？」

そりゃ、「伝統と血統を大事にしていますねん、うち」とすまし顔してる京都校でギャグマンガのネタなんてできるわけもない。直哉は例外だ。

「えへん。ここに集まらせたのは他でもない。貴様らには、先日我が家を襲撃した呪詛師・夏油傑に代わって我々に弁償をしてもらおう」

「あいつの連帯保証人になった覚えはないんですけど。請求は夏油傑本人にしてください」

「そーそー。俺らに言われてもねー」

「はわわわ……」

態度が悪い三年に対し、これまでほとんど三年生と交流する機会すらなかった一年生の伊地知は可哀想に涙目だ。

「呪詛師夏油傑の襲撃により我が家は半壊した。——儂が集めてきた諸々も、半分以上が破壊された」

禪院直毘人は晴れた空を見上げ、そして視線を伊地知に向けた。可哀想な伊地知はガクガク震えてるんだけど、一年と交流が薄い特級さとるくん術師はそれを放置した。先輩なのに。禪院が来るからってグラウンドに呼び出された体育教師とうじくは鼻に小指を突っ込んで知らんぷりだ。教師なのに。

「おい、銀の力と言えばんじや。そこのいかにも陰気なオタクっぽい一年、答えろ」

「えっ……せ、制汗剤……ですか……？」

確かに銀イオンの力で臭いの原因を抑制するスプレーはある。数年前から薬局に並ぶようになった。

「バカもん！ 銀の力と言えばシルバ○仮面じゃろーが！」

七十一年放送の特撮なんて気弱少年伊地知くんが知るわけがない。理不尽に怒鳴られた伊地知くんは顔色がもはや真つ青だ。ちなみに光二がシルバ○仮面に変身するための力は正確にゆーと『銀色<sup>シルバー</sup>の力』。ちよつと違う。

「シ○バー仮面をはじめとする特撮の、昭和平成ライダーたちを録画したVHSが、DVDが、補修不可能なほどに壊れた！ あの呪詛師のせいでじゃー！」

「傑が襲撃したときオッサンたち嬉々として暴れまわってたって報告受けてんだけど」  
禪院直毘人は悟の発言をまるつきり無視した。

「そこで、貴様らには今日まん○らけ等の古本屋を巡り、今から配る書面の品目を探してもらおう。むろん支払いは貴様らの財布からじゃ」

「なにその報復方法、けち臭っ」

「学生の貴重な休日と資産を奪うとか糞か？」

「やっぱ呪詛師って糞なんだな……」

上級生が文句をさええずる影に隠れて七海もぼそつと呟いた。

可哀想な伊地知はまだ実力が足りないのとたった一人の一年生とゆーことから、任務に就いた回数が少ない。金満上級生とは事情が違う。ほとんど関わることのなかった上級生のために貴重な休みだけでなく貴重な貯金すら奪われるなんて、どー考えたっておかしい。おかしいけど、伊地知のためにそれを指摘してくれる上級生はいなかった。

配られた用紙は三枚にわたり、フォントサイズも上下左右の余白も小さい。伊地知はそれぞれの想定価格を見て小さく悲鳴を上げた。どれを見ても安くて二万、高いものは百万に届く——いくらなんでも無茶苦茶だ。

「おい、おっさん」

「なんじゃ」

と、これまで無関係のふりしてた伏黒甚爾はよーやつと教員の自覚を取り戻したのか、右肩を前へ押し込むようにずいと進み出た。直毘人と甚爾は叔父と甥の関係、面識はもちろんある。一緒にアニメを見たこともある。

「この参考価格つてのには疑問がある。こりゃー公式が販売したやつの未開封美品の店頭価格だろうが」

「もちろん。未開封レベルの美品以外受け付けん」

「アホ抜かすなこの糞じじい」

一覧には三十年やら四十年前やらの特撮やアニメまで含まれてる——未開封美品な

んで存在するのか？ マツハGOGOG〇とかはテレビで放送されたのを録画した分のよーだけど……数カ月前にタツノコ〇〇口五十周年記念ボックスが発売されたんだからそれでも買って我慢してほしい。お宝の近くで暴れた自分を恨んでくれ。

あと、万が一（公式が販売した）未開封の美品VHSがあつたとすれば、それは気違いの名を与えるべきコレクターのお宝中のお宝だ。そいつが死なない限りそんなものは市場に出ない。

でも実際のところ、コレクターが死んでもお宝は市場に出ない。ハゲ鷹のよーなコレクター仲間が「故人は『死んだら君にやる』と約束してくれました」とか真偽の疑わしいことを言いながら持つていってしまうからだ。流通価格十万だとか百万だとかゆー資産を遺族騙くらかして持つてくんだから『コレクター』ってやつはほんとーに信用ならない。コレクターを親族に持つてる人はちゃんとコレクシヨンの市場価格を一覧にさせることをお勧めする。でないとその人の死後に二束三文で売っちゃったりする可能性があるからね。

ちなみに禪院家は『信用ならんコレクター』の最たるものだ。禪院のご先祖さんはみんな、他の術師の家系が滅びそうになるとそこから奥さんを迎え、「（お宅の当主が）死なはつたなら、お宅の相伝とか呪具とか全部ウチのもんですわ」とかなんとか言つて香典泥棒を繰り返してきた。さすが禪院全員汚い。すごく汚い。

だから禪院一族が多種多様な術式を持つのも、禪院の忌庫が他の二家を大きく引き離して多くの呪具を納めているのも、禪院のご先祖様がクスでコレクターだったお陰。――禪院家はオタク・コレクターの氣質を数百年かけて醸成し磨き上げたオタクもといお宅だから信用しちやいけない。

「市場に流通してないものを寄越せ、それじゃなきや受け取らないっつーのは無効だ。こっちはクソ忙しいってのに……京都に帰れや」

「そーだそーだ。休み潰しやがって。そっちこそ俺らの休みを賠償しろよ」

「同感」

悟や硝子は「休みが潰れた」「休みを返せ」とかなんとか騒ぎだしたけど、実は今日は休日であって休日じゃなかった。学内一真面目な優等生（○）で知られた夏油が呪詛師に堕ちたことから、急きよカウンセリングが行われることになってたのだ――だから別に禪院に呼び出されたせいで休みが潰れたとゆるわけじゃあない。東京校に所属する生徒は全員校内にいたし、教員もカウンセリングのため休日出勤。

甚爾は虐待受けてた双子を預かっていることから休日出勤の予定じゃなかったんだけど、禪院の当主が来るからストッパー係りとして呼び出された。

「……かえりてえ」

禪院の当主――血の繋がりのある叔父に対し、伏黒甚爾は欠片も関心がなかった。

だつて数日前に夏油が伏黒家へ押し付けてつた双子は今も「夏油様に捨てられたあ」とか「夏油様どうしていないの……」とか言いながら泣いているのだ。損害賠償云々と騒ぐウザい身内と、痩せ細つていかにも可哀想な双子ちゃんを天秤に乗せたら、誰が見たつてどー考えたつて双子の方が重要。双子の乗つた皿が下がる。

なお、双子が恋しがつてる夏油様もといドロップアウト青年ゲトーは京○電車の御殿○駅で悟と口論して近隣の腐女子に話題を提供したり、子連れの元人妻にクラクラしたり、異世界でリアル魔道師から「くっ殺せ！」とか言われたり、地球を救う使命に酔つたり燃えたりと、忙しくも楽しい日々を送つてるんだが、幼女たちはそんなこと知る訳もない。嘆き暮らしてゐる幼女を放つて遊び回つてる夏油、全くひでえ野郎だ。

「え、甚爾クンおウチに戻るん？　ほんならボクついてこつと」

「はあ？　なんでお前なんぞうちに連れて帰らんなんねん。帰れ帰れ、京都帰れ！」

「えー？　だつて甚爾クンの子供ボクとおんなじ術式ねやろ？　もし気に入つたら弟子にとつたつてもええよ」

「誰が『お前と同じ術式』や、めぐの術式はお前のはちやうわ。お前なんぞうちのめぐが一緒なわけがなかるうが。それにたとえおんなじ術式やつたところでお前には絶対に任せんわ、そのクソにクソを二乗倍したよな性格がめぐに移つたらどないすんねん」

「んー……甚爾くん、あんたバカあ？」

地元の言葉にうっかり釣られて関西弁で嘯みついた甚爾に、『家族愛って何ですのソレ』とゆー御三家の子息は呆れ顔でネタに走った。——自分にとって利用価値があるかないかで人を判断する。そーゆー環境で育ち成人した直哉には、甚爾が直哉を拒絶する理由が分からない。直哉と恵が同じ術式を持つてゐるなら恵は直哉に師事するのが一番の近道……せつかく直哉がやる気を見せているのに、個人の好き嫌いでそれを断るなんて馬鹿じゃーなかるーか。

「バカで結構コケコッコー。うちの子に手出したらただじゃ済まさんからな、これはフリとちやうぞ」

「おー、わ」

——直哉は甚爾と関わったことなんてほとんどない。理由は年が離れてること、甚爾がもう二十年近く前に家出した身であること、そして甚爾が呪力を全く持たないこと。千年続く名家である禪院家の中で、呪力無しのゴミと交流しようなんて者は全くない。幼いうちから当主と同じ術式を発現していた直哉と呪力無しの甚爾が向かいあつて話したことなんて片手の指ほどの回数しかないのだ。

『山』に目をかけられていることで甚爾の重要度は上がったとはいえ——呪力がないやつに価値はない。禪院家において甚爾はアンタツチャブルだ。

甚爾は可哀想な伊地知を置いてきぼりにしてグラウンドを離れ、死ね○ね団のテーマを歌いながら寮に戻る。禪院直毘人と五条悟の喧嘩は学長が止めるだろう、きつと。もしかしたら。

甚爾を家で待つのは料理が上手い奥さんと可愛いちび二人、そして美々子と菜々子。優しくドアを開けて、高めの声で「ただーまー」と言いながら我が家に首を突っ込む。コタツむりになってる幼女たちがぎよろりと大きな目で甚爾を見やった。その横で小学校の宿題をしたためぐくんがぱつと表情を明るくする。

奥さんと咲良ちゃんはソファで昼寝してるよーだ。

「おとーさんお帰りー」

「ただいまあ」

顔が怖いけど優しい。パパさんに、美味しいご飯や温かいお風呂を用意してくれるママさん、同じ年かそこらの親切な男の子、ちっちゃくて可愛い赤ちゃん——美々子と菜々子は少しずつながら伏黒家に打ち解けてきていた。ほんとーに少しずつだけ。

双子はまだわたしの救世主さまを恋しがって泣くことが多い。でも人は慣れる生き物で、一緒に過ごせば親近感も湧く。

「パパさん……おかえり……」

「……おかえり」

菜々子と美々子がぼそぼそと挨拶したことに、甚爾は優しそーに見える笑顔を浮かべる努力をして「うん、ただいま」と返事した。歩み寄ろうとする二人が嬉しかったけど、テンション上げたらまた心の距離が開きそうだ。

「お仕事終わったぞー。ママと咲良ちゃんも寝てるみたいだし、どうする？ めぐの宿題終わったら轟○号乗るか？」

甚爾は靴を脱ぎ捨てて玄関すぐ横の洗面で顔と手を洗い、三人に屋外での遊びを提案した。双子を家の中にいさせたらキノコが生えちゃいそーだもんで。

即座に「乗る」と手を上げためぐくんは「すぐ宿題終わらせるから！」と小声で叫んで真剣にわら半紙と向き合い、双子は顔を少しのあいだ顔を見合わせてから頷いた。轟天○は名前こそゴツゴツしてるけど何の変哲もない自転車だ。ちよつと手を加えてるせーで公道を走れないけど。

道路交通法や都道府県の規則では「荷台や籠の左右十五センチを超えて荷物がはみ出したらいけません（※東京都）」って決まってるんだが、轟天○はその規則に違反している——なんせ後ろの荷台に長い板をくくりつけてあるのだ。

離れたグラウンドから爆音が届くなか、寮の周囲には自転車の後輪の上にくくりつけた板の左右に座る双子と甚爾の背中に貼り付いた恵の笑い声が響く。

「よー、ごれー、ちまーあー、かーなーしーみにー」

甚爾と一緒に歌うめぐくんの持ちネタは、九九だ。

## その21

うずまきで抽出した魂の欠片を手に「だあいせえこ〜！（c v 栗田〇一）」と地球に戻ってきた夏油は今、正体を隠すスーツに身を包み、この世の悪と戦っていた。

悪を見つけるのは簡単だ。先ず、名字が禪院であること、ふてぶてしそうな顔をした男であること——この二つを満たした者は間違いなく悪の手先なので、夜闇に紛れて襲撃しても許される。悪は討つ、それが正義だ！ やり方が良いも悪いもないのだ！

夏油は禪院の男を路地裏に引きずり込んだ。

「なんだ貴様ツ俺を軀くくを留隊たいの者と知つての狼ぜつ」

無言で殴る。倒れたそいつに馬乗りになってウツウツウマウマ。バルサミコ酔やっぱいらへんねん。

「がっ」

問答無用で殴る。悪の甘言に耳を傾けてはならないですよ！ 屁のつつぱりはいらんですよ！

「おっ」

殴って殴って。

「はい」

殴りまくる。それが私だ！

「おぐぐ」

正義の味方！

しばらく殴つて呻き声すら上げらなくなったその顔に『正義執行』と書いた半紙を貼り付け、最近（拳で）調伏した呪霊に乗つてその場を離れる。

一日に一個善行をするんじゃないやなくて一日に一人ずつ禪院を潰すイチニチイチゼン、今日の自主課題もクリアだ。

——夏油が弱きを助け強きを挫く世直しを始めたのは、この世には数えきれないほどの悪人が蔓延っているからだ。それと『山』にいたくないからだ。

ついこないだ……つて言つても二ヶ月は前のこと。この世を憂えていた悩める青年・夏油くんは悪を浄化するとゆる崇<sup>すう</sup>高<sup>こう</sup>な使命に目覚め、身近な巨悪・禪院に対して「土下座しろ、消毒されてえか」とパンチの利いた喧嘩を売った。なんたら拳ネタだけにパンチが利いているとかなんとか。

それからとんとん拍子で高専をドロップアウトし、えつちな人妻と出逢い、『山』に行き、シャブラニグドウの抽出に成功し、リタにそれをプレゼントし——今は世界から悪をなくすために趣味でヒーローをしてる。夏油は時代を先取りする男なのだ。

真正面からワンパンする真つ当なハゲマントと違って、夏油がやってることは誰が見ても卑怯千万と叫ぶよーな闇討ちだけでも。

で。現在の夏油の保護者である『山』のあの人ことリタは夏油を放置して何をしてるのか？ 実をゆーと、リタはこのところ胃痛で寝込んでいた。原因は食いすぎといえばまあ食いすぎなんだけど、食ったのは料理や人の負の感情ではなく——シヤブラニグドウの欠片。いくら消化吸收に強いリタとは言え一息にシヤブを吸い込んだのは失敗だった。うずまきのお陰でシヤブラニグドウの魂の欠片とは思えないくらいのサイズに圧縮されてたから「こりゃ一息でいけるわ」と簡単に考え、ヒョイパクゴックンと飲み込んだのがいけなかった。

酒も薬物も大量摂取すれば急性中毒になるもんで——シヤブの大量摂取も体に悪かった。魂はグラム換算できないのだが、例えるなら、リタは自分の体重の九割くらいの量の肉を一度に食べたようなものだ。消化が追い付くわけもない。

テレビから這い出る貞子よろしくあーだのうーだのと唸りながら家の中を這いずり回るリタと同じ空間にいたくなかった夏油はえっちな人妻みーつきちゆわんのところみーつきちゆわんに逃げた。だって怖いんだもん、呪霊と違って倒せないし。

その際の手土産になったのは御三家からリタに捧げられている供物……一般市民には手が出せないよーな高級食材だ。消化不良で半死半生のリタが人間の食事をできる

わけもないし、私が有効活用してやろう。有り難く思ってくれ——腐らせるよりマシだ。

訳あつて物納しかできないんですが、タダで泊めていただくのは心苦しくて……、食べていただければ食材も喜びますから、云々。貰い物を右から左に流してただけの癖にいけしやあしやあとそんなことゆうんだから、夏油の面の皮の厚さが分かるうとゆうもんだ。測つたら五センチくらいあるんじゃないか。

お高いお肉に喜んだのは宗介くんだ。子供とゆう生き物は金額で満腹感を得ない生き物だから、控えめにちまちま食べてる母親と祖父なんて見ちゃいけないし気にしてもいいない。ひたすらに肉あなただけ見つめてる、肉でハイテンション。美味しいから仕方ないね。玉ねぎも甘くて美味しいから食べてみない？

そんな風に餌付けしたことで、宗介くんの夏油に対する好感度は爆上がりした。夏油が週に二三度の頻度で武田家に行く度にダッシュで飛び付いてくるし、目をキラキラさせながら「ぼく僕にーちゃん好きだよ！」とアピールしてくる。

将ママを射んとすれば先ず馬むすしを射よ、とゆうことか？

——高専を飛び出してから、親切で温かい武田家や、武田家に通ううちに仲良くなつた武田家の向い——野良猫のパラダイスと化して居るお宅の老婦人・黒山さん、二軒隣にある築五年くらいの真新しいお宅に住む佐東夫妻とその息子の剛士くん、その他、彼ら

以外にもいっばいのお会いがあった。世間にはまともな人間がたくさんいた。

ただその逆の、クソみたいな人間もたくさん見た。酒に溺れて家族に暴力を振るう者、女子高の近辺に出没しトレンチコートやガバツとやる変態、生徒を指導する立場を利用しハラスメントを繰り返す教師、その他いろいろ。

そこには「非術師だから」「呪術師だから」とゆるいなんてなくて、どの業界にしようがどんな職業適性があるーが、クズはクズだからクズなのだ。夏油は悟りを開いた。なんせ夏油の親友は五条悟、夏油が悟りを開くのは二重の意味で簡単だった。

ダーウインの進化論は語る。生物は自らが生き延び種を残すために、他の生物——特に同種の生物と競争をする。つまり生物は種を残すために生きている。だが……人類に害しかもたらさない奴らは、その存在自体が生物の目的である種の保存に反する。つまり奴らは人類の存亡を左右する敵だ。

人類の敵を倒し人類の生存と安寧を守る。なるほど大義名分はバツチリだ。汚物は消毒しないとイケないし、正義の名の下に嫌いな奴らを成敗できるし、夏油は（ゼロスにもらった）異世界の装備に身を包み、身バレ防止のため顔も包み、夜の街を彷徨った。そんな夜勤を始めて、何週間が過ぎただろうか。夏油は暇だった。

——雨にも負けず、風にも負けず、近畿のこの近辺は雪が降らないから負けるも何もなく、夏の暑さはまだあと数ヶ月後にならないと分からない。

人より丈夫な体を持ち、性欲も人並み以上。「決して傲らない」とは口が裂けても言えないし、静かに笑うことより鼻で嘲笑うことの方が多い。

一日に四合以上の白米と味噌汁と少しの野菜、そして多量の肉を食べる。あらゆることを自分本意に判断をくだし、恩と借りは忘れても恨みと貸しは決して忘れない。

住宅街にあるプレハブ工法の住宅に入り浸り、東に頭が病気の変態がいればそこへ行つてぶちのめし、西にパワハラで疲れきつた社会人がいればその職場に行つて主犯をぶちのめし、南に虐待で死にそうな子供がいればそこへ行つて保護者をぶちのめし、北に喧嘩っ早い禪院がいればそこへ行つて天誅をくだす。

一人の時は友人の夢サイトをひやかし、『山』の中をあちこち走り回つて体力を維持する。禪院から危険人物と睨まれ、当然だけどその行為を禪院に喜ばれることもなく、むしろ殺意をもつて迎え撃たれるようになり……そういうヒーローに、夏油わたしはなりたいたい。

雨二モマケズっぽい詩を捻り出すくらいの暇人らしい。真面目なことについても真面目なことについても、あれこれ考える時間はたつぷりあったということだ。

夏油のヒーロー像と一般的なヒーロー像との間には著しい解離があるようだがツツコミは不在だった。

お気楽極楽で詩作活動ができるよーなニートでストレスフリーな毎日をごしていい、ある夜のことだ。禪院の当主の弟、たしか名前は葬儀だか抗議だかつて名前の中年おうぎ

が夏油の知り合いを——以前東京高専に來た幼女二人を足蹴にしているのを夏油は見てもしまった。場所は禪院家敷地内ながら人の耳目がない裏庭の外れ。

夏油は調伏した呪霊から滑り落ちるようにして禪院家の敷地内に着地。ここから夏油の罪を数えていこう。一つ目の罪は住居不法侵入。でも被虐待幼女を助けるためなので許されるはずだ。逮捕されても不起訴相当。

突如現れた気配に扇は振り向き様に刀を振り抜いたものの、なにせ夏油の装備は異世界製。どかーんだのちゅどーんだのとゆー「爆発落ちなんてサイテー！」な世界で作られた防具が地球産の武器を防げないわけがない。引き斬ることに特化した薄くて脆い刃は悲鳴みたいな音を立てて折れ、空を飛んで飛んで飛んで回って回って回って回る。二つ目の罪は器物損壊だけど正当防衛で許されるかもしれない。斬りつけてきたのは相手さんだし。

「貴様、何奴！」

「通りかかりのヒーローだ。正義を執行するため参上した」

「正義を執行……貴様、このところうちを狙って」

「問答無用天地無用！」

夏油は岡山に宇宙船が落ちるインパクトの一声を放ち、地球には存在しない凄く硬い物質で包まれた拳を真つ直ぐ前に突き出した。自分の殻に閉じ籠って他人と

の会話を大切にしないタイプ。夏油だ、話している最中の他人を殴ることにためらいはない——ヒーローアニメでは忌避される行為ベストスリーに入る行為だが。とゆるわけで夏油の三つ目の罪は暴行。これでうっかり扇を殺したら暴行致死で殺人罪になるかな、でも扇は銃刀法違反の得物を持つてから正当防衛になるかもしれない。

せい少年・夏油は一発程度で満足できない体なので、そのまま六発とかやつちゃうんだ。拳を引いては突き刺し引いては突き刺し、打つべし！ 打つべし！ えっちな意味じゃないよ！

——正義とは何か、正しい行いとは何か？ 少なくとも一方的に他者をタコ殴りにすることではない。しかし、学校で教えてくれる道徳も、日本の刑法も、正当防衛や緊急避難を認めている。

つまり夏油の行為は道徳的にも法律的にも許される。繰り返し同じようなことを言っただけだと思ってもいいが、大事なことなので何度でも繰り返す。夏油の行為は罪にならない。正当防衛なのだ。だから正義だ。

正義の力によって顔の形が変わってしまった扇の上から下り、怯え震える双子の前に夏油は膝を突いた。

「——君たち、私が去ったら大人の人を呼びなさい。突然現れたヒーローにこの男がぶちのめされたと伝えれば君たちに害は及ばない」

「ひ、ヒーロー？　って、何？」

「緋色お……とか？　じゃない？　違う？」

仮面の下で夏油は泣いた。エシテイシほどの強い男でも泣いて感情を制御するんだから夏油が泣いたらいけない道理はない。大声を出すと人が来ちゃうから小声で「あんまりだああ」と泣いた。

「私は世界に笑顔をもたらすため……皆を笑顔にするために世直しをしている。ヒーローとは、世直しをする人のことを言うんだよ」

「世直し……」

「まき知ってるよ！　ウルト○マンってゆるー人がいるんでしょ？　お兄さんもそうなの？」

「そんなものさ」

殴ってくる親より殴らない不審者の方が好感度が高いのか、二人は夏油への恐怖を一瞬で放り捨てた。キラキラ見上げる二人の頭を優しく撫で、夏油は立ち上がる。はやく離脱しないと禪院の者に見つかる可能性が高くなるし、そーなると一日一禪じゃなくて一度で全禪になってしまう。生活の張りがなくなったら困る、間違えた、夏油は堅実なのでじっくりやっていくつもりだ。

「じゃあね」

「またね」

「またきてね」

笑顔で別れたその三日後。夏油が襲いかかった禪院の男は、夏油を指差してこう叫んだ。

「貴様、世直しマンか!」

「なんて?」

夏油は知らない。扇が襲われた件について、呪力を全く持たない真希に聴取はなかった。呪力を持たない者は人間ではないから聴取する価値もない、とゆるくソミたいな判断だ。聴取を受けたのは多少なりとも呪力を持ち、術式も持つ妹の方——真依。

真依は体格の良い軀?留隊の隊員たちや炳へいに所属する術師たちによる威圧的な詰問にてんぱり、こう言った。

「ち、父上を、な殴ったのは、よ……よ、世直しマン?」

世直しとウ○トラマンがごっちゃになった結果だった。そして禪院家当主がアニメや特撮好きだったせいで、報告を受けた当主は「よwなwおwしwまwんw」と腹を抱えて転がり回り「ドウヒーwwその名前で通達を回せwwww」と名前を定着させてしまった——それが夏油の運の尽き。一度定着した名前とゆるーものは後々まで引きずるものなのだ。たとえ別の名前を名乗っても「自称??だが通称は○○」とかつて呼ばれ方

をするのだ。

かくして夏油は太陽系で最初のリアルヒーロー・世直しマンとして、その名を呪術業界に轟かせることとなる。

## その22

リタがシャブを吸ってから三ヶ月とちよつとが経ち——リタ・ギニョレスク、完全復活。他人のシャブをしゃぶったことで魔王としての力はほぼ倍増、できることが増えた。苦しんだ甲斐があつたとゆうもんだ。

「正義のヒーロー活動してますって言ってたけどねえ……」

京○テレビで流される地元ニュースでは、ヒーローを名乗る不審人物が出没している。とゆうアナウンサーの注意が繰り返り返し放送されている。やってることはマトモなんだけど見た目がマトモじゃないから警察も困ってるよーだ。

首から下はいいのだ。いかにもおふあんたじいな装備だから、マナーが悪いコスプレイヤー程度の不審さなのだ。だけど首から上がどーにもこーにも。

夏油は身バレ防止のために頭に晒しを巻き付けてるんだが、これが何よりも問題だった。『山』を出る時には大人しく晒しの中に顔も髪も収まっても……風強い上空を移動する間に晒しが乱れ、直し、また乱れ、直しとゆうのを繰り返す。そして最終的にどーなるのか——志々雄○実と月光○面を足して二で割ったよーな見た目になつてしまふのだ。

指差して笑えるレベルを越えていた。いや、これが他人なら腹を抱えながら指差して笑つただろーけど、じぶんちに下宿してる子がこんな姿で公共の電波に乗ってみろ、全く笑えない。はやくなんとかしてやらないと。

布はダメだ。晒しと変わらない結果が見えてる。じゃあ被り物はどーだろーか、タイガーマスクみたいなのやつ……新○本プロレスの悪役つぽくなりそうだからやめとこう。バイク用のヘルメットは——詳しくないからパス。お祭りで売ってる仮面は視野が狭すぎるし顔を隠しきれてないからダメだ。

うんうん悩んでたりタに、ゼロスが言った。

「彼、禪院家から『世直しマン』と呼ばれているそうですよ？」

「そーなの？ そつか……世直しマンリスベクトか……」

リタは悩んだ。あの無駄にトゲトゲの付いた兜は作ろうと思えばまあ作れないことはないんだけど、視界が狭まる。あと重い。お手軽な世直しマンつぽさとゆーと便座かゴキブリ……便座つぽい先端をつけた棍棒とか武器として渡したら喜ぶだろーか？

考えてみよう、ファンタジー装備を身につけて便座ステッキを持った男の姿を。——誰が見たって罰ゲームの被害者でしかない。これは酷い。リタは一般市民レベルのファッションセンスの持ち主なので、そんな廃がセンスな格好は受け入れられなかった。

夏油の尊厳は守られた。良かったね。

ゼロスの企みはリタの理性的判断により防がれたとはいえず、雄仮面問題はまだ解決してないわけで、リタの悩みは依然存在している。でもどーしろってゆーのだけ？ 軽くてかさばらなくて丈夫で洗って鎧と調和するデザイン、顔を隠せる何か——そんな便利なものなんて何も思い付かない。

リタは悩んだ。悩みに悩んだ。姿勢を変えたら迷案が浮かぶかもしれないのでブリッジしたり、美味しいご飯を食べたら妙（な）案が浮かぶかもしれないので松○牛のステーキをわさびと塩で美味しく頂いたり、ドキドキハラハラしたら愚案が浮かぶかもしれないのでデトロイト・メタル・シティを観ながら「F A ○ K！」と叫んだりした。でも何も思い浮かばなかった。

リタは無力だった。魔王なのに。

そんな間にも志々雄仮面の噂はじわじわとローカルから全国区に広がっていった。全国放送の番組は主に京都府と大阪府に出没する怪人ミイラ男に大盛り上りで、雑壇のお笑い芸人が「顔を出せない理由があるんでは？」とか笑いながらコメントした。そんなこたあ見たら分かる。

リタの焦りや心配なんて知るよしもないんだろうが、怪人ミイラ男こと夏油は「見た目なんて二の次三の次ですよ。悪を討ち正義を執行できればそれで良いんです」とか自信満々に胸を張って言っている。ヒーローはイメージも大事だというのに。今こそ呪

術界の森○蘭な皆様を思い出せ……ツラが良ければ善人に見える。森○蘭は顔が悪いから読者に嫌われて、天○地獄はツラが良いからファンが出来た。繰り返しゅーけど、見た目は本当に大事なのだ。

夏油は甚爾の教え子で、悟の親友だ。なんとかしてやらなければならない。リタは焦っていた。

そんな時、とあるアニメの再編集版がテレビ放映されるというニュースが流れた。ニュースって言ってもアレ、番組と番組の間のCMだ。

八十年代後半から九十年代前半の頃にテレビで放映され、原作に追い付いたら大変だからって一話まるごと声優が頑張ったりしたアニメが再編集。

——夏油は大阪のエロいお姉さんちでご相伴に与ってるから、リタの今日の晩御飯はうまか○ちゃん辛子高菜味にシャウエ○セン三本と半熟卵を入れて、夏油が東大阪で買ってきた七味唐辛子をこれでもかと振りかけた。最近のインスタント麺はクオリティが高い。一工夫するだけでお店に負けないラーメンを食べれるのだ。

ズゾーと麺を吸えばラーメンスープがぴりぴりとテーブルに散る。

吸りきって、口許をぬぐう。

これだ。

主人公たちの身につける鎧はおふあんたじいらしきがあるし、スレイヤーズ世界から



次に……と言うより実はこっちが本題なんだが、正義のヒーローには進化が必要。危機に遭って新たな力に目覚め、パワーアップして難敵をぶちのめさなければならぬ。何故かってそれが男のロ・マンならぬ男の浪漫だから。サナギ○ンだつてセーラーム○ンだつて多段階進化するし、敵だつて「あと三回の変身を残しています」とゆーのだからヒーローだつて五回くらい変身して良いはず。

とはいえ、変身には準備が必要——研究所から逃亡したバツタ怪人は改造手術によって変身能力を手に入れ、宇宙から現れたウルトラな男は事故死からの合体、古代エジプトの王を宿した少年は十年かけてパズルを解いた。だから、そう、正義の力はインスタントに手に入れていいものじゃあない。

だが夏油は赤い石をインスタントにゲットした。インスタントにはインスタントゆえの理由があることを忘れて……。

リタが夏油の秘孔を突いて背中に埋めた赤い石は甚爾や悟に植えられた石の三分の一の大きさにも満たない。シャブ倍ドンでリタの力が濃縮されたから？ いいや違う。ではなぜ小さいのか——リタが夏油に求めていることが、彼が魔道師として育つことじゃあないからだ。魔力なんてちよびつとでいい。日本人の平均寿命の五倍くらい長生きして、リタのためにシャブラニグドウの魂の欠片を抽出し続けてもらうことが一番重要。そんな早くに夏油に死なれたら困る……次のシャブ憑き人間がいつ見つかるか分

からないのに。だから夏油用の赤い石は寿命を弄るのがメインで、魔力を精製する機関はオマケ。変身スイッチもあらよつと神経に繋げてあげた。

心配しないで、変身のオマケにちよつと体を改造するだけなの。ちよつとだけだつてば本本当、インディアン嘔吐かない——けど秘孔は突く。本人も変身したいつて言つてたからちよつとの改造くらいなら本人の意思が伴つてるんだよ石だけに。「この赤い石つて何ですか？」つて質問に「エイジャの赤石（つぽいもの）」つて答えたら「W r r r r y ! !」つて本人も大喜びしてたし大丈夫大丈夫、オールオツケー無問題。モウマンタイ長寿つて人類の夢でしょ？

ちなみにエイジャの赤石は人間を進化させるパワーを持っていて、リタの赤石は人間を辞めさせるパワーを持ち、そして路代・赤石は女子高生を天草四郎にするパワーを持ってている。

話を戻そう。夏油は進化できる方の赤石を期待してたのに石仮面を被せられたわけだが、その際、本人への意思確認はなかった。刑事事件の容疑者だつて手錠をかけられる時には「貴方には黙秘する権利や弁護士を付ける権利があります」つて説明してもらえるし、おうちを買う時には宅建士さんが瑕疵担保とか色々説明してくれるのに、人間を辞めるとゆー重要事項の説明義務は全く果たされてなかった。法律で規制されてないからだろう。

半年もすれば夏油は人間を辞め、ニュー夏油になる。魔族と契約した人間の末路なんてこんなもんだ。仕方ない。騙されたお前が悪いのだ。クーリングオフ制度？ 魔族の社会にそんなもんあると思つたのか？

石が小さかったお陰で夏油の準備期間は半年足らず……背中の秘孔に埋め込まれた石はあっさり溶けて消えた。

そのころ季節は既に梅雨。イギリスでジューンブライドが人気なのは花がたくさん咲いてて氣候が良いからなんだが、日本の六月は雨が多い。憂鬱な気分になる人が多いからか略奪婚された男女の恨みゆえか呪霊もあちこちに発生している。

正義のヒーロー夏油があつちに飛びーのこつちに飛びーのと忙しく除霊していた、六月のある日のことだ。

——志々雄みたいな状態の晒しの下、夏油は激怒していた。必ず、かの邪智暴虐の者共を除かなければならぬと決意した。夏油には子育ての苦労がわからぬ。夏油は、まだ大人の仲間入りしたばかりの半人前である。リタのもとに居候し、禪院を殴つて暮して来た。けれども邪悪に対しては、人一倍に敏感であつた。

きょう未明、夏油は『山』を出発し、市街地を越え山を越え、数十キロは離れたこの町にやつて来た。夏油には恋人はもとより女房など無いがデートしたい女ならいる。

夏油はそれゆえ、デートスポットの下見兼ヒーロー活動のためあちらへこちらへ行き

——窓ガラスが割れ、蔦が這う廃墟化したマンションに一人潜り込む少年の姿を見つけたのだ。

人の目を避けて地上に降りる。マンションの表面は豊かに繁る蔦で青々としている。細い水路と川に挟まれるようにして建ったマンションは三階建て。向かつて左手の部屋の窓ガラスは割れ、網戸もない。

廃屋だ。だけど、人が出入りしてる跡がある。

蜘蛛の巣を払いながら中に入って階段を上った。二階——じゃないな。三階——ドアが空きっぱなしの部屋に靴のまま上がる。

夏油はまず、部屋の角で丸くなっている少年が小さいことに気がついた。小学校中学年かそこらかって体格だ。そして少年の髪がザンバラなことと、夏に合わない厚手の長袖を着てることに目が止まった。

袖から覗く手は骨張っている。服の上からでも分かるくらい肩は細く頼りない。砂を踏みしめる音にびくりと体を震わせて腕の間から夏油の姿を窺う様子は、怪我を負った野生の獣を思わせる。

夏油の見た目がアレだったからか、少年はびっくり眼で顔を上げて、まじまじと夏油を見た。——少年には、顔の右半分を覆うような酷い傷跡。

これは……少年の家が貧しくて痩せているとか、貧しくて着たきり雀なのだとか、そ

ういうのじゃあない。

夏油はこれまでずっと恵まれてきた。呪霊は見えないが優しい両親と、顔も性格も生意気な妹……家族仲は良い方だ。高専に入ってからには気の置けない親友もできた。尊敬できる教師にも出会った。今は親友の親みたいな人○が面倒を見てくれてて、気になる女性がいる。夏油は恵まれて育った。

志々雄みたいな状態の晒しの下、夏油は激怒した。必ず、この子を傷付けた邪智暴虐の者共を除かなければならぬと決意した。夏油には子育ての苦勞がわからぬ。夏油は、まだ大人の仲間入りしたばかりの半人前である。リタのもとに居候し、禪院を殴って暮して来た。けれども邪悪に対しては、人一倍に敏感であった。

正義のヒーローは義憤——怒りで強化される。サ○ギマンの怒りが頂点に達したときサ○ギマンはイオ○ズン間違えたイ○ズマンに変身するし、悟空だって「クリ○ンのことかー！」と怒って強化された。

だから夏油も感情が高ぶると変身する。

「す、スーパーサイヤ○……？」

逆立った髪は金色に染まる。なんかそれっぽいエフェクトが夏油の周囲に小さな嵐を巻き起こし、志々雄な晒しがほどけて宙を飛ぶ。サングラスも割れたかなんかして消えた。顔もどことなく鳥山絵、もしくはあーみん絵っぽい。

夏油は気が高ぶると変身するよーになった。まさしくヒーロー、これぞヒーローの鑑。スゴイぞーカッコいいぞー!!

大事なことなのでもう一度。気が高ぶると、興奮すると変身する。

それは、つまり。

夏油は——夏油はT o ラブると変身する。怒りで興奮しても性的に興奮してもスーパーサイヤ○になる。怒りも性欲も感情が昂つてることには違いはないもんで、エキサイトしたらエレクトと同時にエボリユーシヨンするのだ。とんだ初期不良、リタが変身ス イツチの設定をミスったと言う他ない。

夏油の精神修行は始まったばかりだ。

## その23

小さく狭い村で虐待されていた双子の少女と違い、少年は親がいて——学校に通っている。誘拐だなんだという事件になるため安易に少年を連れ帰ることはできない。夏油は考えて、リタを頼った。

「屋外で寝泊まり？　最近使っていないから別に良いけどアレ一人用よ？　え、譲ってほしい？　まあ、欲しいならどうぞ」

彼女さんとキャンプするつもりなら道具や食器やらが足りないわよ、とリタに言われたけど、リタのキャンプ用品を使うのは夏油じゃあない。

ブランド品の丈夫なマイクrostorbと付属の鍋、薄いけど丈夫なエアベッド、一人でも組み立てられるテント、他は百均で買った金属製の皿や割り箸にスプーンなどの食器、ホームセンターで買ったガスボンベ。そしてもちろん、加熱したりお湯を注いだりしたら簡単に食べられるインスタント食品、ケースで買った水と大きなプラスチックボトル。これら全部——夏油はそのまま少年にスルーパスした。

「顔の怪我治るまで帰ってくんなくて言われて……」

少年には呪力があった。夏油ほどではないが才能もあった。

「こんなに祈つてるのに何でお前のビョーキは治らないんだ、って」

あらぬものが見える、そう繰り返して話した少年に、二世帯同居する彼の祖母は宗教へ走った。孫息子は狐憑きか何かになったに違いないと思ひ込み、宗教にすがって、歪んだ信仰に染まった。少年の両親も祖母を介して怪しげな宗教に染まり、祈り喜捨すれば我が子がまともになると信じた。

すがり付いた先が危険な宗教だったなど、彼らは気付きもしない。

彼らがいくら祈つても喜捨しても少年はあらぬものが見え続けた。生まれつきの才能だから当然だ。当然なのだけれど、彼らはそんなことを知らないから——祈りが足りないからじゃないかとか、喜捨が足りないからじゃないかとか、悩んで苦しんで、最終的に少年を責め立てた。お前のせいで私たちの信仰心が証明されない。お前がいるから教祖様にお前がいるから私たちは餓え渴く。お前が、お前の、お前は……。

少年の食事はどんどん減らされていった。小学校のときは給食があつたけれど中学には給食がなく、お弁当。親切なクラスメイトがおかずやおやつを恵んでくれて、それでも栄養不足は否めない。

少年の身体はどんどん怪我だらけになった。始めは背中、それから服で隠れるところ全体に広がって、先日ついに顔を殴られた。見た目はグロイが治らない怪我じゃない。治るまで家にいられたら困る、と言って家を追い出された。

そして少年は、夏油と出会った。

「見えたくて見えてるわけじゃないのに」

薄い夏油の残穢を追って、何日もかけて武田家を見つけた少年は、「良いなあ」と呟いた。少年には才能があつた——少し教われればすると技術を身につけ、夏油を追えるくらいには。夏油の残穢しか知らなかつたから、それしか見たことがなかつたから追えたのかもしれない。

両目の下に三つずつ伸びた文様はいくつかが濃い。

羨ましいなああの子、怪我一つないから。夏油ヒコロに遊んでもらえてるから。にこにこ笑顔だから。大声で喋つてもお母さんに怒られないから。あらぬものが見える病気にかかつてないから。

「良いなあ」

そんな少年の耳元で、誰かが囁いた。成り代わつてしまえば良い、と。あの椅子を取り上げてしまえ、と。振り返つても誰もいない——幻聴だつたんだろうか？ 両親に連れられて参加した集会で聴いた、『教祖様』の声に似ているような気がした。

なら、今のは神様の声だつたんだろうか？

そして少年は、近所の公園で遊んでくると言つて家を飛び出したあの子を捕まえて人のいないマンションの影に引きずり込み、撲殺した。

脳みそを取り出して少年のものと交換すれば少年はあの子になれるはず。少年は知っていた。心は脳みそに宿るのだ。

夏油から貰ったキャンプ用ナイフで幼児の頭を割って——そして気付いた。自分の脳みその取り出し方が分からない。どうやって移し替えれば良いのか分からない。ありやりや失敗失敗。

自分の残骸がべつとり付いたナイフは排水溝にポイ捨てしたけど、すぐに見つけられしてしまうだろう。

少年は倫理や道徳を知っているから、さつきとそこから逃げることにした。テレビでも殺人を悪として報道している。見つかったら逮捕されて、豚小屋に突っ込まれるらしい……。

入居者のいない四階建てマンションの影を出れば、あの子の祖父があの子を探して周囲をきよろきよろと見回していた。少年は——春太は無言でその横を通り過ぎる。マンションの裏は雑草がぼうぼう伸びている。あの子を見つけるのは難しいだろう。あの死体が三日くらいは見つかりませんように！

春太は昔から幸運だった。両親が宗教に染まる前は駄菓子子の当たりが連続で出たし、小学校の間は牛乳を飲むとお腹を下すというクラスメイトがいたから毎日牛乳を二瓶飲めたし、中学でもクラスに責任感と正義感が強いクラスメイトがいたお陰でおかずや

おかしを譲られてきた。春太は幸運を掴んできた。

春太は昔から不運だった。当たりのシールやキラキラのラミカはポケットからいつの間にか消えていたし、祖母と両親はカルトに染まったし、家庭に問題を抱えていることが外形から一目瞭然だったため中学では友達が出来なかった。

大事にされているあの子が羨ましかったから、あの子になりたかった。他人が持っている切符の方が良い席に見えた。他人が持っている切符の方が遠くまで行けるように思えた。だから自分の切符を捨てて、他人こどもから切符を取り上げた。

春太のための切符は既に手の中にあつたのに。

テントとかのキャンプ用品はかさばって邪魔になるから要らない。だけどご飯は必要だしコンロも水も……飲み食いするものは持っていかないと。バックバックに詰め込めるだけ食べ物を詰め込んで、春太は薦が繋るマンションを出た。

——武田宗介くん殺人事件の現場にべったりと遺っていた残穢は、夏油が保護しようとしていた少年のものだった。

今の夏油は呪術界隈から追われる存在で、子供を保護できるような立場にない。自分を守るよう呪術の基礎を身に付けさせるのと平行して、公的機関にきちんと保護してもらうにはどうすればいいか図書館やら市役所やらに通い調べていた、そんな時に起きた殺人事件。

信じられなかった……と言うより、信じたくなかった。蔦で繁ったマンションに行つたが人の気配はなく、テントやベッドだけ残っていた。少年の残骸は人混みに溶けて消え、追えなかった。

呆然と『山』に帰ってきた夏油に、リタは肩をすくめて言った。夏油くん、あなた純粹すぎるわ。なんでもかんでも背負つてたら潰れちゃうわよ。

潰れちゃうわよとゆーけど時既にお寿司とはこのことだった。半年ほど前に一度潰れかけた夏油の心の強度ははまだガラスのハート。痛みがあるから輝くとかそんなのは健康な心身が揃つてるから言えるのだ。一度ヒビが入ったせいで割れやすいハートなのに、取扱い注意なのに、虐待から保護したつもりの少年が殺人事件を起こした——夏油が可愛がつている幼児が殺された。

夏油の繊細で脆いハートはその衝撃にボキンバキンと折れてしまった。どのくらい折れたかとゆーと六分の九くらい折れた——つまり折れて曲がつていた。メーカーから問屋を経て店頭に並んだ際の売価みたいな折れ方だ。

リタから連絡を受け『山』に戻ってきたゼロスはガタイの良い青年の頭やら背中やらをよしよし撫でた。かわいそうでちゅね〜大変でちたね〜と甘く優しい言葉をかけ、ゼロスの望む道へ夏油を導く。

折れ線グラフで隙間風だらけの心につけこみ、ゼロスに心酔させ、魔族のために動く

ように誘導する。自分のせいだと嘆く未成年に悪魔は囁く——リタを魔王にシヤブとして強化しやぶらせるすることこそ多くの人を救う道。この世界を守ることこそ喪われた命への償いになります……君には世界を救う力がある。そう、君にしか出来ないことですよ。

夏油にとつて幸運なのか不運なのか、ゼロスは誰より人の心に精通した魔族だった。二十歳にもならない青年をパペット○ペットなんてお茶の子さいさい、あつという間劇場。三分で支度できる。

そんなゼロスのものはやオカルト染みた思考誘導のお陰で夏油は復活した……が、ゼロスがオカルトならぬカルト教団の教祖してるなんて夏油青年は知るよしもない。実はマツチポンプだっただなんて知らない方が幸せだろう。

——三十年以上前、甚爾が『山』に入るよりもつと前。ゼロスは宗教を立ち上げた。きつかけは「負の感情を効率良く収集する方法ってないのかな」とゆる雑談だった。

「人は農産物や畜産物とは違いますからねえ……」

「そーよねえ——ん？ 畜産？」

リタはチーズのかかったピザトーストを見下ろした。チーズとゆると日本では牛のチーズがほとんどだけど、アルプスの少女が食べてるのはヤギのチーズ。日本国内ではまだ出回ってないけど羊のチーズだってある。

人で、羊。この二つの単語がリタの記憶を刺激した。

「あつ、思い出した！ デミウル〇ス牧場よ！」

とゆーわけでゼロスは羊飼いになり、無知蒙昧な羊を導くよーになった。質の良い家畜を集め、良い餌を与え、収穫する……神族や正義（）の魔道師たちがわさわさ居るあつちの世界ではまず不可能な畜産業だが、この世界でなら出来る。

ゼロスの牧畜を止める者はいなかった。

邪魔する者のいない牧場は成功。じわりじわりと増えていく信者はゼロスとリタにとつてただの餌——彼らの感情はリタらのご飯、彼らの喜捨はリタらの活動資金。変だと思わなかっただろうか？ 御三家はリタから要求があれば衣料品なども用意するが、基本的に物納なのだ。リタは『山』に閉じ込められているのだから現金が必要なわけではないのに、テレビやらビデオやらを買った金は、甚爾に与えられていた小遣いは、どうやって用意されていたのか。

リタは善人ではない——が、悪人でもない。せつせと負の感情を運ぶ働き蟻にご褒美を与えることもある。呪霊による不調を治してやったり、物理的なことはどっかんどっかん魔術で解決してやったりしている。

ゼロスは善悪を知っている——けれどその柵に囚われない。より味な負の感情を育てるため、配下への支配を強めるため、何でもする。

まず、夏油を追おうとする子供を誘導した。こつちに残穢がありますよ。

「羨ましいですよね。あの子供は楽しそうなのに、どうして自分は苦しまないといけないんでしょね」

そして、未就学児そうすけくんを見つめながら負の感情を高ぶらせている子供の耳元で囁いた。

「あの子に成り代わってしまえば良い。あの椅子を取り上げてしまえ」

それからはゼロスが望むまま。

種を蒔いたのがゼロスだと知らない信者がまた一人、増えた。

## その24

時は2013年——夏油がやばい宗教に取り込まれてからだいたい四年が過ぎた。そこで夏油は何をしてるかかってゆーと、教団の子供を指導する塾長なんてゆー地位を与えられ、全身全霊の善意でもって信者を増やしていた。

呪力を持った子供を教団で捕獲ゴホン間違えた保護しては言葉と拳の両刀使いでヤバイ思想に染め……もとい世界平和のために粉骨砕身できる良い子に矯正し、着々とカルト教団の戦力増強……もとい親切の輪を近畿圏に広げている。夏油にはまっすぐな善意しかないけど、やってることは戦争の準備である。京都高専は戦いの準備を始めておいた方がいい——抗戦だけに。

教団の塾に通うタカシくん（十五歳）は大阪府〇方市に住んでいる。将来の「便利な手足」として思考誘導を受けているタカシくんと熱烈なカルト信者の両親の一家はたいへん家族仲が良く、休日にはみんなで石〇水八幡宮にサイクリングに行くなどしている。ありふれた幸せな家族だ。

京都の田舎に住んでいる東堂葵くん（十三歳）は師匠である特級術師・九十九が「もう入学までの間は自主練でおっけー！」と途中で指導を投げ出してしまったので、あち

こちらの呪霊スポットを巡り一人で鍛練を重ねていた。休日を利用してチャリを漕ぎ、八幡市は石清水八〇宮まで来ていた。

呪力使いは引かれあう……わけじゃないけど、一目見りや術師かそうでないかは分かる。タカシくんが術師だとゆることは術師の目から見れば明らかだ。近いうちに術校から勧誘を食らうかもしない。

——葵くんは、自分と師匠以外の術師をこの日初めて見た。でも自分のよーに力を持って余すくらい元氣一杯ってわけではなさそうだし、平和ボケした顔だ。つまらねーと興味を失って視線を外しかけた……その時だ。

タカシくんはさつきまでの笑顔を忘れたような能面で、両親の近くにうっかり寄ってきた中級呪霊を切り裂く。その手に武器はない、手刀だ。つまりチョップで霊を切った。

葵くんの目が輝く。葵くんは強い奴が好きだ。葵くんの地元には葵くんと殴り合えるような骨のある奴は今や一人もおらず、呪霊いぢめで憂さを晴らしていた——どこかで聞いた覚えがあるよーな思考回路だ。盗賊いぢめでストレス解消してた魔道師とそっくり。

しぶとい奴、強い奴はつまらない人生に彩りをくれる。葵くんにはタカシくんが新たな彩りに見えた——カルティックな土留め色のマールを彩りと呼んで良いのかは分

かないけど。

「なあお前、呪術使えるだろ」

葵くんはそーやって、ヤバいところに自ら首を突っ込んだ。

——「世のため人のため呪術を使うべき」とゆー塾生と、「世なんざ知らん人なんてもつと知らん自分のためだけに呪術を使って何が悪い」って考えてる葵くんとは、相性が悪いよーに思える。でも塾生はそーゆー香ばしい思考回路の相手に慣れていた。塾生が時々お掃除している呪術師や呪詛師のみなさんは判で押したよーに「俺が俺が」と我が強くて自制心は弱く、プライドは高いが遵法意識が低くて性格が悪い。

それに比べて葵くんはどうだ？ 自意識は少々ならず過剰だし悪タレだし「力こそ正義、つまり俺が正義だ！」とか考えてるけど、十三歳の子供なのだ。まだ犯罪歴もない中学生だから軌道修正できる。

反面教師にするべき実例なら一杯いるからソレを見て学ぼうとゆーことで、葵くんはあつちの呪詛師こつちの悪人そつちの禪院をメタメタにするツアーに連れてかれた。

人に恥をかかせることに人生を捧げている呪詛師の術式は対象の筋肉を一部のみ脱力させるとゆーもので、括約筋を脱力させて放屁させたり脱だっふん○させたりと悪質なこと甚だしかつた。——ので、塾生の術式でおしやぶりをしやぶらせ、よだれ掛けを首に巻き、オムツに靴下とゆー格好で街を歩かせた。塾生の誰にもスカト口趣味はないし、無関係

な人に汚いものを見せるわけにもいかなない。街の人に迷惑がかけられないギリギリのラインを見極めたつもりだ。

呪詛師はすぐに警察が来て連れられていったが、何故か嬉しそうだった。

女子中学生を体育倉庫に呼び出し淫行を働いていた非術師の教師は、塾の女子連中が「きしよい」「教師やめろ」「きつも」「てめーにはブタ箱がお似合いだ」と罵りながら殴る蹴るの暴行を加えた。放課後の体育倉庫に突然呼び出して良いのは気持ちの通じた相手だけなのよね。お兄ちゃんたらもうエッチ！

もちろん私刑の後に通報した。

奥さんと娘さんたちをサンドバッグにしていた禪院なんとかは塾長が天誅を加えた。スーパ○サイヤ人っぽい姿に変身した塾長を、ポテチとコーラを手に応援するのは最高に楽しかった。

塾にはドレミの歌を改変した塾歌がある。ドは道徳を守れのド、レは礼儀を保てのレ、ミは身を引き締めるのミ。ドーナツツやらレモンやらとゆる原型を留めない塾歌を歌いながらのツアーは楽しかった。救いようがないクズどもを「ドレーミーファーソーラーシードー！」と歌いながらサンドバッグにし、その財布から金品身分証とを巻き上げ、人の来ない山奥の滝に縛り付けて放置するなんて最高にエキサイティングだ。でも三日くらいしたら塾長がソレを迎えにいつてるらしい——死なせたら前科持

ちになつちやうから。

葵くんはこのドレミツアーを通じ、悪人を倒すことがいかに良いことを学んだ。なんせ悪人ならボコボコに殴つても良いのだ。ちよつとやり過ぎて怒られないどころか感謝されるし、悪人いぢめの後は高い焼き肉屋に連れてつてもらえる。正義は素晴らしい——つまり人の金で食べる焼き肉は美味しい。

周囲の塾生たちが真つ当な性格に養殖された人間ばかりなのも葵くんにとつて良い方向に作用した。天然ものの真つ当な人間は「悪いことは人に迷惑をかけるからしちやいけないんだよ」とか毒にも薬にもならないことしか言わないけど、真つ当に育つように養殖された人間は「悪いことをしたら平穩に生きていられなくなるよ」なんてことを真顔で言い放つ。まさにその「悪いことをした奴を地の果てまで追いかけてボコボコにする」ツアーの参加者である葵くんはなるほど頷いた。

悪いことをしたら罰を受けたり、復讐されたりする。数とパワーの正義によつて悪は打倒される……それがこの世のルールなのだ。だってニチアサの特撮も数とパワーで正義を押し通してるもん。

塾生との交流によつてクソガキ葵くんのコミュニケーション能力は著しく上昇し——東堂夫妻は泣いて喜んだ。葵くんを悪い方向に進化させた自称特級術師とかいう怪しい女と違い、塾の指導は母体が宗教団体つてことを忘れるくらいもだ。葵くんが

京都呪術高専に入学するまでのおよそ二年、葵くんに対しても東堂夫妻に対しても勧誘行為は全くなかったし、怪しげな勉強会の案内チラシとかが渡されることもなかった。

ぶつちやけたことをゆーと呪術高専の職員のが教団員や塾生より怪しい。

両親は「呪術高専なんて怪しいし止めといた方が良いんじゃないか」「今からでも普通の高校を目指してみないか」と尻込みしたが、葵くんはそれを突っぱねて京都呪術高専に入学した。師匠の推薦があるし面白そうだし、呪術高専なら他にはない経験を積めるはず。そう押し通して、両親と塾生と塾長に見送られて高専に入学し——驚いた。担任の話によればなんと、葵くんの同級生はたった二人だけだというのだ。

「数とパワーで悪をタコ殴りにする正義の使者を育てる学校」として、西日本から生徒が集まってくるとゆー話じゃなかったっけ？ 葵くんが参加していた北河内地区の塾には同い年はいなかったけど、全国の塾生が集まったときには同学年の塾生が二十人はいた。

「二年がたった三人だけ……？」

少な過ぎやーしないかと疑問を口にした葵くんに担任の歌姫先生は肩を竦めた。今年には新入生が多い方だとかで、なんと二年と四年は二人で三年は一人しかないそーな。呪術界隈はいつでも人材不足なのよってホントか？ 塾生には同年代たくさんいるけど？

教室で初めて顔を合わせた同級生二人は男と女が一人ずつ。

塾長から特徴的な要素を取り出して少し改変したらコイツ、みたいな男は加茂憲紀。印象的なキャラ付け感溢れる髪型と細目、細身に見えてガタイがいい。真面目の道を歩いてきましたと言わんばかりのお堅そーな雰囲気も塾長に似てる。

もう一人は若かりし頃のドーラ——天空の城に出てくる空賊のママ——みたいな髪型の見習い魔女で、西宮桃。西宮とゆーからには兵庫県出身かもしれない。知らんけど。

葵くんは糞真面目な顔面の加茂に向かって口を開いた。

「俺の好みはケツとタツパがデカい女、結婚するなら高田ちゃんと決めている。加茂、西宮、お前らのタイプはどなんだ？」

「はっ。」

「うわ……初対面でそれ聞くとかきつしよ……」

哀れ、この年の京都高専新入生の初対面は悲惨に開幕した。

言い訳をしよう。この世には異常性癖が多い。いや、性癖に限らず異常な精神の持ち主が多いと言うべきか？ 小学校に上がるか上がらないかという年齢の子供を蔵に閉じ込める村の大人、信仰対象に異物が混ざるのは許せないからと女子中学生の死を望む信者ら、呪力を持たない子を人扱いしない術師の一族、ある女性に対し呪霊の子供を妊

娠させては墮胎させるといふ実験を繰り返した男、人間を調理することに長けた女、その他色々。屑がたくさんいすぎて困つちやう。

葵くんの師匠である九十九由基は初対面の当時小学三年生だった葵くんに女の好みのタイプを聞いてきた変態だ。間違ひなくシヨタコンだろう。そして呪術界限には異常性癖の奴が多い。この二点から葵くんが導き出した答えは——異性の好みや性癖は、そいつが呪術師として成長するか呪詛師に堕ちるかを判断する基準の一つである、という。だから呪術界限は初対面でセクハラ発言をぶちかまして許容される世界なのだきつと間違ひない。

——葵くんの周りにはその誤認を正せる人がいなかった。塾生はみんな性癖も好みもバラバラだけど数とパワーの正義に燃えた好青年ばかりなのに対し、ドレミツアーでぼこぼこにした呪詛師はどいつもこいつも異常性癖だった。

葵くんの仮説に「その可能性もあるかもしれん」と頷く奴はいても「ハハハそんなワケあんめ」と否定する奴はいなかった。良くも悪くも塾生たちは純粹培養で、彼らの中には他者を○糞だっぶんさせることに喜びを感じるよーな異常性癖の持ち主はいなかったから。

呪術師たちつてヤバイね、変態のすくつ（何故か変換できない）なんだわ。こわーい。葵くんの呪術高専生活は好感度マイナスでスタートを切った——ここからのリカバリが可能なのかどうかは、葵くんのコミュ力にかかっている。

## その25

夏油が高専で受けた最後の任務地——県道が細く繋がってる以外は私道しかない小さな村は、文明開化や大正デモクラシーを知らないらしかった。今や年号は昭和……も過ぎちやうって平成時代がそろそろ二十年になろうっていうのに、人を人とも思わないような行為——まだ年齢が二桁に届かない子供を地下牢に閉じ込め、罵りながら叩いたり蹴ったり——を平気で行ってしまえるとうー人権意識の村民しかないおっそろしい環境。

そこで、それが何を起こしたかとゆーと。夏油傑は呪詛師になって、村は見事な薔薇園と化し、関東の呪術師が後片付けに追われて、関西では禪院家がベルコ貸し切りにして三十数人分の経を上げた。

夏油はたくさん壊し、たくさん殺して表の世界を去っていった。悟の同級生は硝子一人になった。でも、禪院家の当主が「夏油が壊したビデオ類全部弁償しろバーカーアホ」と高専生を振り回し、お気に入りバの甚爾くんバの関心を奪う双子の伏黒家入りに怒った混沌さらちゃんの海が高専の裏山を吹き飛ばし、ゼロス犬がお下がりとしてめぐくんからさらちゃんに引き渡されてゼロスが地獄を見て……夏油傑がいなくなっても都立高専の日常は

ドタバタ元気に過ぎていく。

——悟が高専に入学してから四回目になる夏が来た。

休み時間、戸愚呂仮面が廊下の角を曲がったのを見届けてから席に戻ると、悟は机の中から白い板を取り出す。

「(こ)じよー何してんの?」

「アキネ○ターやろーと思つて。さツイートするやつえずつたーでなんか人気っぽい」

「ああ……」

悟がケータイからあいぼん(検索避け)に買い換えたのはついこの間の日曜日だ。メールと電話しかしないならケータイで十分と思つてただけど、あいぼん(検索避け)は画面がデカイ。デカイ画面の方が見やすいって硝子と言ったから、硝子に倣つてあいぼん(検索避け)を買った。

ツルツルの画面と向き合う背中丸い。

「いやいや別人だわ。つまんね」

白い板型の精密機器(検索避け)を机に放り投げた悟は「はあー」と息を吐きながら背筋を伸ばした。

「誰を想定してたんだ?」

「THE MOMOTAROHのモモタロウ。何回やっても童話の桃太郎しか出てこ

ねー」

「難しすぎるだろそれは」

ワイド版になったしパート2も連載されたシリーズなのにこの仕打ち。酷いわ、にわの先生が可哀想！ とワザとらしい泣き真似をした悟の耳に扉が開く音が届く——甚爾だ。

次の時間は体力錬成じゃないはずだし、まだ休み時間は充分ある。どーして甚爾がここに。

「ルナとアルテミスから応援要請。レイちゃん出番よ、変身して！」

「なんですつてえ今すぐ変身よ！——変身ペンどこ!?」

「ワロス」

今もどこかで灰原ルナと七海アルテミスが生死の際にいるかもしれないとゆーのにこの余裕、人非人って罵られても仕方ない態度だ。

でも悟にはこんな態度を取れる理由がちやんとある。

「あいつら今日は栃木だよな」

「確かそのはず——あ、五条、お土産にたまり漬けチーズよろしく」

「道の駅にあつたら買うわ」

カラリと窓を開けて、サッシに足を掛けたと思つたら——悟の姿は消えた。



マンションを建てようとするからだ、呪いだ、なんて噂もあったらしい。

現場にいた呪霊は二体。一体は首塚の昔話から生まれた呪霊で、もう一体は首塚跡地が人の侵入を拒むとゆー噂から生まれた呪霊。……前者は報告通りだけど、後者は報告になかった。

後者——色で呼び分けるなら赤い方——は見た感じ三級以下のさして強くない呪霊なんだが、半径一メートルの距離まで近づくと不可視の結界らしきものにより五メートルから七メートルほど後方に弾き飛ばされる。近距離肉弾戦派の七海が不得手とするタイプの呪霊だ。

七海の補助に回る灰原も近距離から中距離タイプだからどーにもならない。このままじゃ赤い呪霊に一発も入れられないまま二人の体力が尽きるし、なにより呪霊は二体いるのだ。

『執行、執行！ 刑を執行するぞい！』

高めに見積もって準一級だろう呪霊——色で呼び分けするなら緑の方——は右の手で打刀を左の手に短刀を持った六腕の異形だ。むきむきの上半身からによつきり生えた円錐型の脚は膝も踝もないただの棒なんだが、直立の姿勢でぬるぬる縦横無尽に動くもんだから足裏に車輪でも付いてんのかと疑いたくなる。あと口調が爺臭いしムカつく。

色んな意味で気持ち悪いその緑の呪霊を倒すのに集中しようとするれば赤い呪霊に弾き飛ばされて邪魔され、赤いのを避けるのに気を割けば緑のに襲われる。嫌な組み合わせだ。

「糞きつねがっ」

弾き飛ばされた七海が吠える。

色が赤と緑だからきつねとたぬきだ。見た目は動物とほど遠いけど。

「そろそろ、ヤバいかも、体力的に……!」

灰原の体力回復のためマルちゃんらから距離を取る。一体どれだけの時間まる子ちゃん相手に戦っているんだろうか——時計を見る余裕はない。終わりが見えないことも二人の疲労を強める。

どっちがまる子でどっちがたまなんだ……!

「一時間半過ぎていれば、補助監督が、連絡しているはずだ」

「うん……」

「五条さんが、来るまで……頑張ろう」

「マーズ先輩なら……きつと、来てくれるよね……」

今日の補助監督は五条派閥だ。一時間半持ちこたえれば間違いなく応援が来る。それを信じて二人は一瞬視線を交わし、前を向いた。

——ぼぼぼっ!!!

その目の前で、緑のまるちゃんが飛び散って消えた。汚え蕎麦だぜ。

たぬき蕎麦がいたはずの場所には——マーズ先輩もとい五条悟その人。二人は一時間半持ちこたえたのだ。

『でデででででデデデでデででつデでデデデデでつてエえええ!!!』

狂ったみたく騒ぐきつねうどんに悟は後頭部を搔く。

「うるせーなあ。デデデでつてお前、さっきの呪霊デデ○大王だったわけ?」

「はいっ! 語尾がゾイでしたッ!」

悟が来た瞬間元気になった灰原が手を上げて答えた。

「へー。ま、俺つてば確かに『無限の力を持つ伝説のヒーロー』だし? デ○デ大王なんてちよちよいのちよいよ!」

「五条さんッ! そいつの半径一メートルに近づくと撥ね飛ばされます!」

「ふーん、あんがと」

一時間半近く自分達を振り回していたきつねうどんが悟に飛び掛かるのを見て、七海は叫んだ。疲れもあった……一時間半もの間生死の境で戦ってたのだ、悟の術式なんて、強さなんて頭からすっぽ抜ける。

「でも、こんなの全力を出すまでもないんだよな」

悟が前に向かって手を伸ばせば、赤い呪霊は痕跡一つ遺さず消えた。赤子の手を捻るとはまさにこのことよ。

自分達が苦勞した相手をそんな一瞬で倒すな、もつと苦戦して苦勞しろこの野郎、なんて理不尽な考えが七海の頭に浮かぶ。バーカ！ ちくしよーめ！

「二人とも苦勞なタイプと戦って疲れたろ。帰ろうぜ」

高専へ帰る車内、七海と灰原は今日の失敗の原因——二人とも近接メインで中から遠距離攻撃に欠けていること——についてぼそぼそと話し合った。

「私か灰原のどちらかが有用な遠距離攻撃手段を持っていれば、五条さんと呼ぶことにならなかつた……」

「うん。悔しいね、七海」

鉈を投げればきつねうどんに攻撃が届いた。今までだつて遠距離攻撃には鉈を投げたりその他の呪具を投げつけたりしてきた。だけど今日——敵は一体だけじゃなかつた。緑の方はほぼ準一級、七海や灰原では無手で相手できるレベルじゃあない。武器を奪われたり失くしたりする可能性のある攻撃手段は選べない。

二人とも、武器がなくなれば死ぬと分かつてたのだ。

「投げたりうっかり手を放したりしても手元に戻ってくる武器ってないですかね……」

「あはは、いいね！ めっちゃ呪われてそう！」

「——武器か」

助手席の悟が独り言なのか会話するつもりなのか、一言ぼつりと呟いた。二人は自然と黙って悟の白い後頭部を見る——何も続けないから独り言だろう。

それからおよそ半月。ツクツクボーシが校舎周辺の森のあちこちで大合唱してるもんだから聴覚からも暑さがいや増す平日。

教室から来るには少し不便な場所にある自販機はメーカーとかブランドとかがごちゃ混ぜで、コ○コーラの隣にダ○ドーの炭酸ゼリードリンクが並んでたりする。市中ではなかなか見つからない変わり種も数種類あつて選ぶ楽しさがある。

七海はざつと商品一覧を眺め、五回振るプリンシエイクのボタンを押した。最近のマイブームドリンクだ。滑らかな食感が好きだから五回以上振って、開けて、飲む。ぷは——！

「七海じゃん、お前もそれ飲んでんの？」

「ああ、五条さん……お疲れ様です」

悟は任務から帰って来たばかりなのかサボったのか、三時間目が終わったところなのにビニール袋を下げていた。

「それ俺のお気に入りなのよ。美味しいよな」

「ああ……」

甘党だもんな。

七海と同じのを買って悟は三回振った。固形が残ってる方が好みなんだろう、一口呷って「うまー」と笑顔を浮かべる。

「七海たちさ、前に遠距離攻撃手段欲しいつつつてたよな。なんか良いの見つかったか？」

「——いえ、思ったようなものは見つかっていませんね。遠距離が不得手だというのは一年の時から分かっていたのでずつと探しているんですが、なかなか」

「やっぱかー……。なあ話全然違うけど七海ってなんの漫画好き？ アニメでも良いけど」

「本当に突然ですね」

好きな漫画やアニメか、と七海は記憶を探る。アニメ好きな父親が録画してくれたアニメを土日二人で見るのが好きだった——高専に入ってから時間の余裕も気持ちの余裕もなくてサブカル全般から離れてしまったけれど。

「先ず『あず○んが大王』」

「アニメ、ペンギンのちよちゃんかエンジェルだよな」

「見てたんですか」

「うん」

「はあ。他は、原作や漫画版アニメ版を問わずですが、ハ○レン、ガン○レ、ぱに○に、ヘル○ング……えーっと、最終兵○彼女、ガン○リ、ブラッ○ラグリーンあたり。ロボットのものは興味が湧かなくて全く見たことがありませんね」

「鬱展開と人の死亡描写に心がしんどくなつたからまつたり系も見たって感じがぶんぶんするわ。——あんがと、参考になつたわ」

「はあ、どういたしまして？」

悟は「作りましょー作りましょーさてさて何が出来るかなー」とハイテンションで歌いながらふらりと消る。

口に出して列挙して、自分の好みはガンアクションとかミリタリー系だつたんだなつて今更な気付きがあつた。そーいや呪具で銃を見たことがない。だから武器庫のどれもしつくり来なかつたのかもしれない、と思ひ——それがフラグだつたらしい。

翌週三年の教室に乱入してきた悟の両手は塞がっていた。

「後輩ども、先輩からのプレゼントだぞ〜アルテミスはこれでルナはこつちな」

「わあく、コレなんですかマーズ先輩！」

灰原には小さな箱、七海にはギターケース。

「遠距離武器欲しいつつつてただろ？ つてことで用意してみた。まあ得手不得手があるし、使いづらいつか自分には合わないと思つたらすぐ言えよ。別の出してやるから」

「へ？ この中身呪具なんですか？」

「そーそー。高専の呪具庫ってなんでか近接武器しかねーじゃん？ うちにあつたやつ持ってきたからやるよ」

これでも先輩としてお前らを可愛がってるつもりなんだぜ。その後輩に死なれちゃあ後味が悪いからさ、とゆー言葉には後輩愛が含まれてる気がして、七海は唇を引き結んだ。ちよつと照れ臭かった。

「首輪……？」

早速箱を開けた灰原が首を傾げた。中身は楕円形の輪だ——つい七海の視線も厳しくなる。

「ちげーよ、後輩に首輪贈るとか事案だろ。冤罪！ あのね、ルナちゃんはフリスビー得意だつたからコレにしたんでちゅよ。——緊箍児をイメージして作られた呪具だし、いちおー額飾りつてことになるはず。相手に投げつけて使うからムーンテ○アラクションみてーに自動で手元に戻ってこないけど、捕まえた相手の動きを封じれるから使い勝手悪くはねーだろ」

「うす！ ありがとうございます！」

「何故ムーンティアアラ○クション……」

で、次。ギターケース。

「こん中に入ってるのはライフル。ガンアクション好きのお前なら使い方も整備の仕方  
もすぐ覚えるだろ」

「ライフル……本物ですか」

「本物です」

免許を持つてる人が後で整備を教えてくださいとゆーアフターフォロー付きのプレゼント。  
七海は「そんなに頂けません」と悲鳴を上げた。

「あんな、お前らが死んだら、お前らに回るはずだった任務が俺に来る。お前らが生きて  
たら、俺に時間の余裕が出来るし後輩が生きてハッピー、分かる？」

「それは、分かりませんが——」

悟は某忍者漫画の抜け忍みたく七海の額を小突いた。

「お前からこういうの手に入れるツテねーだろ。先輩の好意は受け取っとけ」

「うわあ、マーズ先輩マジ神！　ね、七海受け取っておきなよ。僕たちが元気で任務を果  
たすことがお返しになるんだ」

申し訳なさとか金額はどれだけ掛かったのかとか銃の所持許可ってどうやって取れ  
ば良いのかとか色々思いつつ、七海はライフルの入ったギターケースを受け取った。

「マーズ先輩マジ神！　ありがとうございませーす！　これからゴッドマーズ先輩って呼  
びます！　ね、七海も！」

「……ゴッドマーズさん、有難うございます」

「いやそれ別の版權。……いや、待て、俺はゴッドマーズだった？」

ゴッドマーズは鉄壁の防御力（無下限）と回復力（反転術式）を持ち、光の速さで歩けるし（『蒼』）、必殺技でほしい敵は死ぬ（『Ⅹ』）。五条悟はゴッドマーズだったのだ。間違いはない。

——関西に世直しマンが生まれたように、関東にはゴッドマーズが生まれた。日本はどこに向かっていくんだろう。

## その26（掌編）

近畿にスーパーサ○ヤ人現る——報告者の頭と目を疑いたくなるような情報だけど、映像は嘘を吐かない。

監視カメラで撮られたんだろう動画の中で、物理的に光って輝いてる金髪の男が（呪術を使える）犯罪者に馬乗りになり「悪人討つべし！ 討つべし！」とばかりに拳を叩きつけている。

画像荒いけど、音声入ってないけど、知ってる奴の気がする。だってほら殴るときの癖とかあるから……仮にも体術の指導教員してる甚爾には一目瞭然、まるつとズバツとお見通しよ。

呪術連から高専に回ってきた不審者情報を無言で手持ちのUSBにコピーし、体育教官室とゆー名の甚爾の私室まで歩いて鍵を閉め、カーテンも閉めてケータイを操作した。

「ばばあー！ 俺の生徒に何した!? なんて夏油あんなアニメチックにシャイニングしてるの!?!」

『本人がスーパーサイヤ人になりたいって言ったのよ』

「え、なんて?」

確認のため家に電話したら「本人の希望です」って言われた甚爾の気持ちも十文字以内で答えよ。頭の中に白玉粉詰めてんじやねーのか、お団子頭だけに。(二十六文字)

生徒のあんまりな状態に頭を抱えた甚爾に追撃が襲いかかる。——しばらく前にバラエティを騒がせていた志々雄もどきが夏油傑くん御本人。

「なんでそうなった」

ばばあ曰く。

夏油は人目につかないよう空を(呪霊に乗って)飛んで移動している——便利だもんな、逃げやすいし。

夏油が顔を出していると術師に襲われる——禪院で大暴れしたもんな。

目出し帽などは犯罪者っぽいので嫌だそうで、もしもの時に包帯にできるから顔に晒しを巻くことにしたらしい——おいバカ止めろ。

風を遮るものがないから上空では強風が吹く——せやな。

強風で晒しがほどけるので、夏油は鏡もなしに何度もそれを巻き直していた——あほうか。

理詰めで考える奴が真剣に暴走するところになりますとゆるい笑えない失敗例をどうにかしてやろうとばばあが気が遣った結果がスーパーサ○ヤ人だと聞いて、甚爾は両手で

顔を覆った。もつと他にやりようはなかったのか。あんまりバカバカしくて笑えばいいのか泣けばいいのか分らない。

そんなところにニコニコ笑顔の悟が教官室の鍵を破壊して「とーじー、俺ゴッドマーズになったー!」と飛び込んできてみる。

「ノオ——ツ!! もーイヤツ! この学年!」

「あたしきんどーちゃん四十歳!」

「おだまり! さっさと卒業しろ!」

ママーツうーうううー!

——硝子を持つ『傑くんと秘密の連絡手段』は何なのか。どーやって連絡取り合ってるのか。気になって調べたら腐つてたり夢に溢れてたりするサイトに辿り着いてしまった悟くんは混乱した。

サイトのトップページから跳べるMain Fには星○がベッドでセイヤツセイヤツしてる小説とか、馬イクに乗った青い甲冑の政宗くんが徒歩移動で赤い甲冑の幸村くんとフュージョン（隠語）してる小説とかが載ってて、Main Dには暗殺一家兄弟の長男とか犯罪集団のリーダーとか見所のある少年に股間を熱くする変態とかとド

キドキハラハラで(不健全な意味の)身体的接触を多々含む恋模様のドリーミングな小説が載っていた。このサイトの運営者はどちらもいける口らしい。青少年らには絡み合ってもらいたくて、年上には甘やかされたいんだろう。

まさか本当に硝子がこれを書いているのか? 信じたくなって空を見上げたけど、自室の天井しか見えない。

だってまだ硝子も悟も十八になってから一年くらいしか過ぎてないのに、十八禁作品の数が多すぎる。見れば更新日時が二年前とか三年前とかのものもある。十八歳以下が書いてる十八禁とはこれいかに——「これ書いているの亜美ちゃん? b y l e i ちゃん」とMail Formで送信したらだいたい一分後、上の階にある硝子の部屋から「ふじこー!」とゆる悲痛な叫び声が聞こえた。ルパン○世を見てるんだろきっと——そのはず。

薄いドアが壁に叩きつけられる音、廊下と階段の床を勢い良く踏み潰す音、そして外開きのドアを内側に蹴り倒して飛び込んできた血走った目の硝子を、悟は悟った表情で迎えた。

「硝子……」

反応しなければ否定できたのに。

「あの……年末の有明? 付き合おうか?」



二時間後、直哉くんは三条のL○F Tでヘアケア用品について店員を質問責めにして  
いた。

しかし黄色い袋を手にかけて自動ドアを潜った瞬間、気がつく。自分の頭にヘアイン  
テークとか地獄やん、と。自分の髪型をヘアインテークにしても、鏡を使わないと見れ  
ない、自分の頭にだと萌えない、自分じゃあかん……ヘアインテークがあつても違和感  
なくて自分の好きに出来る存在なんて——あるやん。

「ええか、これからお前らの頭は俺のもんや。髪の毛一本たりとも損ないなや」

次期当主の呼び声高い男に呼び出された双子は、混乱で頭がショート寸前になりなが  
ら頷いた。

投射呪法ってそーゆー使い方するもんやっただけ？

国数英社理の基本科目を教えるならまだしも、呪術の常識やら知識やらを教えるのに  
大学進学は必要ない。高専を卒業した悟は「ほかあ高専の正式な教師でえす」って名乗  
るための資格だけ取得して高専に舞い戻り——ケツの固い七海たちは入れ替わりに卒  
業して大学生と補助監督になり、お尻が青くて柔らかい一年生は夢と希望に瞳輝かせな

がら入学した。そんな目をしちやつて……新入生（二名）は入学する先を間違えてるんではなかるーか。

蟻が十ならミミズは二十歳なよーに、悟はもう二十歳でめぐくんは七つだ。干支一回りに一本足が出るから実質的に一歳差と言つて差し支えない。

悟が資格取得のためにあつちへ走りこつちへ飛びつて駆け回つてた間に、めぐくんは小学二年生になつていた。いつの間にこんなになつて大きくなつて。

大きくなつたとは言えまだ低学年だし、授業は五時間目で終わり。でも一人で帰るには遠いし危ないんで菜々子と美々子の授業が終わるまで待つのが常だ。甚爾に『めぐくんたちお迎え係』を任命されたなんちやつて教員の悟は、めぐくん連れてコンビニに入つていちごミルク二つ買つて駐車場の車止めに座つた。じつと大人しくミミナナを待つなんてナンセンス。買い食いは罪ではない、空腹が罪なのだ。

200ミリなんてすぐ飲みきるもんで、ストローがずこーつて濁音を響かせる。

「はー、めぐくんもう二年生。はえーなあ。よく知らねーけど二年生んなつたら掛け算するんだっけ？　もしかして三年生から？　いんいちがいちーいんにがにーつてやつ」

「めぐくんじゃなくつて恵ね！　あと……何？　変な呪文」

硝子が「あたしや足し算も好きだがね、掛け算が一等好きなんだよ……掛け算の極意、教えてやろうか」つて悟の脳内で囁いてたけど無視した。

「そのうち小学校でやるさ、楽しみにしてな」

そー言つてめぐくんの頭を撫でようと手を伸ばし——悟は途中で手を止めた。学校と言つたとたん顔をしかめられたらそりや、学校で何かあつたんだなつて一目で分かる。

腰を浮かせて体の向きを変え、悟は改めてめぐくんの頭を撫でる。

「がっこで何かあつたか？」

「なんも」

何も無いつて顔じゃあない。

「授業面白くないとか」

「んーん」

そんな問答が何度か続いて、めぐくんはため息を吐いた。

「はあ……悟しつこい。しかたないから教えたげるよ。しよーがっこーはね、大変なんだ」

「そーなの？」

「うん。クラスの奴らみんな猿みたいに落ち着きがないし、せんせーはヒステリーだし、どーぶつえんの猿山の方が静かだと思う。美々子たちのクラスも似たよーな感じだつて言つてた」

「わあ……」

「コーセンはみんな大人だから猿みたいな声出さないし、せんせーもキーキー言わないよね……。僕、しよーがっこーじゃなくてコーセン通いたい」

ひでえ言い様である。小学校の同級生も担任も猿以下とゆるーわけだ。悟は「そっかあ」とだけ言つて後は黙つた。ごめんさい、こんな時どんな返事をすれば良いのか分からないの。

大人や大人に成らざるを得ない立場の未成年らに囲まれて育つたためぐくんや、理不尽に晒されて育つたミニナナにとつて、同級生は知能が足りない猿なんだろう。うつきーつて鳴いてるとしか思えないだろう——メロンは野菜ですウキツウキツ！

「ま、『小学校なんてもう嫌だ我慢ならん』つてなつたら休みやいーさ」

「休んで良いの？」

「小学校行かなくても立派な大人になれるよ。俺小学校も中学校も通つてねーもん」

「え、悟が立派な大人……」

「なにおう一般からこの界限に入った奴らからは『常識的な方の五条さん』つて評判なんだぞ」

悟は小学校にも中学校にも通つてない。家庭教師が付けられていたが、おおよそ一般的な『児童教育』とゆるーものを受けたことがない。普通に考えたら常識知らずに育つて

たはずだけど、「普通」を知ってる者たちから五条は評判が良い。

甚爾に出会わなかったら——甚爾があの時「強く生きろよ」と声をかけてこなかったら、今の悟はいない。きつと周囲を見下して斜に構えた人間になってただろう。

「で、学校に行かないんなら習い事行きな。塾でもいい」

「塾？　なんで？」

「友達や年齢の違う人たちと関わるのが、めぐくんを強くしてくれるからさ」

悟に常識を教えてくれたのは、(一人ぼっち学年だから)セーラーブルートちで、歌姫で、冥冥で、ルナでアルテミスで戸愚呂仮面で、セーラームーンるでマールキューリーこで、ゼロスで、リタで、甚爾だった。小学校にも中学校にも通えなかったけど、出会った人達で悟の内面を磨いてくれた。

小学校のチャイムが響いた。あと十分くらいしたら美々子と菜々子が出てくるだろう。

「正門前戻るか」

平たく潰した紙パックをゴミ箱に放り込んで、めぐくんの速さで小学校に戻った。

## その27（お呼びでない急転直下？）

甚爾も悟もない毎日は「暇」の一言に尽きた。指折り数えれば、二人がリタの山に出入りするよーになってからもう十五年以上。知らぬ間に二人の存在はリタの毎日に欠かせないものになっていた。

「暇だわー」

口に出すくらい暇だったから、リタは漫画を読んだ。だってほら魔法は想像力あつてこそだからウン他人の作り出した想像を参考にして新しい魔法を作つたらいいじゃない？——つて自分で自分に言い訳して月刊少年ジ○ンプを寝転がつて読み、びびびつと天恵を得た。

「魔砲ほしー」

銃はロマンだし魔法も（一般的には）ロマン。ロマンとロマンを掛け合わせればこれこそ男のロ・マン。

とゆーわけでリタは倉庫に仕舞いこんでた銃をいじり回し、いかに魔砲っぽい銃を作るかつて研究をだいたい二年——しかしリタが思うよな魔砲は未だ作れなかった。

誰しも合う合わない、向き不向きとゆーやつがある。研究や開発が得意な魔道師なら

まだしも、リタは理論より感覚派の魔道師なのだ。まず理論の構築から行き詰まり、どうにかそれらしいものを作ったはずがあれもこれもと詰め込もうとしたせいで魔法式がスパゲツチーコード化したとゆー壁にぶち当たり……一歩進んで二歩下がる一日一本三日で三本と迷走を繰り返し、そしてロマン武器製作を諦めた。合わないことするもんじゃないね。

で。いじり倒した拳銃やらライフルやらを物置に放り込んで、『近々L様が伏黒家のベビーとして爆誕してしまう問題』をどうしたもんかと考えてたところに悟から「かめは○波か螺○丸を撃てるような道具くれ」とゆー依頼。リタは悩んだ——魔砲製作で七転八倒した記憶はまだ新しい。

断るか?——いや、断るのはなんか嫌<sup>ヤ</sup>だ。リタのプライドが許さん。

ひんひん言いながら素材を用意して、L様の爆誕問題から目を逸らしながら加工して、どーにかそれっぽいのが完成した時には三ヶ月近くが過ぎていた。

「もう二度とこんな作らないからね……もう本当に無理。どんだけ頼まれたとしても絶対作らないわよ」

「あんがとなリタ。きつと傑も喜ぶぜ!」

「人の話聞いてる?」

良い子の悟くんはウンウン頷いた。悟くんだってちゃんと分かっているのだ——これ

を作るのに三ヶ月も掛かったことは、リタはあんまりこーゆー工作が得意じゃないんだらう。

その螺○丸グロブの納品からの一年は瞬く間に過ぎていった。

山に住人が増え、リタは過度のシャブ吸いによる消化不良でダウンそして復調。京都や大阪ではスーパーサイ○人がかめは○波ならぬよなおし波を乱発し、東京ではゴ○ドマーズが「相手の攻撃を」避けないんじゃない、避ける必要がないのさ」とイキつてアニメーターの作画コスト削減に取り組んでる。ゼロスはリタの身代わりとしてL様の生け贄にされながらもスレイヤーズ世界とこちらの世界を行き来して情報収集やらなんやら。まるで坂を転がり落ちるボールのごとく、何度も跳ねながらぐんぐんと時間の流れはスピードをあげていき、そして。

悟が高専を卒業してすぐの夏、シャブラニグドウの魂の欠片を持つ者が新たに見つかった。スレイヤーズ世界では既に成人扱いされる十七歳の少年——名前はリオノⅡインバース。自他共に認める天才魔道師だとか。

二千年前にシャブラニグドウの欠片を二つも消滅させたりナⅡインバースのヤバイ姉の子孫か父方親族の子孫だらう。リナⅡインバースはガウリイⅡガブリエフと結ばれたため彼女の子孫はガブリエフ姓を名乗っている。

報告書を見下ろしインバースの文字をなぞる。歴史は繰り返されるのか。ここに来

てドラまたの家系が壁として現れたのには理由があるのでは。

リオーノインバースの持つ欠片を取り込んだら、リタは七分の三になれる。だけど彼と関わることでレゾやルークみたく消滅する羽目になったら……リオーノインバースの持つ欠片は後回しにするか？ 先に北の魔王から欠片を取り込んでしまつて、リオーノインバースに押し負ける可能性を叩き潰してから動くべきか。それとも残る一人の欠片の持ち主が見つかるのを待つか。だがその最後の一人はいつ見つかる？

五年後？ 十年後？ もしかすると三十年後とかになるかもしれない。

既に欠片の持ち主だと分かっているリオーノインバース、いつ見つかるとも分からない残る一人、北の魔王。一番楽に欠片を取り出せるのは北の魔王だが、北の魔王には竜王による監視がついている。北の魔王を取り込んでしまえばこちらの動きが感付かれてしまう――

この世界に生まれたL様はどんどん成長している。甚爾や恵と関わりこの世界の様々なことに触れ、二人とこの世界への執着心を日ごとに肥大化させている。

これがドーユーことかつてユーと、さつさとL様を混沌の海に戻さないとヤバいつてことだ。残された時間はそんなに長くないだろう。期限はそう、分かりやすく区切ろう。L様が十歳になるまで。

「ゼロス」

リタはぎゅつと目を閉じた。どれもハイリスク。ならば、まだ可能性のある方に賭ける。

「リオーノインバースは捕獲しなくても良いわ。だけど竜王の目が届かないような場所です。留めしてちょうだい——僕には私から伝えるわ」

無事リタは腹痛に沈み、これでシャブラニグドウの魂は七分の三。竜王はそれぞれ四分の一だから各個撃破できるならリタが優勢だが、竜王二人や三人を一度に相手すればリタが負ける。

もう一人シャブラニグドウの欠片の持ち主が現れば七分の四、そして最大にして最古の覚醒者レイマグナスを取り込んでしまえば七分の五。最低で七分の四、できるなら七分の五——そうすれば、スレイヤーズ世界に混沌を呼び戻すことができる。

それから数年——L様が九歳になる年の春……東京の高校でいじめっ子四人がロツカーに畳み込まれるという怪事件が発生。現場にいた虐められっ子・乙骨憂太は呪術連によりその身柄を保護——確保され、三権の分立なき会合により、秘匿死刑の判決が下される。

「許せないよねえ……過剰防衛は悪なのか？ 力に振り回される少年を導いてこそその大人なんじゃないのかい？ 君たちもそう思わないか」

そんな陰湿な行為がこの世で一番大嫌いな男は、長い黒髪を金色に染め上げながら眩

いた。ラスボスか秘密結社のリーダーみたく大物感に溢れている。

彼が報告書の束をばさりと一枚板のテーブルに放れば、成人した塾生らが「はい、塾長」と声を揃える。

九年前は二桁しか倒せころせなかつたが、今度は三桁を、いや、塵殺を目指そう。腐った髓液を入れ換えよう。病んだ骨髓からは冒された血しか生まれないのでから。

「ならば我々は大人の義務を果たそうじゃないか。……革命を始めよう」  
塾生に通知が回る。もちろんそれは、葵にも。

へミレニアム塾生(9)? ? ? 三

今日

部長

塾長から→確認と回答たのめます 18:07

ゆきのんラブ

俺ら未成年だから今回の件に関係ないのでは

ボブはいぶかしんだ 18:31

花田

正義の題目の下暴れられると聞いて 18 : 37

花田

あ、おちんぎんは出ますか？ 18 : 38

達也

@花田 嫌だわこの人またお金の話ばかり 18 : 41

花田

間違えた

おち○ちんは出ますか？ 18 : 42

? K a n a ?

はなだしねきえろかす

@部長 確認しました。サポートならいけます 18 : 45

既読319 : 01 高田ちゃんの個握と被るようなら不参加で

∨ ?

?  
♪